

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第43集

彦 松 遺 跡
下 本 郷 遺 跡
大 竹 遺 跡 II・III
瀬戸山古墳群第14号墳

—市内遺跡発掘調査報告書VIII—

2 0 2 2

埼玉県熊谷市教育委員会

彦松遺跡・下本郷遺跡・大竹遺跡Ⅱ・Ⅲ・瀬戸山古墳群Ⅳ長久墳・市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ
二〇二二
埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第43集

ひこ まつ い せき
彦 松 遺 跡
しも ほん こう い せき
下 本 郷 遺 跡
おお だけ い せき
大 竹 遺 跡 II・III
せ と や ま こ ふ ん ぐ ん だ い こう ふ ん
瀬戸山古墳群第14号墳

—市内遺跡発掘調査報告書VIII—

2 0 2 2

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富んでいる上、我が国及び関東を代表する2大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種開発が行われ、遺跡を保護保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っています。

本書は、平成28年度に実施された彦松遺跡及び下本郷遺跡、平成30年度に実施された大竹遺跡及び瀬戸山古墳群第14号墳の発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原晃

例 言

- 1 本書は、市内遺跡Ⅷ「彦松遺跡、下本郷遺跡、大竹遺跡Ⅱ・Ⅲ、瀬戸山古墳群第14号墳」の発掘調査報告書である。

彦松遺跡	埼玉県熊谷市妻沼字彦松1723番17所在	(埼玉県遺跡番号61-053)
下本郷遺跡	埼玉県熊谷市今井字下本郷839番1所在	(埼玉県遺跡番号59-117)
大竹遺跡(第2次調査)	埼玉県熊谷市西別府字瀬下1686番6所在	(埼玉県遺跡番号59-003)
大竹遺跡(第3次調査)	埼玉県熊谷市西別府字瀬下1686番4,8所在	(埼玉県遺跡番号59-003)
瀬戸山古墳群第14号墳	埼玉県熊谷市平塚新田字前原518番1所在	(埼玉県遺跡番号59-027-27)

- 2 本調査は、全て個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査である。いずれも市内遺跡発掘調査等事業国庫補助金、県費補助金の交付を受け、熊谷市教育委員会が実施した。

- 3 本事業の組織は、各調査の「発掘調査の概要」のとおりである。

- 4 発掘調査期間は、彦松遺跡が平成28年9月5日～10月5日、下本郷遺跡が平成28年4月25日～5月27日、大竹遺跡の2か所が平成30年4月23日～5月25日及び同年5月29日～7月13日、瀬戸山古墳群第14号墳が平成30年8月6日～8月27日である。

整理・報告書作成期間は、令和3年4月1日～令和4年3月25日である。

- 5 発掘調査の担当は、彦松遺跡及び下本郷遺跡を熊谷市教育委員会金子正之(調査当時)が、大竹遺跡及び瀬戸山古墳群第14号墳を大野美知子が、それぞれ担当した。

また、整理・報告書作成は、彦松遺跡及び下本郷遺跡を熊谷市教育委員会吉野 健が、大竹遺跡及び瀬戸山古墳群第14号墳を大野美知子が担当し、第1章及び全体の編集について大野が担当した。なお、全体について、吉野が統括監修した。

- 6 本書の執筆は、整理・報告書作成を担当した吉野が第2章及び第3章を、大野が第1章、第4章及び第5章を分担して行った。なお、体裁や語句については、編集を担当した大野が全体を通して極力統一を図り、吉野がこれを補佐した。

- 7 写真撮影は、発掘調査を各々の担当者が行い、遺物については整理・報告書作成を担当した者が各々行った。

- 8 各発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。また、瀬戸山古墳群第14号墳の出土遺物実測にあたっては、その一部を株式会社シン技術コンサルに委託した。

- 9 出土遺物は、熊谷市教育委員会が保管している。

- 10 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します(敬称略)。

菅谷浩之 島村範久 埼玉県教育局生涯学習文化財課 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡例

- 本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。
SD…溝跡 SI…堅穴建物跡 SK…土坑 SZ…古墳 SX…堅穴遺構・性格不明遺構
P…ピット
- 土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。
S…川原石 P…土器 H…羽口 W…木片 M…銭貨
- 遺構挿図の縮尺は、原則として1/60であるが、それ以外のものは個別に示した。
- 遺構挿図中、遺物に添えてある番号は、該当する遺構の遺物挿図中の遺物番号と一致する。
- 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、原則として同一図版の標高は統一し、Aポイントに表記した。
- 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
土師器・須恵器・須恵系土師質土器・灰釉陶器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・埴輪壺・埴輪・羽口・土製品・石器・砥石…1/4 瓦…1/5 石臼…1/6
土錘・紡錘車・鉄製品・銭貨・種子…1/2
- 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、表現方法は、以下のとおりである。なお、煤、油煙、墨書は黒塗りで示した。
須恵器のうち還元焰焼成の断面：黒塗り、酸化焰焼成の断面：白抜き、灰釉陶器の断面：
上記以外の土師器等土器断面：白抜き 古代瓦断面：
釉薬のうち灰釉： 鉄釉： 錆釉： 鉄泥：
赤彩・朱墨： 墨付着箇所： 羽口・瓦の被熱変色： 被熱発砲化箇所：
底部調整 回転ヘラ削り \ 回転糸切り d 回転ナデ \
石器のうち敲打痕範囲： 磨り痕範囲：
- 遺物拓影は、原則として、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。
- 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。
法量の単位は、cm、gである。また、推定値は括弧付けで示した。
胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。
A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫
焼成は、次のように区分した。
A…良好 B…普通 C…不良
- 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。なお、下本郷遺跡については、図版に嵌め込みで示した遺物（陶器・磁器）については、原則として写真図版に掲載していない。
- 土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行）に照らし最も近似した色相を示した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
I 遺跡の立地と環境	1
II 彦松遺跡の調査	15
1 発掘調査の概要	15
2 遺跡の概要	19
3 遺構と遺物	21
4 調査のまとめ	36
III 下本郷遺跡の調査	41
1 発掘調査の概要	41
2 遺跡の概要	42
3 遺構と遺物	46
4 調査のまとめ	67
IV 大竹遺跡の調査	71
1 発掘調査の概要	71
2 遺跡の概要	74
3 遺構と遺物	77
4 調査のまとめ	96
V 瀬戸山古墳群第14号墳の調査	101
1 発掘調査の概要	101
2 遺跡の概要	103
3 遺構と遺物	109
4 調査のまとめ	117

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 彦松遺跡調査地点位置図	18
第4図 彦松遺跡調査区全測図(上:下面、下:上面)	20
第5図 彦松遺跡第1・2号竪穴建物跡	22
第6図 彦松遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物	23
第7図 彦松遺跡第2号竪穴建物跡出土遺物	26
第8図 彦松遺跡第2～5号土坑	29
第9図 彦松遺跡第1・2・5号土坑出土遺物	30
第10図 彦松遺跡第1～17号ピット	31
第11図 彦松遺跡第2・10号ピット出土遺物	32
第12図 彦松遺跡第1号土坑、第1号溝跡	33
第13図 彦松遺跡第1号溝跡出土遺物	34
第14図 下本郷遺跡調査地点位置図	43
第15図 下本郷遺跡調査区全測図(上:下面、下:上面)	45

第16図	下本郷遺跡第1号竪穴建物跡	46
第17図	下本郷遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(1)	47
第18図	下本郷遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(2)	48
第19図	下本郷遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(3)	49
第20図	下本郷遺跡第1号竪穴遺構	53
第21図	下本郷遺跡第1号竪穴遺構出土遺物	54
第22図	下本郷遺跡第1・2号土坑	55
第23図	下本郷遺跡第1・2号土坑出土遺物	56
第24図	下本郷遺跡第1～4号溝跡	57
第25図	下本郷遺跡第1～3号溝跡出土遺物	59
第26図	下本郷遺跡第4号溝跡出土遺物(1)	62
第27図	下本郷遺跡第4号溝跡出土遺物(2)	63
第28図	下本郷遺跡遺構外出土遺物(1)	64
第29図	下本郷遺跡遺構外出土遺物(2)	65
第30図	大竹遺跡地点位置図	73
第31図	大竹遺跡第2次調査・第3次調査区位置図	74
第32図	大竹遺跡第2次調査区全測図	75
第33図	大竹遺跡第2次調査区基本層序図	76
第34図	大竹遺跡第3次調査区基本層序図	76
第35図	大竹遺跡第2次調査第1～6号土坑、第1号性格不明遺構	78
第36図	大竹遺跡第2次調査第1・3号土坑、第1号性格不明遺構出土遺物	78
第37図	大竹遺跡第2次調査第1～20号ピット	80
第38図	大竹遺跡第2次調査遺構外出土遺物	81
第39図	大竹遺跡第3次調査区全測図	82
第40図	大竹遺跡第3次調査第1～6号土坑	83
第41図	大竹遺跡第3次調査第2・5・6号土坑出土遺物	84
第42図	大竹遺跡第3次調査第1～4号ピット	85
第43図	大竹遺跡第3次調査第2～4号ピット出土遺物	86
第44図	大竹遺跡第3次調査第1～5号トレンチ	88
第45図	大竹遺跡第3次調査第1～3号トレンチ出土遺物	89
第46図	大竹遺跡第3次調査第4号トレンチ出土遺物	90
第47図	大竹遺跡第3次調査第5号トレンチ出土遺物(1)	92
第48図	大竹遺跡第3次調査第5号トレンチ出土遺物(2)	93
第49図	大竹遺跡第3次調査遺構外出土遺物	95

第50図	瀬戸山古墳群分布図、瀬戸山古墳群第14号墳調査地点位置図	104
第51図	瀬戸山古墳群第14号墳基本層序図	108
第52図	瀬戸山古墳群第14号墳調査区全測図	109
第53図	瀬戸山古墳群第14号墳	110
第54図	瀬戸山古墳群第14号墳出土遺物(1)	111
第55図	瀬戸山古墳群第14号墳出土遺物(2)	112
第56図	瀬戸山古墳群第14号墳出土遺物(3)	113
第57図	瀬戸山古墳群第14号墳第1号性格不明遺構	115
第58図	瀬戸山古墳群第14号墳第1号性格不明遺構出土遺物	116
第59図	瀬戸山古墳群第14号墳遺構外出土遺物	116
第60図	瀬戸山古墳群第14号墳周辺現況・古地形図	118

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	5
第2表	彦松遺跡遺構番号新旧対照表	17
第3表	彦松遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表	24
第4表	彦松遺跡第2号竪穴建物跡出土遺物観察表	27
第5表	彦松遺跡第1・2・5号土坑出土遺物観察表	30
第6表	彦松遺跡ピット一覧表	32
第7表	彦松遺跡第1号溝跡出土遺物観察表	34
第8表	下本郷遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表	50
第9表	下本郷遺跡第1号竪穴遺構出土遺物観察表	54
第10表	下本郷遺跡第1・2号土坑出土遺物観察表	56
第11表	下本郷遺跡第1号溝跡出土遺物観察表	60
第12表	下本郷遺跡第2号溝跡出土遺物観察表	60
第13表	下本郷遺跡第3号溝跡出土遺物観察表	60
第14表	下本郷遺跡第4号溝跡出土遺物観察表	61
第15表	下本郷遺跡遺構外出土遺物観察表	65
第16表	大竹遺跡第2次調査遺構番号新旧対照表	76
第17表	大竹遺跡第3次調査遺構番号新旧対照表	76
第18表	大竹遺跡第2次調査第1・3号土坑、第1号性格不明遺構出土遺物観察表	79
第19表	大竹遺跡第2次調査ピット一覧表	81
第20表	大竹遺跡第2次調査遺構外出土遺物観察表	81
第21表	大竹遺跡第3次調査第2・5・6号土坑出土遺物観察表	84

第22表	大竹遺跡第3次調査ピット一覧表	85
第23表	大竹遺跡第3次調査ピット出土遺物観察表	86
第24表	大竹遺跡第3次調査第1～3号トレンチ出土遺物観察表	89
第25表	大竹遺跡第3次調査第4号トレンチ出土遺物観察表	90
第26表	大竹遺跡第3次調査第5号トレンチ出土遺物観察表	91
第27表	大竹遺跡第3次調査遺構外出土遺物観察表	96
第28表	瀬戸山古墳群一覧表	105
第29表	瀬戸山古墳群第14号墳出土遺物観察表	114
第30表	瀬戸山古墳群第14号墳第1号性格不明遺構出土遺物観察表	116
第31表	瀬戸山古墳群第14号墳遺構外出土遺物観察表	116
第32表	瀬戸山古墳群平塚新田地区古墳一覧表	117

図 版 目 次

図版 1	彦松遺跡 調査区全景 (東から)	
	彦松遺跡 第1・2号竪穴建物跡 (南から)	
図版 2	彦松遺跡 第1号竪穴建物跡遺物出土状況	
	彦松遺跡 第2号竪穴建物跡遺物出土状況	
	彦松遺跡 第1号土坑 (東から)	
	彦松遺跡 第2号土坑遺物出土状況	
図版 3	彦松遺跡 第3号土坑 (西から)	
	彦松遺跡 第4号土坑 (北西から)	
	彦松遺跡 第5号土坑 (北から)	
	彦松遺跡 第1号溝跡 (南から)	
図版 4	彦松遺跡 第1号竪穴建物跡	第6図1～6・24～26 土師器、 19～21・33 須恵器
図版 5	彦松遺跡 第1号竪穴建物跡	第6図7～18・22・23・27～32 須恵器
図版 6	彦松遺跡 第2号竪穴建物跡	第7図1～12・35～39 土師器、 43・45 須恵器
図版 7	彦松遺跡 第2号竪穴建物跡	第7図16～19・21～34・40～42・44 ・46 須恵器、20 須恵器 (朱墨付着)、 47 灰釉陶器
図版 8	彦松遺跡 第2号土坑	第9図1・2・6 土師器、3～5・7 須恵器
	彦松遺跡 第5号土坑	第9図1～3 土師器、4～6 須恵器
	彦松遺跡 第1号溝跡	第13図8

- 図版 9 彦松遺跡 第1号溝跡 第13図1～5・12 土師器、6・7・9～10・13
 ・14 須恵器、11 灰釉陶器、17 瓦、
 18・19 石器
 彦松遺跡 第1号竪穴建物跡 第6図34 石器
 彦松遺跡 第2号竪穴建物跡 第7図49 石器
- 図版 10 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 (南から)
 下本郷遺跡 第1号竪穴遺構 (北から、右上は第1号竪穴建物跡)
- 図版 11 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡遺物出土状況 (東から)
 下本郷遺跡 第1号土坑 (東から、左は第2号溝跡)
 下本郷遺跡 第1～4号溝跡 (東から)
- 図版 12 下本郷遺跡 第3号溝跡遺物出土状況【灯火具・受付皿、直刃鎌】
 下本郷遺跡 第4号溝跡遺物出土状況1【瓦】
 下本郷遺跡 第4号溝跡遺物出土状況2【羽口】
- 図版 13 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第17図8・10・15・16 土師器、
 17・19～22・27・28 須恵器
- 図版 14 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第17図31・33・36・38・39・41～43、
 第18図48・49 須恵器
- 図版 15 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第18図50・52～54・57 須恵器、
 第19図86 須恵器、
 第18図62・69・71～76 土師器
- 図版 16 下本郷遺跡 第1号竪穴遺構 第21図1～5 須恵器
 下本郷遺跡 第3号溝跡 第25図1～3 陶器
 下本郷遺跡 第4号溝跡 第26図1・2 陶器
 下本郷遺跡 遺構外 第28図2～6 陶器
- 図版 17 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第17図1～7・9・11～14 土師器、
 第18図58～61・63～68 土師器、
 第18図79～81 須恵器
 下本郷遺跡 遺構外 第28図7・8 陶器、15 瓦質土器
- 図版 18 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第17図24～26・29・30・32・34・35・37
 ・40・44～47 須恵器、
 第18図51・55・56・77・78・82・83 須恵器、
 第19図84・85 須恵器
 下本郷遺跡 第1号竪穴遺構 第21図6～9・13・14 須恵器、
 10・11 土師器

- 図版 19 下本郷遺跡 第1号溝跡 第25図2 陶器
 下本郷遺跡 第2号溝跡 第25図1 土師器、2～8 須恵器
 下本郷遺跡 第4号溝跡 第26図4・5 陶器、7～10 磁器、
 17・18・23～26 土師器、
 19～22・27 須恵器
 下本郷遺跡 遺構外 第28図1 土師質土器、10～13 陶器
- 図版 20 下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第17図23 須恵器(墨書)、
 第19図87 埴輪壺、90 石製紡錘車、
 91 土錘、88・89 石器
 下本郷遺跡 第1号竪穴遺構 第21図15 砥石
 下本郷遺跡 第2号溝跡 第25図4 銭貨【寛永通寶】
 下本郷遺跡 第3号溝跡 第25図9・10 石器
 下本郷遺跡 第4号溝跡 第27図28・30 石器、29 砥石
 下本郷遺跡 遺構外 第28図17・19 石器、18 砥石、
 第29図25 種子【桃】
- 図版 21 下本郷遺跡 第1号竪穴遺構 鉄滓
 下本郷遺跡 第1号土坑 第23図1 釘
 下本郷遺跡 第3号溝跡 第25図5・6 瓦、11 鎌、12 釘
 下本郷遺跡 第4号溝跡 第26図12～15 瓦、16 羽口
 下本郷遺跡 遺構外 第28図20 石臼、
 第29図21 刀子、23 釘、24 環状鉄製品
- 図版 22 大竹遺跡第2次調査 調査区全景(北から)
 大竹遺跡第2次調査 第1～3土坑 第35図SK1-1・SK3-1～3
 第1号性格不明遺構 第35図SX1-1
 遺構外 第37図1～6
- 図版 23 大竹遺跡第3次調査 調査区全景(東から)
 大竹遺跡第3次調査 第2号ピット 第43図2-1・4
 大竹遺跡第3次調査 第2号トレンチ 第45図2-4
 大竹遺跡第3次調査 第4号トレンチ 第46図4-6・7
- 図版 24 大竹遺跡第3次調査 第2・5・6号土坑 第41図2-1、5-1～4・6、
 6-1～4
 大竹遺跡第3次調査 第2～4号ピット 第43図2-2・3、3-1、
 4-1・2
 大竹遺跡第3次調査 第1号トレンチ 第45図1-1～8

- 大竹遺跡第3次調査 第2号トレンチ 第45図2-1～3・5～7
第3号トレンチ 第45図3-1～4
- 大竹遺跡第3次調査 第4号トレンチ 第46図4-9・11
- 図版25 大竹遺跡第3次調査 第4号トレンチ 第46図4-1～5・8・10・12～19
大竹遺跡第3次調査 第5号トレンチ 第47図5-1～10・12・15・17～23
・25・26
第48図5-27～41
- 大竹遺跡第3次調査 遺構外 第49図1～19
- 図版26 瀬戸山古墳群第14号墳 調査区全景（南西から）
瀬戸山古墳群第14号墳 周溝遺物出土状況（南から）
- 図版27 瀬戸山古墳群第14号墳 第54図1～4
- 図版28 瀬戸山古墳群第14号墳 第54図5～8
第56図37
- 図版29 瀬戸山古墳群第14号墳 第55図9～20
第56図21～36・38
- 瀬戸山古墳群第14号墳 第1号性格不明遺構 第58図1
遺構外 第59図1～3

I 遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成17年及び平成19年の二度に亘る合併を経て、平成19年当時県北初の20万都市となり、平成21年4月から「特例市」として現在に至っている。しかし、近年は人口減少が見られ、現在の人口は20万人をやや下回っている。令和2年の国勢調査当時の人口は192,535人であり、埼玉県で9番目、県北では最大の人口を有する都市である。また、市域は南北に約20km、東西に約14kmと広大であり、面積は159.82km²である。

市域の北側には群馬県との境に利根川が、南側には大里地区及び江南地区との境を荒川が、それぞれ西から南東へと流れており、この関東地方の2大河川が最も近接する地域にある。地形的には、市域の西部に櫛挽台地があり、荒川を挟んで南部には江南台地及び比企丘陵、北部及び東部には妻沼低地が広がっている。また、荒川以北の櫛挽台地の東部には、新期荒川扇状地がある。このように、市域内の地形は丘陵・台地・低地と変化に富み、太古の昔から人々が生活の場としてきた歴史ある地域である（第1図）。

櫛挽台地は、更新世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、西部の寄居町波久礼付近を扇頂として、東の扇端は、市内三ヶ尻付近からJR高崎線籠原駅付近を通り北東へ、そして、籠原駅から北へ約2kmの西別府付近まで延びている。市域内にある南東側の低い面は寄居面と呼ばれ、今から2～5万年前の立川期に形成されたものである。台地の標高は約36～54mを測り、新期荒川扇状地から妻沼低地へ向かって緩やかに下る。荒川に面した台地南東端には、第3紀層の残丘であり独立丘陵である標高81mの観音山があり、台地との比高差は約25m、神積低地である新期荒川扇状地との比高差は約35mを測る。

妻沼低地は、新期荒川扇状地と下流に形成された微高地である自然堤防や微低地である後背湿地の地帯に分けることができ、櫛挽台地の東側に広がる完新世に荒川の乱流により形成された新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として、東は市内上之へ小曾根・肥塚付近、北は上



第1図 埼玉県の地形図

奈良・下奈良付近へと扇状に広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

一方、荒川右岸には、櫛挽台地と同様に更新世に形成された外秩父山地に沿った台地群があり、市内には北から、荒川と江南台地に挟まれた立川期段丘面、江南台地がある。立川期段丘面は、寄居面の連続と考えられるもので、江南台地の北側に連続しており、周囲の沖積低地との比高差は1m以下である。江南台地は、幅約2kmほどの東西に細長い台地であり、台地面の標高は西部の寄居町立原付近で140m、東へと徐々に低くなり、東端の市内楊井付近で45mとなっている。この江南台地の南には、和田川を挟んで、西の外秩父山地から半島状に突き出した形の比企丘陵があり、丘陵内には開析が進んだ標高70～90mの山が連なっている。

今回報告する遺跡は、彦松遺跡(1)、下本郷遺跡(61)、大竹遺跡(45)及び瀬戸山古墳群中の第14号墳(X)である。

彦松遺跡は、市内北部の利根川右岸、そして福川の幾条にもある支流の一つである芝川が利根川に向かって大きく蛇行する右岸、標高約29～30mの妻沼低地の自然堤防に立地する遺跡である。JR高崎線熊谷駅からは北西へ約9kmにある。

下本郷遺跡は、熊谷市北東部の中央寄り荒川左岸、標高26.5m前後の妻沼低地の微高地(自然堤防)に立地する遺跡である。JR高崎線熊谷駅からは北へ約4kmにある。

大竹遺跡は、市内西端部に位置し、櫛挽台地北東端縁辺部に所在し、標高34mを測る。また、JR高崎線龍原駅の北約1.3km、荒川から北へ約5.3km、利根川から南へ約5kmの距離にある。

瀬戸山古墳群第14号墳は、市内南部、荒川右岸の荒川に面した江南台地の東端、吉野川に面した標高約44mを測る台地の北端付近に立地し、JR高崎線熊谷駅からは南西へ約3.5kmにある。

では、周辺の歴史的環境について概観する(第2図、第1表)。

旧石器時代から縄文時代までの遺跡は、市内西部及び荒川右岸に多くみられ、地形的には櫛挽台地及び台地直下の妻沼低地に集中する。旧石器時代については、櫛挽台地東端に立地する龍原裏遺跡(48)から出土した黒曜石の尖頭器のほか、荒川右岸の江南台地に立地する鹿島遺跡(154)、本田・東台遺跡(165)、萩山遺跡、向原遺跡、宮下遺跡、塩西遺跡(いずれも地図未掲載)においてナイフ形石器が、同じく江南台地の寺内遺跡、上原原遺跡、天神遺跡、山神遺跡、宮下遺跡、千代西原遺跡(いずれも地図未掲載)において槍先形尖頭器が出土している。また、上原原遺跡からは非北方系の細石刃核が出土し、深谷市(旧川本町)に北方系細石刃を出土した白草遺跡(地図未掲載)が所在する。

縄文時代については、草創期は萩山遺跡(地図未掲載)で有舌尖頭器や爪型文土器が出土している。

早期の遺跡は、江南台地東部に多く見られ、県内有数の集落跡の萩山遺跡ではスタンプ型石器が200点以上、船川遺跡(地図未掲載)では竹之内式と称される貝殻沈線文土器が出土し、山形押型文土器・無文土器との伴関係が確認されている。他には、鹿島遺跡、野原宮脇遺跡(166)、南方遺跡(地図未掲載)において燃系文期後半の堅穴住居跡が検出されている。

続いて、前期は次第に遺跡数が増え始め、荒川を挟んで江南台地の対岸である櫛挽台地の三ヶ尻遺跡(地図未掲載)において集落跡が確認されている。江南台地においては、人々の生活痕跡は西部に移り、富士山遺跡(地図未掲載)において諸磯式期の堅穴住居跡を3軒検出するのみである。

中期になると遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曾利E式期の遺跡が多くなる。前期とは異なり、台地以外の低地にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の低地に集中する。一方で、江南台地においては、引き続き権現坂遺跡、富士山遺跡、寺内遺跡、上前原遺跡等（いずれも地図未掲載）で加曾利E式期の竪穴住居跡が見られる。

後期になると遺跡数は減少し、妻沼低地へと移る傾向が見られる。西城切通遺跡（33）、場違ヶ谷戸遺跡（116）、中西遺跡（80）等の櫛挽台地から離れた低地でも遺跡が確認されるようになる。この時期の屋外埋甕が、宮下遺跡、萩山遺跡（いずれも地図未掲載）において確認されているが、いずれの遺跡も小規模である。

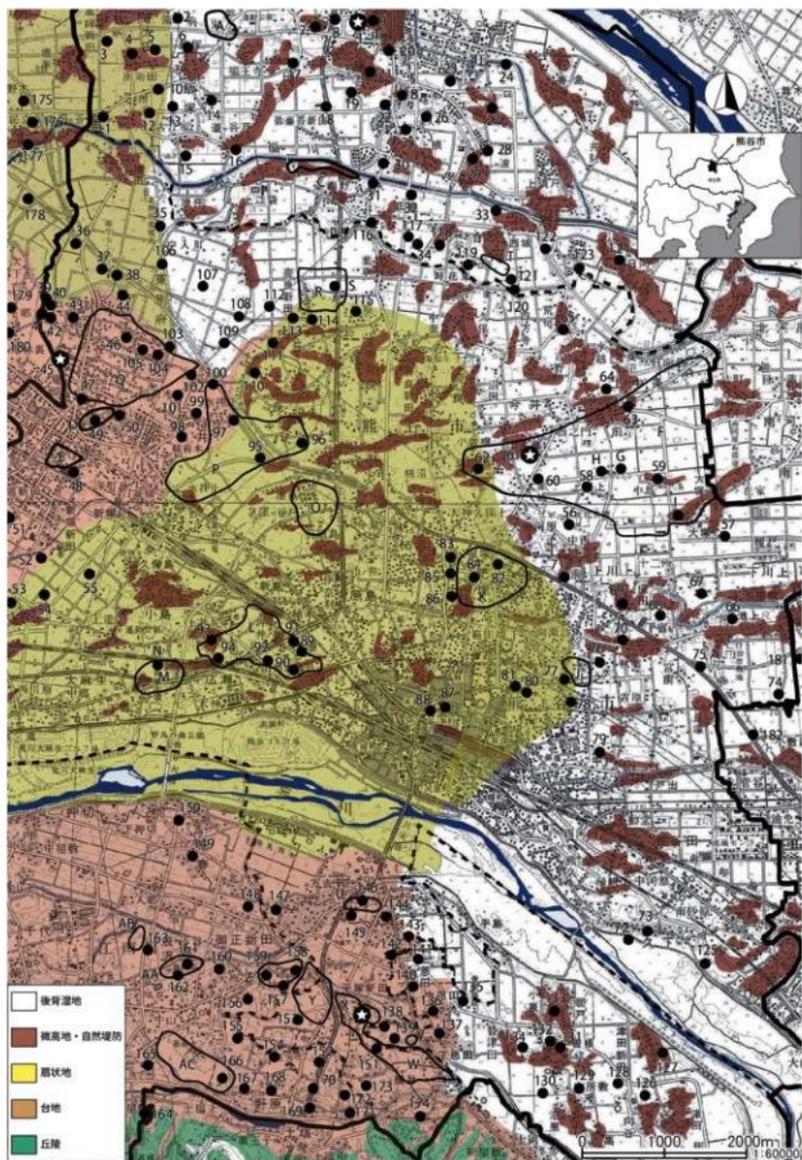
晩期は、遺跡数がさらに減少する。市内東部では低地上に立地する諏訪木遺跡（76）や中西遺跡で集落跡が確認されている。台地上については、特に江南台地では活動の痕跡をほとんど認めることができない。

弥生時代では、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期前半の遺跡が櫛挽台地北東端及び台地下の低地に集中するが、確認されたのは集落跡ではなく再葬墓である。横間栗遺跡（37）では、前期末から中期前半までの再葬墓が13基検出されており、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定有形文化財になっている。また、深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）、飯塚南遺跡（13）等でも再葬墓が検出されており、上敷免遺跡では包含層から県内初の遠賀川式土器の壺胴部破片も出土している。

中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市内東部の低地に集落が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落とその墓域として方形周溝墓が検出された池上遺跡（75）、行田市小敷田（条里）遺跡（182）等をはじめ、集落とこれに付随する墓域がセットとなり本格的に展開するようになる。中期後半には、前中西遺跡（78）、諏訪木遺跡、北島遺跡（56）等でも集落が営まれ、墓域として前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡（77）では方形周溝墓が検出されている。特に、前中西遺跡範囲中央西寄り南側では、多数の方形周溝墓が検出されており、集落ととも後期初頭まで続くことが明らかとなっている。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されているが、特筆すべきは、当時本格的な水田経営が行われていたことを物語る、水田へ導水する水路跡・堰跡の灌漑施設が水田跡とともに検出され、その規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目される。このように北島遺跡や前中西遺跡等で大規模集落が展開するようになるが、後期については、市内北部及び西部では確認例が少なく、深谷市明戸東遺跡（地図未掲載）等の遺跡がいくつか点在するのみである。なお、後期初頭以降については、前中西遺跡、藤之宮遺跡で土器片が若干出土しているが、遺構は確認されていない。中条条里遺跡（57）に含まれる東沢遺跡、行田市池守遺跡（181）では、吉ヶ谷式土器が出土している。また、市内南部の荒川右岸の江南台地では、姥ヶ沢遺跡、富士山遺跡（いずれも地図未掲載）が、当該期の集落として確認されている。

古墳時代になると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地のみならず低地の自然堤防にも活発に営まれるようになり、低地への進出がより活発化し、次第に遺跡数も増加傾向にある。

前期の遺跡は、近年確認例が増加している。弥生時代から引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、特に北島遺跡では大規模な集落が営まれ、墓域も形成されて



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	熊谷市				
1	彦松遺跡	古墳後、奈良、平安	54	黒沢館跡	中世
2	飯塚北遺跡	古墳後、奈良、平安	55	東遺跡	平安、中世
3	本新田遺跡	古墳後	56	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世
4	前新田遺跡	古墳後、奈良、平安	57	中条赤里遺跡	古墳前・中、奈良、平安
5	藤原敷遺跡	古墳後、奈良、平安	58	女塚遺跡	古墳後、奈良、平安、中世
6	飯塚遺跡	弥生中	59	上中条中島遺跡	古墳後、奈良、平安
7	年代遺跡	古墳後	60	赤城遺跡	古墳、奈良、平安
8	彦松西遺跡	古墳後、奈良	61	下本郷遺跡	古墳後、奈良、平安、近世
9	彦松東遺跡	古墳前、奈良、平安	62	東浦遺跡	古墳前、平安
10	中西原遺跡	奈良、平安	63	中条遺跡	古墳、奈良、平安
11	踏切遺跡	平安	64	中条氏館跡	中世
12	八幡木遺跡	古墳後、奈良	65	光原敷遺跡	古墳後、奈良、中世、近世
13	飯塚南遺跡	縄文後、弥生中、古墳後、奈良、平安、中世	66	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良、平安、中世、近世
14	羽黒遺跡	古墳後	67	上河原遺跡	奈良、平安、中世、近世
15	道ヶ谷戸赤里遺跡	奈良	68	宮の裏遺跡	古墳後
16	道ヶ谷戸遺跡	古墳後、平安	69	成田遺跡	古墳後
17	中浦遺跡	奈良、平安	70	成田氏館跡	中世
18	弥生寺新田遺跡	古墳前、奈良、平安	71	河上氏館跡	中世
19	一本杉遺跡	古墳後、中世、近世	72	久下氏館跡	中世
20	下宿遺跡	古墳後	73	市田氏館跡	中世
21	杉之道遺跡	古墳後、奈良、平安	74	鶴巻遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良、平安
22	王子西遺跡	古墳後、奈良、平安	75	池上遺跡	弥生中、平安
23	堀ノ内遺跡	縄文後、古墳後	76	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世
24	釜ノ上遺跡	奈良	77	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世
25	長井堀遺跡	古墳後	78	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世
26	出口北遺跡	古墳後	79	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中世、近世
27	出口南遺跡	古墳後	80	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前
28	東郷愛遺跡	奈良、平安	81	簡田氏館跡	平安末、中世
29	西郷愛遺跡	古墳後、奈良、平安	82	八幡上遺跡	古墳後
30	高林遺跡	古墳後、奈良、平安	83	肥塚中島遺跡	奈良、平安、近世
31	夷盛館	平安	84	出口下遺跡	古墳後
32	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安	85	出口上遺跡	奈良、平安、中世、近世
33	西城切通遺跡	縄文後	86	肥塚館跡	中世
34	鷹ヶ谷戸遺跡	奈良、平安	87	宮町遺跡	奈良、平安、中世
35	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	88	熊谷氏館跡	中世
36	根路遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良、平安	89	兵部義原敷跡	中世
37	横間楽遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・中、奈良、平安、近世	90	御蔵塚跡	近世
38	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	91	天神前遺跡	古墳中・後、中世
39	西別府祭壇遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世	92	田角遺跡	平安末、中世
40	西方遺跡	奈良、平安、中世、近世	93	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中世、近世
41	西別府遺跡	古墳後、奈良、平安	94	不二ノ膳遺跡	奈良、平安
42	西別府庵寺	古墳後、奈良、平安、中世、近世	95	下河原上遺跡	近世
43	西別府館跡	平安末、中世	96	本代遺跡	古墳後、近世
44	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	97	下河原中遺跡	奈良、平安
45	大竹遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世	98	稲荷木上遺跡	古墳後
46	埋島遺跡	縄文中、奈良、平安	99	水押下遺跡	古墳後
47	別府三丁目遺跡	奈良、平安	100	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安
48	龍原裏遺跡	旧石器、縄文前・中、古墳後、平安、中世、近世	101	玉井陣屋跡	平安末、中世
49	在家遺跡	古墳後、奈良、平安	102	稲荷東遺跡	古墳後、奈良、平安
50	五反畑遺跡	中世	103	寺東遺跡	縄文中・後、古墳後、平安
51	捨六間後遺跡	古墳後、奈良、平安、中世、近世	104	別府氏館跡	平安末、中世
52	種の上遺跡	古墳中・後、奈良、平安	105	別府城跡	平安、中世
53	若松遺跡	中世、近世	106	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良、平安
			107	別府赤里遺跡	奈良、平安

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
108	一本木の遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良、平安、中世、近世	162	合羽山遺跡	縄文、奈良、平安、中世
109	天神下遺跡	古墳前・後、奈良、平安	163	代遺跡	縄文中、中世
110	奈良氏館跡	平安末、中世	164	石橋山遺跡	縄文中、古墳前
111	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安	165	本田・東台遺跡	旧石器、縄文早、古墳中・後、奈良、平安、近世
112	中耕池遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良、平安	166	野原宮脇遺跡	縄文早、古墳後、奈良、平安、中世、近世
113	西通遺跡	古墳後	167	諏訪脇遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世
114	東通遺跡	古墳後	168	元坂内遺跡	縄文、古墳中・後、奈良、平安、中世、近世
115	横塚遺跡	古墳前、平安	169	熊野遺跡	縄文早、古墳、奈良、平安、中世
116	場邊ヶ谷戸遺跡	縄文後	170	荒神脇遺跡	縄文早～後、古墳、奈良、平安
117	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良、平安	171	丸山遺跡	縄文早、中、古墳、奈良、平安
118	森谷遺跡	古墳後、奈良、平安	172	丸山浦遺跡	縄文早、古墳、奈良、平安、中世
119	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良、平安	173	楊井前原遺跡	古墳後
120	長安寺遺跡	古墳後、奈良、平安	174	安通寺遺跡	古墳後
121	西城城跡	平安	探谷市		
122	東城城跡	平安	175	城北遺跡	古墳後、平安
123	先藏場遺跡	古墳後、奈良	176	原立遺跡	古墳後、奈良、平安、中、近世
124	八幡岡遺跡	古墳後、奈良	177	前遺跡	古墳前、奈良、平安、中、近世
125	大里桑里裡定地	奈良、平安	178	清水上遺跡	縄文晩、弥生中、古墳前・後、奈良、平安
126	北町遺跡	奈良、平安	179	幡羅宮前遺跡	古墳後、奈良、平安、中、近世
127	星町遺跡	奈良、平安	180	下郷遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良、平安
128	中街遺跡	奈良、平安	行田市		
129	仲町遺跡	奈良、平安	181	池守遺跡	古墳前・後、奈良、平安
130	宮町遺跡	奈良、平安	182	小敷田(条里)遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安
131	宮前町遺跡	奈良、平安		古墳群、古墳	
132	宮前遺跡	奈良、平安	A	熊塚古墳群	古墳後
133	北方遺跡	奈良、平安	B	王子古墳	古墳後
134	西浦町遺跡	奈良、平安	C	上江袋古墳群	古墳後
135	高田遺跡	奈良、平安	D	在家古墳群	古墳末
136	西内手遺跡	縄文前、弥生後、奈良、平安	E	鹿原裏古墳群	古墳末
137	下恩田中町遺跡	奈良、平安	F	中余古墳群	古墳中・後
138	原北遺跡	奈良、平安	G	鶴塚古墳	古墳後
139	原南遺跡	縄文中、古墳、奈良、平安	H	女塚第1号墳	古墳後
140	三分一遺跡	奈良、平安	I	大塚古墳	古墳後
141	腰廻遺跡	奈良、平安	J	上之古墳群	古墳後
142	西浦遺跡	奈良、平安、中世	K	肥保古墳群	古墳後
143	塚本遺跡	古墳後、奈良、平安	L	石原古墳群	古墳後
144	北西原遺跡	奈良、平安	M	広瀬古墳群	古墳後・末
145	村岡北西原遺跡	平安	N	宮保古墳	古墳後(末)
146	村岡館跡	平安末	O	原島古墳群	古墳後
147	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳後、平安、近世	P	玉井古墳群	古墳後
148	宿遺跡	奈良、平安、中世、近世	Q	別所古墳群	古墳後
149	宮前遺跡	古墳後、奈良、平安、近世	R	奈良古墳群	古墳中・後
150	平山館	中世、近世	S	横塚山古墳	古墳中
151	瀬戸山遺跡	縄文早・中、古墳前・後、奈良、平安、近世	T	乙鶴森古墳群	古墳後
152	下新田遺跡	縄文中、古墳、奈良、平安	U	村岡古墳群	古墳後
153	下原遺跡	縄文、古墳後、奈良、平安、中世、近世	V	原古墳群	古墳後
154	鹿島遺跡	旧石器、縄文早、弥生、奈良、平安、中世、近世	W	瀬戸山古墳群	古墳後
155	八軒遺跡	縄文、奈良、平安、中世	X	瀬戸山古墳群(野原)	古墳後・末
156	向原遺跡	旧石器、縄文早・中、古墳	Y	万吉野原古墳群(遺跡)	古墳前・後
157	松原遺跡	縄文	Z	天神山古墳群	古墳後
158	天神山遺跡	縄文早・後、古墳	AA	静閑岡古墳群	古墳後
159	中原遺跡	古墳、奈良、平安	AB	行人原古墳群(遺跡)	古墳前・後
160	成武上原遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	AC	野原古墳群	古墳後
161	静閑院遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世			

いる。また、北島遺跡は、中条系遺跡に含まれる東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとした多量の木製農具を出土した遺跡として知られるほか、東海地方にその系譜が求められるバレス壺や高坏が多く見られ、近接する小敷田（条里）遺跡においても畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土している。墓域としては、新期荒川扇状地の中西遺跡において、方台部検出長が約15mの前期初頭の前方後方形周溝墓が、隣接する前中西遺跡でも旧河道沿いに方形周溝墓が点在して検出されているほか、市内西部の妻沼低地の自然堤防では、一本木前遺跡（108）において、約100軒もの膨大な数の竪穴住居跡のほか4基の方形周溝墓が検出されており、うち第2号方形周溝墓の主体部からはヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が出土している。また、荒川右岸の江南台地の万吉下原古墳群（遺跡）（Y）、江南台地下の低地の下田町遺跡（地図未掲載）において方形周溝墓が検出されており、方台部全長が22mの前方後方形周溝墓を盟主墓として、他に大小17基の方形周溝墓が検出されている。

一方、前期古墳については、江南台地の南に控える比企丘陵の北縁に、埼玉県指定史跡である塩古墳群・第1支群（地図未掲載）が分布する。この古墳群は、3世紀末～4世紀中頃の前方後方墳第1号墳をはじめ前方後方墳2基・方墳27基で構成され、当地域の出現期古墳の実例として貴重である。また、江南台地の行人塚古墳群（遺跡）（AB）では、小鍛冶関連遺物が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入が確認された貴重な事例となっている。

中期は確認例が少なく、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。市内東部では、前期から引き続いて前中西遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡（63）等で集落跡が確認されている。前中西遺跡では、近年竪穴住居跡や溝跡等の検出例が増え、土師器高坏を主体とする土器が多数出土している。藤之宮遺跡では溝跡から水辺の祭祀に使用されたと考えられる高坏・甕を中心とする土器群がほぼ完形に近い状態でまとまって出土している。一方、荒川右岸では、江南台地下の低地の下田町遺跡において集落跡が確認されており、玉作り工房を含む竪穴住居跡が検出され、有孔円板形・勾玉形・剣形等の滑石製模造品が出土している。さらに、江南台地の瀬戸山遺跡（151）では、5世紀初頭の集落跡が確認されている。古墳についても確認例が少なく、市内北部の妻沼低地の自然堤防には、市指定史跡である奈良古墳群（R）中の横塚山古墳（S）が所在する。この古墳は、B種横刷毛目の円筒埴輪を有する5世紀後半に比定される帆立貝式前方後円墳であるが、後円部の一部は削平されている。また、同じく妻沼低地の市内東部の中条古墳群（F）では、北島遺跡の田谷地点において5世紀中葉～後半の方墳や円墳が検出されている。

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は大規模になり、台地のみならず低地にも多数出現する。そして、これらの集落は、奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群をなして形成され、多数の古墳群が台地や低地に築造される。

古墳群は、概ね6世紀から7世紀末にかけて、ないしは8世紀初頭にかけて築造されている。妻沼低地では、上之古墳群（J）が分布するほか、飯塚古墳群（A）、上江袋古墳群（C）、乙鶴森古墳群（T）、中条古墳群等が分布する。中条古墳群では、当該期初頭の古墳として鑑塚古墳（G）や女塚第1号墳（H）等の古墳が築造される。鑑塚古墳は全長43.8mの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（埼玉県指定有形文化財）を伴う墓前祭祀跡が2か所確認されており、築造年代は5世紀末～6世紀初頭に比定される。同時期の築造年代と考えられる女塚1号墳も全長46mの帆立貝式前方後円墳で、二重周溝を

持ち桶持武人埴輪3体のほか多数の人物埴輪が出土している。また、当該期の終わりの埴輪を樹立しない7世紀前半に築造された大塚古墳(I)は、大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥片岩を使用している。

荒川左岸に広がる新期荒川扇状地の河岸段丘には、広瀬古墳群(M)、石原古墳群(L)が、扇状地の扇端部には肥塚古墳群(K)が分布する。広瀬古墳群中の国史跡宮塚古墳(N)は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し、7世紀末～8世紀初頭の築造と考えられている。石原古墳群は、6世紀後半～7世紀初頭に築造され、埴輪の樹立を行わなくなる過渡期の古墳群である。肥塚古墳群は6世紀後半～7世紀前半に築造され、川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者が荒川水系の石材、後者が利根川水系の石材と考えられ、これは地理的な特徴と被葬者の特徴を示す可能性がある。

新期荒川扇状地の東に位置する櫛挽台地には、別府古墳群(Q)、在家古墳群(D)、龍原裏古墳群(E)、三ヶ尻古墳群(地図未掲載)が分布する。別府古墳群及び三ヶ尻古墳群は、6世紀後半～7世紀前半に築造された前方後円墳を盟主墳とする古墳群であり、別府古墳群については、台地縁辺部に分布する古墳には埴輪を有し、台地中程の古墳は埴輪を有しないという特徴がある。また、在家古墳群及び龍原裏古墳群は、いずれも埴輪を有しない7世紀後半～8世紀初頭の築造と考えられる。龍原裏古墳群は、墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことが特徴として挙げられ、後述する幡羅郡家とのその関連遺跡である国史跡幡羅官衙遺跡群と時期的及び地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群である。また、在家古墳群も、隣接する在家遺跡(49)が官衙的要素を持つ8世紀前半～9世紀の方形区画の集落が幡羅郡家の出先機関との見方があり、石室構造においても龍原裏古墳群と共通する部分があることから注目される。

荒川右岸の江南台地では、比較的小規模な古墳群が、樹枝状の谷に仕切られた台地端部に分布し、万吉下原古墳群(遺跡)、瀬戸山古墳群(W)、野原古墳群(AC)、阿諏訪野古墳群、円山古墳群、東山古墳群、大境南古墳群(いずれも地図未掲載)が6世紀後半～7世紀前半に築造される。いずれの古墳群も埴輪を樹立するものと樹立しないものが混在し、瀬戸山古墳群及び阿諏訪野古墳群では7世紀後半ないしは末頃まで築造が続く。また、東山古墳群及び大境南古墳群は、小規模な前方後円墳を盟主墳としは円墳による構成であるが、7世紀初頭の築造と考えられる東山古墳群第1号墳は、円墳として築造後帆立貝式前方後円墳に改変された特徴を持ち、7世紀初頭頃の築造である大境南古墳群第1号墳は、埴輪樹立の代用として一定間隔に須恵器堤版8点が供献されたこととされる特徴を持つ。

生産遺跡では、江南台地の姥ヶ沢埴輪窯跡群、権現坂埴輪窯跡群(いずれも地図未掲載)が確認されており、台地崖線部の斜面や台地上の平坦地を利用している。権現坂埴輪窯跡群では、小さな谷を挟んで東側と西側の斜面に窯が並んで造られ、平坦地には工房と考えられる堅穴や粘土の採掘坑も確認されている。これらの埴輪窯は、6世紀前半に操業が始まり6世紀代後半まで続き、周辺の古墳へ埴輪を供給していたと考えられ、特に権現坂埴輪窯跡群では、高さ70cmを超す大型の円筒埴輪が作られており、埴玉古墳群への供給も行われていた可能性が考えられている。

本格的な律令体制が始まる奈良時代以降平安時代、市内には概ね幡羅郡、男舎郡、大里郡、埼玉郡の4郡があったとされ、そのうち市内北部から西部にかけてと深谷市東部の一帯は、武蔵国幡羅郡に属し

ていたと考えられる。幡羅郡は、上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霞見、余戸の8郷からなり、規模は中郡である。深谷市幡羅官衙遺跡(179)は、東西500m、南北400mの範囲に広がる幡羅郡家跡であり、郡のほぼ中央部の幡羅郷に位置するとされる。これまでに郡庁を除く正倉院、館、厨家等の曹司群、道路等の諸施設が確認され、評の時期である飛鳥時代の7世紀後半には小規模な倉庫等の掘立柱建物が建てられ、その後の郡が成立する7世紀末には主要な施設が整えられていったようである。そして、9世紀初頭には、正倉院の正倉が掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられ、敷地の拡張が行われる。9世紀後半になると、二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化し、この区画施設は、正倉院が10世紀前半をもって廃絶した後も11世紀前半まで存続していたとされ、これが郡家全体の終焉と考えられている。この幡羅官衙遺跡周辺には、西別府遺跡(41)、西別府廃寺(42)、西別府祭祀遺跡(39)が隣接して所在し、郡家やこれに付属する施設としての位置付けがなされ、2018年2月にはこのうち幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が、国史跡「幡羅官衙遺跡群」として指定されている。西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、幡羅官衙遺跡と同様に、少なくとも9世紀前半～11世紀前半の二重溝と土塁(前身は掘立柱塼で、後に土塁に改変)による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創建に関わったとされる県内でも古い8世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺院地及び主要伽藍域を区画する溝跡、瓦溜り状遺構等が検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦、伽藍廃絶に伴う廃棄土坑の出土遺物、仏教行事の献灯行為に用い一括投棄された灯明皿の出土状況等から10世紀後半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、水源の多くが湧泉であった河川の河畔において7世紀後半から11世紀前半まで行われた祭祀場跡であり、祭祀具である石製模造品をはじめ呪術的や仏教色の濃い墨書土器等の土器が多数検出されており、祭祀具や場所を時代とともに変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられる。さらに、荒川右岸の江南台地では、8世紀前半～10世紀後半の古代寺院である寺内廃寺(地図未掲載)が確認され、三重の区画施設を備え、外側には寺院地を区画する大溝、中心伽藍には塔、金堂、講堂、中門、南門の建物跡が検出され、伽藍東側の寺院地区画大溝内には堅穴建物50棟以上の寺院の維持管理を担ったと考えられる人々の集落、南側には参道と推定される道路跡も確認されている。この寺内廃寺の西に近接する深谷市百済木遺跡(地図未掲載)では、7世紀代の豪族居宅跡と考えられる遺構が検出されており、両遺跡とも古代男衆郡の成立を推定する上で重要であるとの認識がなされている。なお、百済木遺跡の豪族居宅は、7世紀後半～8世紀初頭の築造である立野古墳群(地図未掲載)との関係において、豪族居宅は古墳群を築造した首長の居住城、古墳群はその墓城との見方もある。

そして、律令体制の経済基盤である税としての稲穀の生産域の整備において、条里は重要な役割を担うが、妻沼低地では条里に関わる痕跡をとどめている条里遺跡がいくつか確認されている。埼玉郡に属すると推定される中条条里遺跡は、北島遺跡を北西端に東及び南に広がり、池上遺跡以南には同じく埼玉郡に属すると推定される行田市小敷田(条里)遺跡が続き、その南の主に荒川左岸の低地に広がると推定される大里条里推定地(125)は大里郡に属すると考えられる。一方、櫛挽台地の北側には、幡羅郡に属すると推定される別府条里遺跡(107)や道ヶ谷戸条里遺跡(15)が所在する。

転じて、集落について飛鳥時代の7世紀後半から平安時代末の11世紀前半までの状況を見ると、櫛

挽台地には7世紀後半から形成される幡羅郡家関連集落である深谷市下郷遺跡（180）及び大竹遺跡、
機挽台地東側の新时期荒川扇状地には大規模集落跡である樋の上遺跡（52）が所在し、台地ないしはそれ
に続く微高地に占地する大きな特徴がある。一方、妻沼低地には、7世紀後半以前からの集落である一
本木前遺跡や北島遺跡、7世紀末～8世紀初頭頃の出挙木簡を出土した小敷田（条里）遺跡等が所在し、
荒川右岸の江南台地下の低地には、古墳時代後期の6世紀をピークに、7世紀後半には遺構数が激減し
8世紀へと移行していく下田町遺跡が所在する。一本木前遺跡は、別府条里が施工された東端に展開し
た集落で、低地の微高地にあった集落が再編されていく中、幡羅郡家の影響を受けつつ継続的に営まれ
た集落であると考えられる。

8世紀前半には、妻沼低地では飯塚北遺跡（2）のような大規模な集落が形成され、江南台地の奥部
には、荒神脇遺跡（170）や下原遺跡（153）のような集落が点在する。8世紀後半になると、妻沼低地では
7世紀後半から中核となる規模を継続してきた北島遺跡ほか、諏訪木遺跡、飯塚北遺跡等の大規模集
落が増加する一方、古墳時代後期以降累々と営まれた新时期荒川扇状地の樋の上遺跡等の集落では衰退傾
向となる。

9世紀前半は、妻沼低地の北島遺跡において、大型の掘立柱建物と少数の竪穴建物で構成される区画
施設を有する有力者層の居宅が成立し10世紀末まで継続する。また、諏訪木遺跡でも集落が拡大して
いく。諏訪木遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけての、畜串・人形等の木製祭祀具を使った律令
祭祀へと変遷する河畔祭祀が行われた河川跡が検出されたほか、9世紀前半～10世紀後半の3つの区
画施設を有する集落が確認され、最も大型の区画施設では、9世紀末～10世紀後半には区画の中心的
建物として大型の四面廂掘立柱建物が出現している。また、多数の灰釉陶器や緑釉陶器も検出されてお
り、官衙の様相が看取できる。

9世紀後半になると、全体として遺跡規模も遺跡数も縮小の傾向になる。妻沼低地の池上遺跡では、
9世紀後半～10世紀初頭の整然と配された掘立柱建物跡群が検出され、埼玉郡を示す「前」の墨書土
器が出土している。ちなみに、最近の調査では8世紀後半の須恵器坏に「官または宮」、「里刀自」の墨
書が見られ注目される成果があり、律令体制下において重要な役割を担った人物や施設の存在が想起さ
れる。市街地の新时期荒川扇状地に立地する宮町遺跡（87）は7世紀末～10世紀初頭の集落であるが、9
世紀後半～10世紀初頭には、火災を受けた大型の四面廂掘立柱建物跡が検出され、その片付けに使わ
れたと考えられる土坑から多量の緑釉陶器や灰釉陶器が出土したほか、鉄斧・刀子・釘、砥石、輪の羽
口も出土したことから、有力者の存在を想起させる官衙的要素がある。また、荒川右岸の江南台地では、
郷の有力者宅（郷長）に設置された凶作等に備え備荒米や出挙稲を保管したとの見方がある倉庫群
が、丸山遺跡（171）において確認されている。この倉庫群は総柱や側柱式の掘立柱建物であり、9世紀
～10世紀前半を主体とする竪穴建物群に併設している。

10世紀前半においては規模について縮小傾向が顕著となり、当該期の集落全般を見渡すと、集落内
にあった掘立柱建物が激減し、竪穴建物のみを集落が点在する程度となる。そして、これ以降の10世
紀中頃には、11世紀まで続く大規模集落も規模が縮小し、集落内の竪穴建物も小型化、土器を見ると
土師器甕に代わって羽釜が出現し普及する等、食と住に大きな変化があったと推定される。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも

館跡が多数見られる。北部では実盛館(長井齋藤氏館跡)(31)、西城城跡(121)、東城城跡(122)、東部では中条氏館跡(64)、光屋敷遺跡(65)、成田氏館跡(70)、久下氏館跡(72)、市田氏館跡(73)、中央部では熊谷氏館跡(88)、箱田氏館跡(81)、肥塚館跡(86)、兵部裏屋敷跡(89)、西部では西別府館跡(43)、別府城跡(105)、別府氏館跡(104)、奈良氏館跡(110)、南部では村岡館跡(146)等の城館跡や伝承地があるが、その実態は不明なものが多い。東別府地区にある別府城跡では、一部ではあるが現在も土塁と空堀が良好な状態で残っている。三ヶ尻地区では、中世の遺構・遺物が比較的多く検出されている。なかでも黒沢館跡(54)は、発掘調査により出隅を持ち全周する堀及び土塁、虎口等が検出され、渡辺崋山が記した文献『訪蹊録』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が一致した大変貴重な例である。上之地区の成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされ、隣接する諏訪木遺跡では、成田氏関連と考えられる遺構や遺物がいくつか検出されている。館跡から南へ約300mの箇所では、中世の居館と考えられる変形方形区画が確認されており、『新編武蔵風土記稿』の成田氏一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている。また、井戸枠に器高70cmを超える13世紀中頃と考えられる常滑産の大甕を使用した井戸跡が検出されている。さらに、古墳時代後期の円墳の周溝埋没後に掘られた土坑からは、5,000枚を超える大量の埋蔵銭が出土し、それは15世紀前半を上限とし、成田氏に関連するものであると推定されている。市内南部の江南台地では、中世に続く熊野遺跡(169)、元境内遺跡(168)、諏訪脇遺跡(167)、野原宮脇遺跡(166)等において集落が確認されている。また、これら集落の西に近接する野原古墳群では、平安時代末の金銅宝冠阿彌陀如来坐像が出土し、古墳墳丘が経塚に転用されたと考えられている。さらに、付近にあったとされる能満寺の伝承から中世後期成立の文殊寺の創建にかかる由来を垣間見ることができる。なお、文殊寺一体、元境内遺跡は増田氏館跡の伝承がある場所であり、1996年の館跡の内郭及び堀の発掘調査において中世の塚、近世の土坑・ピット・溝跡等が検出され、中世～近世の陶磁器や銭貨、中世の板石塔婆や五輪塔等が出土している。また、この周辺には、古代において武蔵国国府―上野国間の南北ルートとして知られる官道の東山道武蔵路が通っていたと想定されており、古代以降中世においても古街道の鎌倉道の一つ(上道)として伝わる地域の主要道として長く使用されていたことが推定されている。

中世段階においては、館跡等を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。このことは、近世段階においても同様で、市内では諏訪木遺跡等において調査例が見られるものの、不明な点が多いというのが実態である。

彦松遺跡



II 彦松遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

彦松遺跡の調査は、建築主（二上沙央理氏）との調整を経て、建物の基礎掘削により遺構の保護層の確保ができない工事を伴う個人専用住宅の建築であることから、埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成28年7月15日付けで、埼玉県教育委員会あてに、建築主より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。届出のあった熊谷市妻沼字彦松1723番17地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№61-053彦松遺跡）に該当しており、熊谷市教育委員会は、この度とは異なる建築主による同法の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出に基づき、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成23年9月8日に既に試掘調査を実施していた。この調査の際、現地表面から30cm下位において奈良・平安時代の堅穴建物跡等の埋蔵文化財の所在が確認されていた。

個人専用住宅建築は、前述のとおり基礎掘削工事が埋蔵文化財の保護・保存に影響を与えるもので、その施工は現地表面下29cmに及ぶものであり、埋蔵文化財に影響を及ぼさないための規定である遺構確認面から30cm以上の保護層の確保ができないものであった。このため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を平成28年8月23日付け熊教社埋発第289号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成28年9月15日付け教生文第4-756号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成28年9月2日付け熊教社埋発第305号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成28年9月5日から10月5日にかけて実施した。調査面積は、家屋建築予定箇所全面の40.57㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、堅穴建物跡、土坑、ピット、溝跡で、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、令和3年4月から令和4年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。なお、遺構の整理に当たって、第2表のとおり遺構の見直しを図り、遺構番号の振替を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を

行った。そして、遺構の写真整理及び遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成28年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	山崎 実
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健
主査	松田 哲
主査	小島 洋一
主査	藏持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
主任	金子 正之
主事	武部 喜充 (任期付職員)
主事	島村 範久 (任期付職員)
主事	大野美知子 (任期付職員)
事務嘱託	山崎 和子

イ 整理・報告書作成

令和3年度

教育長	野原 晃
教育次長	鯨井 敏朗
社会教育課長	三友 孝二
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田 哲
主査	星 祥子
主査	小島 洋一
主査	山下 祐樹
主査	腰塚 博隆
主任	新井 端
主事	山川愛希子

主事 大野美知子 (任期付職員)
 主事 山川 守男 (任期付職員)
 主事 中山 浩彦 (任期付職員)

第2表 彦松遺跡遺構番号新旧対照表 (左:新番号、右:旧番号)

堅穴建物跡 (S1)	
1	S11
1-P1	P14
1-P2	P18
1-P3	P19
1-P4	P20
1-P5	P25
2	S12
2-P1	P17
土 坑 (SK)	
1	SK1
2	SK5
3	SK2
4	SK3
5	SK4

ピ ッ ト (P)	
1	P1
2	P2
3	P3
4	P4
5	P5
6	P6
7	P7
8	P8
9	P9
10	P10
11	P11
12	P12
13	P13
14	P15
15	P16

16	P23
17	P24
溝跡 (SD)	
1	SD1



第3図 彦松遺跡調査地点位置図

2 遺跡の概要

(1) 彦松遺跡について

彦松遺跡は、熊谷市北部の利根川右岸、そして福川の幾条もある支流の一つである芝川が利根川に向かって大きく蛇行する右岸、標高約29～30mの妻沼低地の自然堤防に立地する遺跡である。その範囲は面積約34,000㎡、南北に長く約270m、東西は最大で約150mを測る規模である（第3図）。

本遺跡は、これまでの調査等により古墳時代後期から奈良時代、そして平安時代へと続く集落跡であったことが分かっているが、東に隣接して古墳時代前期、奈良時代、平安時代の集落跡である彦松東遺跡、西には芝川を挟んだ自然堤防に立地する古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡である彦松西遺跡が近接する。また、北には、本遺跡と同じ自然堤防に立地する古墳時代後期、奈良時代、平安時代、そして鎌倉時代に及ぶ集落跡である池ノ上遺跡が近接する。このように、本遺跡を含めて、概ね古墳時代後期から平安時代までの集落が形成されていた歴史的環境にある。なお、本遺跡及び彦松東遺跡は、一つの遺跡として捉えることもできると考えられる。

本遺跡は、前述のとおり芝川が形成した自然堤防に立地するが、その自然堤防は、芝川が大きくΩ状に蛇行している内側に形成されており、北から南へと地形が傾斜し、東に向かうにつれやや低くなっている傾向がある。本調査地点は、南に向かって低くなる地形の中間寄りの東であり、遺構確認面は現地表面下30cmであった。過去の調査データを見ると、本遺跡における遺構確認面までの表層の厚みは、北で浅く、南で深い傾向にある。それは、中央部及びその北寄りにおいて約30～50cm、最も南では遺物包含層の確認面ではあるが約100cmであり、旧地形が、遺跡範囲の中央から北側が最も高く概ね平坦な地形であり、南に向かって傾斜していることが、この表層の厚みからも推定される。

なお、同一遺跡と見なしでも良いと考えられる彦松東遺跡においては、過去の調査データによると、現地表面下概ね60～70cmにおいて遺構が確認されており、旧地形も現地形と同様な状況を示しているものと考えられる。

(2) 調査の方法

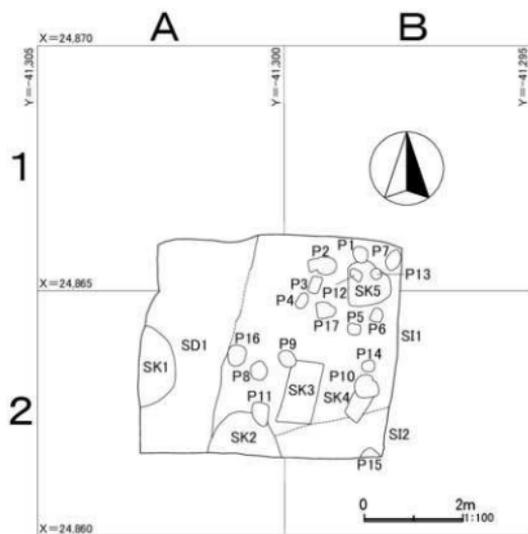
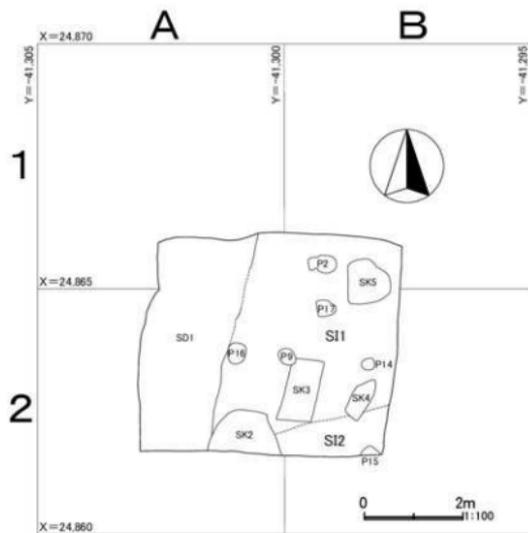
調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第IX系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区が網羅できるよう、北西隅をA-1として東へA・B、南へ1・2とし、Aラインは北から南へA-1・A-2と呼称した。また、Bラインは東もAラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方で行った。

(3) 検出された遺構と遺物

調査地点は、遺跡範囲の中央部寄りやや南の東端の場所で、本遺跡においては発掘調査を実施した初めての事例である。

なお、本章第1節第1項で記述のとおり、本調査に係る埋蔵文化財発掘の届出の提出以前の約5年前に試掘調査を行った経緯は、その当時提出があった届出者の異なる埋蔵文化財発掘の届出に基づくものであったが、届出者の都合により開発を見送ったことから、その際には本調査を実施するには至らなかった。



第4図 彦松遺跡調査区全測図(上:下面、下:上面)

た。

検出された遺構・遺物については、遺構が、互いに重複関係にある堅穴建物跡2棟、土坑5基、ピット17基、溝跡1条であり、堅穴建物跡は一方が奈良時代前半、もう一方が奈良時代後半～平安時代初期である。土坑・ピット・溝跡については、堅穴建物跡構築後の時期に所属するものと考えられ、土坑においては5基のうち2基、ピットにおいては17基のうち4基が時期を推定することが可能であった。なお、その土坑2基は、いずれも平安時代前半のものであり、ピットについては、4基のうち1基が平安時代前半に所属するものと特定できただけであった。また、溝跡については、重複する2棟の堅穴建物跡からの混入遺物が多く含まれ、当該遺構の時期を断定するにはやや確証に乏しかったが、概ね平安時代前半以降と推定された。

遺物については、堅穴建物跡2棟出土の遺物が最も多く、土師器杯・甕・台付甕、須恵器蓋・杯・甕・長頸壺・短頸壺、灰釉陶器埴・瓶、磨石等が見られ、中世に属する瓦質土器片口鉢等もわずかに見られた。また、特殊なところでは、須恵器双耳杯の把手部破片、須恵器杯を朱墨のパレットとして使ったもの、丸瓦が出土している。遺物の量は、コンテナ（大きさ：縦39cm、横24cm、深さ14cm）1箱及びコンテナ（大きさ：縦54cm、横34cm、深さ15cm）1箱の計2箱であった。

3 遺構と遺物

(1) 堅穴建物跡

第1号堅穴建物跡（第5・6図、第3表）

調査区のほぼ東半分に位置する。A・B-1・2グリッド内にある。第2号堅穴建物跡、第2～5号土坑、第1～14・16・17号ピット、第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号堅穴建物跡を切り、そのほかの遺構に切られている。

規模は、プランの西部が第1号溝跡に、南西部が第2号土坑に切られている。また、北部及び東部が調査区域外にあり、全体を把握するには至っていない。したがって、残存部における規模は、長軸最大長4.00m、短軸最大長3.76mを測る。平面プランは、方形状を呈すると推定されるが、詳細は不明である。主軸方位は、N-13°-Wを示すと推定される。

床までの深さは、土層断面観察から54～60cmを測る。埋土は、南から北へ及び西から東へと傾斜をもつレンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、ほぼ平坦である。また、土層断面観察において、貼床構造と考えられる土層が見られた。その掘方は、建物残存箇所中央部から北部にかけて見られ、深さ約7～15cmであると考えられる。また、その埋土は、浅黄色土ブロック小・粒子、焼土粒・炭化物粒を含んでいた。なお、これらは土層断面観察から推定されるものであることから、貼床部の掘方の平面形は不明である。

壁溝は、平面では検出されず、土層断面観察からも分からなかった。

床面には、ピットが5基検出できたが、そのうち柱穴と考えられるピットは、P4・P5と呼称したピット2基である。その規模は、P4が直径40cm前後、深さ12cm、P5が直径44～50cm、深さ10cmを測る。なお、その他のピットの規模を直径・深さの順に各々記載すると、P1が23cm・8cm、P2が13×26cm・4cm、P3が19×26cm・15cmである。

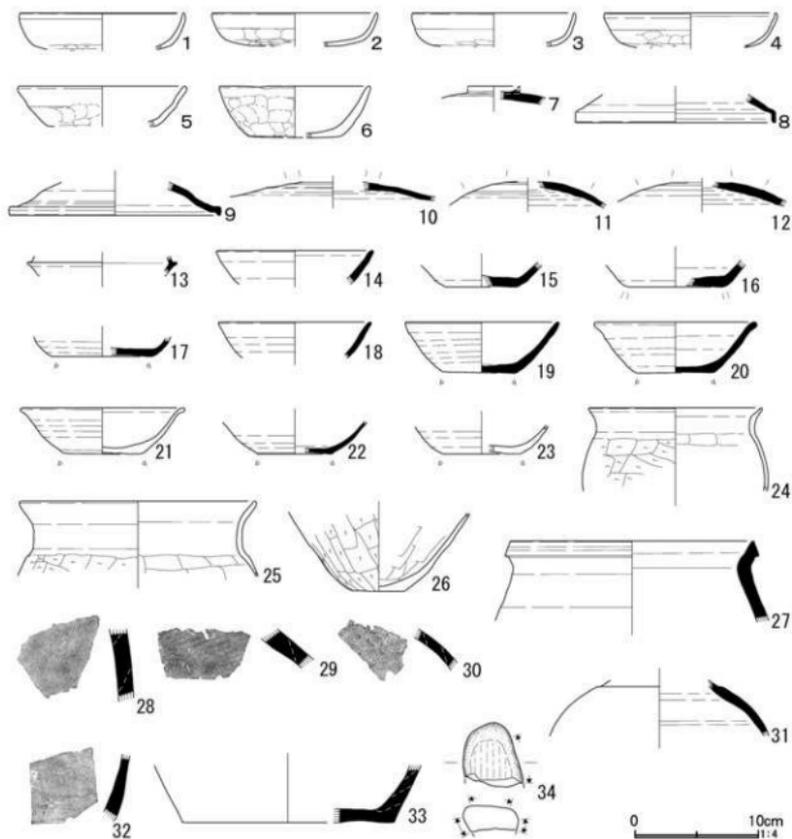
カマドは、推定される箇所も含めて検出できなかった。

貯蔵穴についても、検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕、須恵器蓋・坏・甕・長頸壺を含む壺、磨石等が検出された。

時期は、8世紀後半～9世紀初頭の土師器坏（第6図1～3）、須恵器蓋・坏等（同図8・14～17）が示す時期が適当と考えられる。

なお、7世紀前半と考えられる須恵器蓋坏の坏身（同図13）、8世紀前半の須恵器蓋（同図7）、9世紀後半を主体的に示す土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏（同図5・24・25、19～23）等は、他遺構からの流れ込みと考えられる。ちなみに、8世紀前半の須恵器蓋は第2号竪穴建物跡から、9世紀後半を主体的に示す須恵器坏や土師器甕は、重複する第1号溝跡に所属するものと考えられる。



第6図 彦松遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物

第3表 彦松遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第6図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.20)	残存高 3.50	—	ABEGJJK	B	にぶい橙色	口縁部 15%	8C 後半～9C 初頭。
2	土師器 杯	(13.30)	残存高 2.70	—	ABDGLJ	A	橙色、にぶい黄橙色	15%	8C 後半～9C 初頭。
3	土師器 杯	(13.00)	残存高 2.70	—	AETJ	A	にぶい橙色	口縁部 10%	8C 後半～9C 初頭。
4	土師器 杯	(13.70)	残存高 2.80	—	ADLJK	B	外面：にぶい黄橙色、橙色 内面：橙色	口縁部 20%	9C 前半。
5	土師器 杯	(13.40)	残存高 3.30	—	BEI	C	外面：にぶい橙色 内面：黄灰色	15%	9C 後半。
6	土師器 杯	(12.10)	4.20	(7.40)	ABDEHJK	B	外面：にぶい黄橙色、橙色 内面：にぶい黄灰色、 にぶい黄褐色、黒褐色	40%	体部に指頭圧痕、 9C 末～10C 初頭。
7	須恵器 蓋	—	残存高 0.80	—	ADFG	A	黄灰色、灰色	縁～天井部 破片	環状段、 南比企産。8C 前半。
8	須恵器 蓋	(16.10)	残存高 2.30	—	ADEF	A	灰色	口縁部 15%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
9	須恵器 蓋	(16.90)	残存高 2.70	—	ABDGL	A	灰色	口縁部 10%	未野産。 9C 前半。
10	須恵器 蓋	—	残存高 1.20	—	ABDGL	A	外面：黄灰色 内面：灰色	天井部～ 体部 15%	未野産。 9C 代(9C 初～9C 前半小)。
11	須恵器 蓋	—	残存高 1.90	—	ABDGL	A	外面：灰白色 内面：にぶい黄褐色	天井部～ 体部 20%	未野産。 9C 代(9C 初～9C 前半小)。
12	須恵器 蓋	—	残存高 1.60	—	ABGL	A	灰色	天井部～ 体部 15%	未野産。 9C 代(9C 初～9C 前半)。
13	須恵器 蓋・坏身	—	残存高 1.40	—	ABD	A	青灰色	体部破片	7C 前半小。
14	須恵器 杯	(12.40)	残存高 2.70	—	ABFK	A	外面：灰白色 内面：黄灰色	口縁部 15%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
15	須恵器 杯	—	残存高 1.75	(6.00)	ABDKN	A	灰色	体部下平 ～底部 50%	底部外面は回転糸切後ナデ 小。未野産。8C 後半～9C 初頭。
16	須恵器 杯	—	残存高 1.80	7.50	BFN	A	青灰色	体部下平 ～底部 40%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
17	須恵器 杯	—	残存高 1.60	(8.00)	ABHI	A	外面：灰白色 内面：灰白色	底部 20%	未野産か。 8C 後半～9C 初頭。
18	須恵器 杯	(12.20)	残存高 2.90	—	ABEJJK	A	外面：黄灰色、灰白色 内面：灰白色	口縁部 10%	未野産か。 9C 前半。
19	須恵器 杯	12.30	4.20	5.80	ABDGLL	A	外面：灰白色、褐灰色 内面：灰白色、灰色	60%	未野産か。 9C 後半。
20	須恵器 杯	12.80	4.20	6.20	ABDGL	A	灰白色 外面：口縁部の一部が灰色	100%	未野産。 9C 後半。
21	須恵器 杯	(13.00)	3.75	6.60	ABDEGLJ	C	褐色、にぶい褐色、 灰黄褐色	55%	酸化焙焼成。外面の一部に煤 付着。未野産。9C 後半。
22	須恵器 杯	—	残存高 2.55	(6.00)	ABDEKM	A	にぶい褐色、青灰色	体部下平 ～底部 30%	未野産。 9C 後半。
23	須恵器 杯	—	残存高 2.20	(6.50)	ADGIN	C	にぶい黄褐色	体部下平 ～底部 45%	酸化焙焼成。 未野産。9C 後半。
24	土師器 台付甕	(13.90)	残存高 6.30	—	ACEGJKR	A	明赤褐色、褐色	口縁部～ 胴部上半 15%	9C 後半。
25	土師器 甕	(18.80)	残存高 6.10	—	CHJ	A	褐色、灰褐色	口縁部 25%	9C 後半。
26	土師器 甕	—	残存高 6.30	4.20	ABEGJJK	A	褐色	底部～胴部 下半 60%	9C 後半小。
27	須恵器 甕	(19.60)	残存高 6.50	—	ABDGHKMN	B	灰白色	口縁部破片	
28	須恵器 甕	—	厚さ 1.20～1.40	—	ABFGN	A	灰色	胴部破片	内外面ナデ。 南比企産。
29	須恵器 甕	—	厚さ 1.10～1.40	—	ABHL	A	外面：灰色 内面：青灰色	胴部上半(胴 部付近)破片	外面：平行明き目肌。 内面：横位のナデ。 未野産か。
30	須恵器 甕	—	厚さ 0.70～0.75	—	ABDG	A	外面：灰色 内面：灰白色	胴部上半破片	未野産か。
31	須恵器 長喙壺	—	残存高 4.50	—	ABG	A	外面：黄灰色 内面：灰褐色	胴部上半 20%	外面(肩部)に自然釉。
32	須恵器 長喙壺	—	厚さ 0.60～1.10	—	ABL	A	外面：灰黄褐色 内面：灰褐色	胴部下半(底 部付近)破片	内面の底部付近に自然釉。
33	須恵器 蓋	—	残存高 4.65	(17.15)	ABEIL	A	外面：灰色 内面：オリーブ灰色、灰色	底部 20%	外面に薄皮が継着してタール 状になり付着。底部外面に自 然釉が継着。内面に自然釉。
34	磨石	—	最大長 5.20	最大幅 4.70	最大厚 2.30	重量 77 g	—	—	現存において3面磨面。 下端及び一方面欠損。 砂岩製。

第2号竪穴建物跡（第5・7図、第4表）

調査区の南東端に位置する。A・B-2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第2～4号土坑、第15号ピットと直接重複関係にあり、第1号溝跡とも重複関係にある可能性がある。本遺構は、重複する遺構全てに切られている。

規模は、プランの北部が第1号竪穴建物跡に、南西部が第2号土坑に切られ、また、南部及び東部のほとんどが調査区域外にあり、全体を把握するには至っていない。したがって、残存部における規模は、南北最大長0.92 m、東西最大長2.40 mを測る。平面プランは、方形状を呈すると推定されるが、詳細は不明である。また、主軸方位も不明である。

床までの深さは、土層断面観察から36～48 cmを測る。埋土は、ほぼ水平に堆積しており、埋土の状況から推定されるのは人為的に埋め戻された可能性であるが、詳細は不明である。

床面は、ほぼ平坦である。また、土層断面観察において、貼床構造と考えられる土層がわずかに見られた。その掘方は、建物残存箇所の中央部南寄りに見られ、深さ約5～6 cmである。その埋土は、浅黄色土粒子を含んでいた。なお、これらは土層断面観察から推定されるものであることから、貼床部の掘方の平面形は不明である。

壁溝は、平面では検出されず、土層断面観察からも分からなかった。

床面には、ピットが1基（P1）検出できたが、柱穴であるか否かは不明である。その規模は、残存長軸35 cm、短軸34 cm、深さ20 cmを測る。

カマドは、検出できなかった。

貯蔵穴についても、検出できなかった。

出土遺物は、土師器環・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・埴・甕・短頸壺及び長頸壺を含む壺、灰軸陶器瓶、磨石等が検出された。特殊な遺物として、須恵器双耳環の把手部破片、底部外面に朱墨痕がある須恵器坏が見られた。また、中世（14世紀後半～15世紀前半）所産と考えられる在地産瓦質土器片口鉢が混入していた。

時期は、8世紀前半の土師器環・甕・台付甕、須恵器蓋・坏・埴等（第7図2～6・35・38、16・17・20～25・27）が示す時期が適当と考えられる。また、7世紀末～8世紀初頭の放射状暗文が施文された土師器坏（同図1）も当該遺構の所属時期に含めても良いのかも知れない。

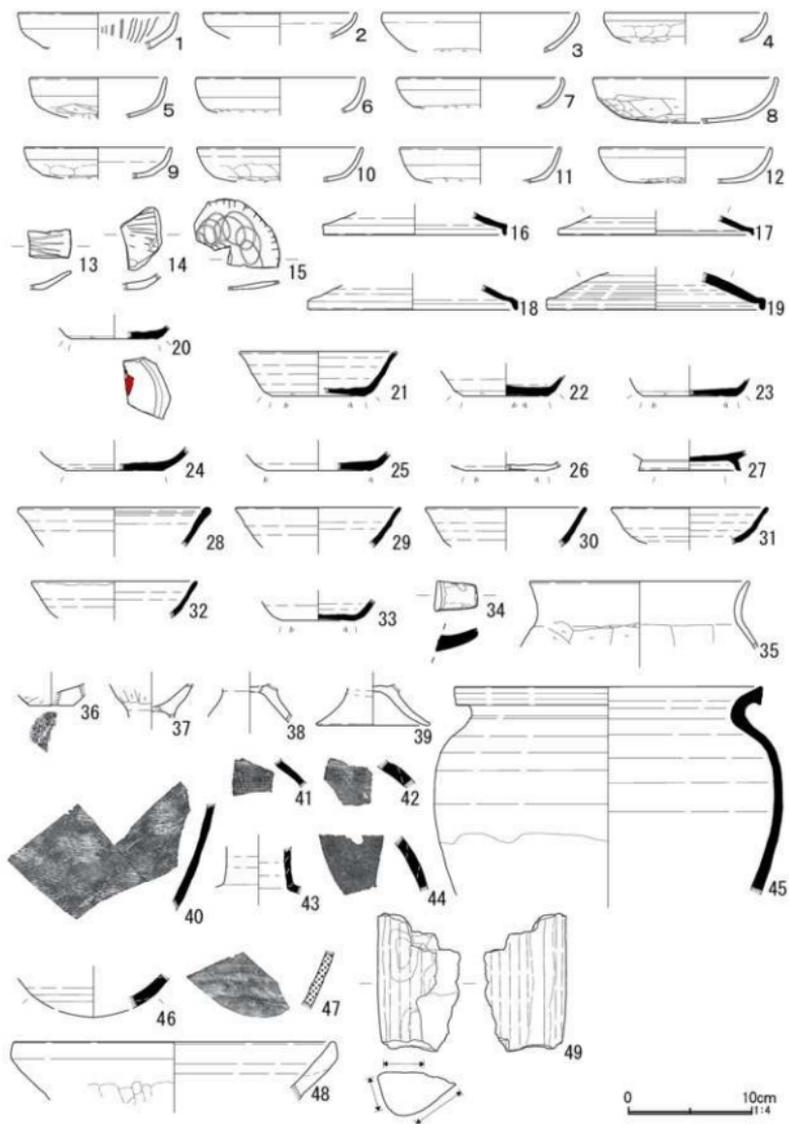
なお、8世紀後半～9世紀初頭に所属する土師器環、須恵器蓋・坏（同図7～14、18・19・28～33）等も多く見られたが、これらは重複する第1号竪穴建物跡に所属するものと考えられ、相当数が混入したものと考えられる。

(2) 土坑

第1号土坑（第9・12図、第5表）

調査区の西端、中央やや南寄りに位置する。A-2グリッド内にある。第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。

規模は、西部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸1.65 m、残存短軸0.75 mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所が楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から深さ32 cmを測る。



第7图 彦松道跡第2号竖穴建物跡出土遺物

第4表 彦松遺跡第2号竪穴建物跡出土土物観察表 (第7図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 杯	(12.70)	残存高 2.90	—	ABCEGK	A	明赤褐色	口縁部 15%	内面に放射状堆文施文。 7C末～8C初頭。
2	土師器 杯	(12.30)	残存高 2.10	—	AELJK	B	外面：にぶい黄褐色、 にぶい褐色 内面：にぶい褐色	15%	8C初頭～8C前半。
3	土師器 杯	(15.70)	残存高 3.20	—	ABDHJK	B	にぶい褐色、褐色	15%	8C前半。
4	土師器 杯	(13.00)	残存高 2.40	—	AETK	B	外面：褐色、灰褐色 内面：褐色	10%	8C前半。
5	土師器 杯	(10.90)	残存高 3.30	—	ABHJ	B	外面：褐色 内面：にぶい褐色	20%	8C前半。
6	土師器 杯	(13.40)	残存高 2.90	—	AETK	A	褐色	口縁部 ～体部 20%	口縁部内外面に油塗と思われ るもの付着。8C前半か。
7	土師器 杯	(13.20)	残存高 2.50	—	ABDIK	B	にぶい褐色	口縁部 15%	8C後半～9C初頭。
8	土師器 杯	(14.70)	3.70	—	ABDIJK	B	褐色、にぶい黄褐色	45%	8C後半～9C初頭。
9	土師器 杯	(11.90)	残存高 2.50	—	ABCHKL	B	褐色	15%	8C後半～9C初頭。
10	土師器 杯	(13.20)	残存高 2.80	—	ABJK	B	褐色	20%	8C後半～9C初頭。
11	土師器 杯	(12.80)	残存高 2.90	—	ABLJK	B	褐色	15%	8C後半～9C初頭。
12	土師器 杯	(13.80)	残存高 2.90	—	BDIK	B	褐色	口縁部 10%	8C後半～9C初頭。
13	土師器 杯	—	—	—	ABEGK	A	褐色	口縁部～ 体部破片	内面に放射状堆文施文。
14	土師器 杯	—	—	—	ABEGLK	A	褐色	底部破片	内面に放射状堆文施文。
15	土師器 杯	—	—	—	ABDIJK	B	外面：褐色 内面：褐色	底部破片	8C後半～9C初頭。 底部内面に縦線状堆文、体部 にかけて放射状堆文施文。 8C代か。
16	須恵器 蓋	(14.60)	残存高 1.80	—	BDFG	A	灰色	口縁部 10%	南比企産。 8C前半 (8C中頃)。
17	須恵器 蓋	(15.70)	残存高 1.50	—	ABFL	A	青灰色、暗灰色	口縁部 10%	南比企産。 8C前半 (8C中頃)。
18	須恵器 蓋	(16.80)	残存高 2.00	—	ABGJKL	B	灰白色	口縁部 10%	未野産。 8C後半～9C初頭。
19	須恵器 蓋	(17.40)	残存高 3.00	—	ABDFGHR	B	外面：灰白色、灰色 内面：灰色	10%	南比企産か。 8C後半～9C初頭。
20	須恵器 杯	—	残存高 0.90	(7.00)	ABL	A	灰白色	底部 25%	底部外面に朱塗痕。 未野産。8C前半。
21	須恵器 杯	(12.60)	(3.60)	(7.40)	ABRL	A	灰白色	10%	未野産。 8C前半。
22	須恵器 杯	—	残存高 2.05	6.80	ABDGL	A	灰色	底部 100%	底部外面に回転ヘラズリ前 の回転糸切痕の一部あり。 未野産。8C前半。
23	須恵器 杯	—	残存高 (1.45)	(7.50)	ABDFIL	A	灰色	底部 25%	南比企産。 8C前半。
24	須恵器 杯	—	残存高 1.50	(7.90)	ABDFL	A	灰色	底部 20%	南比企産。 8C前半。
25	須恵器 杯	—	残存高 1.30	(8.30)	ABGL	A	灰色	底部 25%	未野産。 8C前半。
26	須恵器 杯	—	残存高 0.40	(6.60)	ABGKL	C	黄灰色、灰色	底部 30%	未野産。 8C後半か。
27	須恵器 杯	—	残存高 1.30	(8.20)	ABFL	A	灰色	底部 50%	南比企産。 8C前半。
28	須恵器 杯	(15.10)	残存高 3.20	—	ABIL	A	外面：灰色 内面：灰色	口縁部 10%	未野産。 8C後半 (～9C初頭) か。
29	須恵器 杯	(13.20)	残存高 (3.30)	—	ABFL	A	灰色、赤灰色	口縁部 20%	南比企産か。 8C後半～9C初頭。
30	須恵器 杯	(12.80)	残存高 3.20	—	ABDJKL	B	外面：灰白色、灰色 内面：灰白色	口縁部 ～体部 15%	未野産。 8C後半～9C初頭。
31	須恵器 杯	(12.50)	残存高 3.00	—	ABGL	A	外面：灰色 内面：灰色	15%	未野産。 8C後半～9C初頭。
32	須恵器 杯	(13.30)	残存高 3.00	—	ABEGL	B	灰白色、暗灰色	口縁部 20%	未野産。 8C後半～9C初頭。
33	須恵器 杯	—	残存高 1.50	(5.80)	ABKL	A	灰白色	底部 25%	未野産。 8C後半～9C初頭。
34	須恵器 双耳杯	長さ：最大3.10 幅：先端1.90 厚さ：先端0.50	残存高 5.40	基部 2.40 基部 1.40	ABDHJK	B	灰色	耳部破片	全面平滑。 丁寧なつくり。
35	土師器 壺	(17.50)	残存高 5.40	—	ABDJKL	A	褐色	口縁部～ 体部上半 10%	8C前半。
36	土師器 壺	—	残存高 0.90	(3.40)	ABCGHR	B	外面：褐色、明赤褐色 内面：褐色	底部 50%	
37	土師器 台付壺	—	残存高 2.70	—	ABEJK	B	褐色	胴部と台部の 接部破片	
38	土師器 台付壺	—	残存高 2.30	—	ABDJK	A	外面：灰褐色 内面：褐色	台部 15%	8C代 (前半) か。

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
39	土師器 台付甕	—	残存高 2.90	(8.90)	ABDHJ	A	橙色、灰褐色	台部55%	8C代(後半か)。
40	須恵器 甕	—	厚さ0.50～0.65	—	ABG	A	外面：褐灰色 内面：黄灰色	胴部下破片	外面：平行印き。自然釉(黒色化)。 内面：ナデ。
41	須恵器 甕	—	厚さ0.40～0.55	—	AB	A	外面：灰白色 内面：灰褐色	胴部上半 (肩部)破片	外面：カキ目肌。 未野産か。
42	須恵器 甕	—	厚さ0.75～0.85	—	ABDL	B	灰白色	胴部上半 (肩部)破片	外面：カキ目肌。 未野産か。
43	須恵器 長頸甕	—	頸部径5.30～5.40 残存高(3.30)	—	ABD	A	暗灰黄色	頸部下破片	外面に自然釉。
44	須恵器 甕	—	厚さ0.60～0.80	—	ABDF	A	灰色	胴部上半破片	南比企業。
45	須恵器 短頸甕	(24.70)	残存高 17.00	—	ABEGLMN	A	外面：灰白 内面：にぶい・橙色	口縁部～ 胴部上半40%	未野産か。 8C後半か。
46	須恵器 長頸甕	—	残存高 2.50	—	ABFGL	A	灰色	底部付近破片	南比企業。
47	灰釉陶器 瓶	—	厚さ0.60～0.75	—	AB	A	灰色(灰オリーブ色)	胴部下破片	外面に灰釉。
48	瓦質土師 片白鉢	(25.80)	残存高 4.75	—	AHJ	B	灰色	口縁部10%	混入品。 在地産。14C後半～15C前半。 磨面3面、磨面は平坦。 一部欠損。玄武岩製。
49	磨石	—	最大長11.00	最大幅6.70	—	—	最大厚3.50	重量349g	—

床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、図示できたのが須恵器蓋(第9図SK1-1)だけであり、このほか土師器甕、須恵器
壺・壺等が検出された。

時期は、出土遺物から判断すると8世紀後半～9世紀であるが、9世紀後半以降の時期と考えられる
第1号溝跡よりも新しい時期と考えるのが妥当である。

第2号土坑(第8・9図、第5表)

調査区の南端中央部に位置する。A-2グリッド内にある。第1・2号竪穴建物跡、第11号ピット、
第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第11号ピットを除く遺構を切り、第11号ピットに切られている。
規模は、南部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸1.50m、検出短軸0.86mを測る。
平面プランは、プランが確認できた箇所で楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から最深部で66cm
を測る。床面は、東側にテラス状の平坦面をもち、中央部が深く、その北側がさらにやや深い。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・壺・長頸瓶等が検出された。

時期は、8世紀後半～9世紀後半と幅広い時期の出土遺物が見られたが、重複する遺構との関係から
総合的に判断すると、須恵器壺・壺・長頸瓶(第9図SK2-4・5・7)が示す9世紀後半が妥当と
考えられる。なお、第1号溝跡とはあまり時期差がないものと考えられる。

また、特筆すべきは、内面に朱墨痕が認められた須恵器壺の出土であるが、この土器は8世紀後半～
9世紀初頭と考えられ、重複する第1号竪穴建物跡からの混入と考えられる。

第3号土坑(第8図)

調査区の中央部南東寄りに位置する。A・B-2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第9号ピット
と重複関係にあり、本遺構が第1号竪穴建物跡を切り、第9号ピットに切られている。

規模は、長軸1.26m、短軸0.68mを測る。平面プランは、南北に長い長方形を呈する。深さは、土
層断面観察から深さ48cmを測る。床面は、平坦である。

埋土は、ややレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第1号竪穴建物跡より新しく、第9号ピットより古いものである。

第4号土坑 (第8図)

調査区の南東部に位置する。B-2グリッド内にある。第1・2号竪穴建物跡、第10号ピットと重複関係にあり、本遺構が第1・2号竪穴建物跡双方を切っている。なお、第10号ピットとは上下の関係にあり、直接切り合いの関係にないと思われる。

規模は、長軸0.87m、短軸0.34～0.39mを測る。平面プランは、北端が三角形に突出した南北に長い変形の長方形を呈する。深さは、土層断面観察から最深部で28cmを測る。床面は、中央部がピット状に深くなり、断面形が逆凸型を呈するものである。

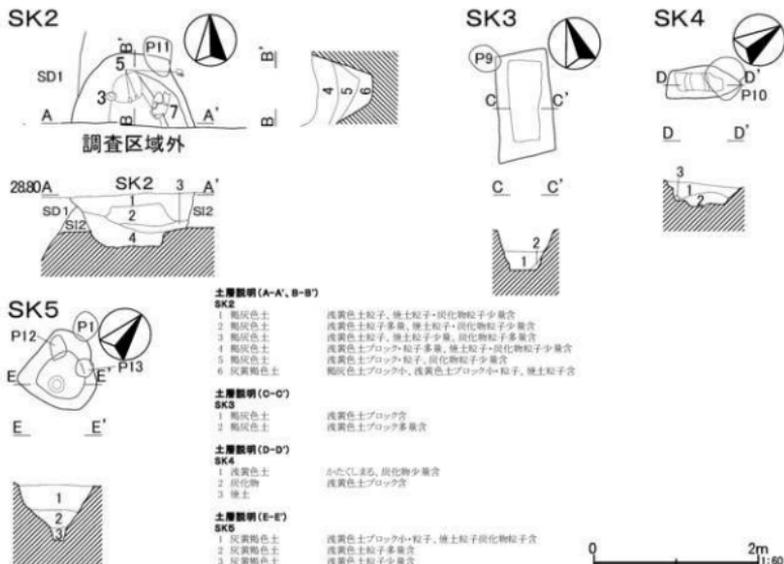
埋土は、ほぼレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第1・2号竪穴建物跡双方より新しいものである。

第5号土坑 (第8・9図、第5表)

調査区の北東部に位置する。B-1・2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第1・12・13号ピットと重複関係にあり、本遺構が第1号竪穴建物跡を切っている。なお、第1・12・13号ピットとは上下の関係にあり、直接切り合いの関係にないと思われる。

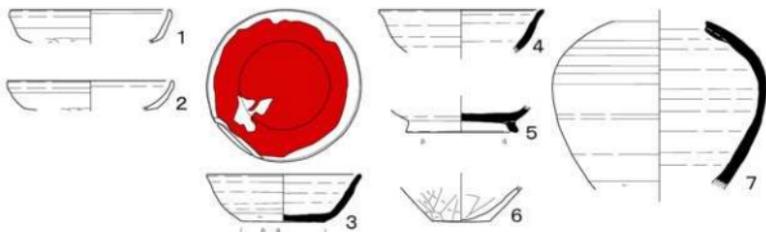


第8図 彦松遺跡第2～5号土坑

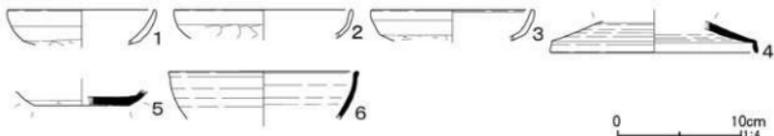
SK 1



SK 2



SK 5



第9図 彦松遺跡第1・2・5号土坑出土遺物

第5表 彦松遺跡第1・2・5号土坑出土遺物観察表 (第9図)

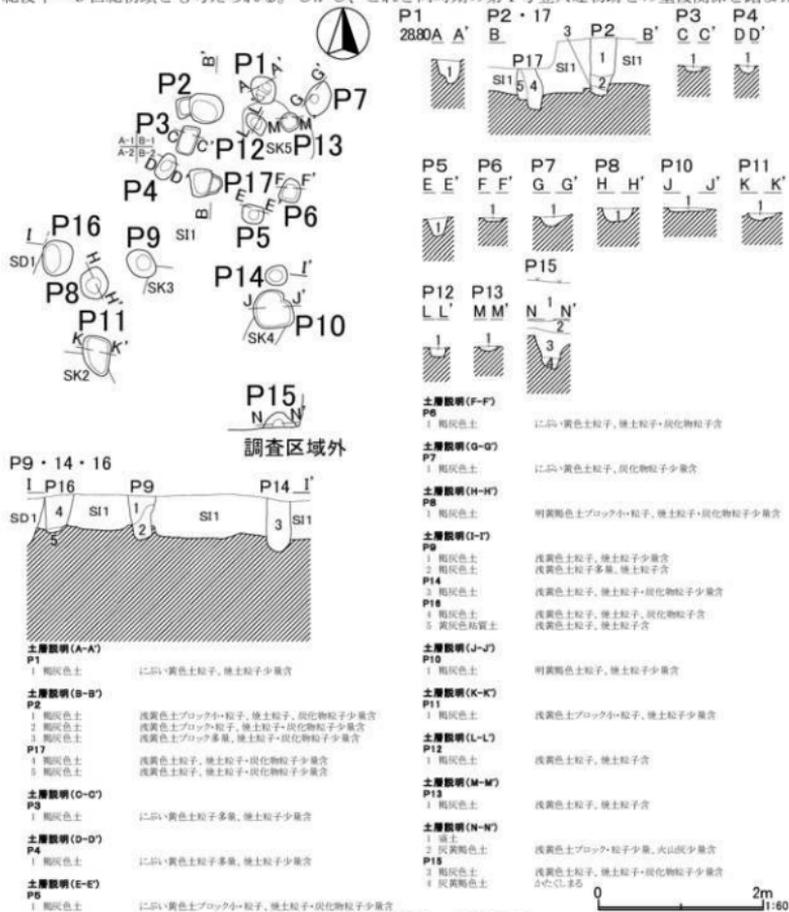
図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK1 1	須恵器 蓋	(13.70)	残存高 1.70	—	ABDWKL	B	灰白色	口縁部 10%以下	未野産。 8C後半～9C初頭。
SK2 1	土師器 杯	(12.70)	残存高 2.70	—	ABEHJL	B	外面：橙色、灰黄色 内面：橙色	口縁部 ～底部15%	9C前半。
SK2 2	土師器 杯	(13.30)	残存高 2.40	—	BGR	B	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙色	口縁部10%	9C前半。
SK2 3	須恵器 杯	12.30	3.80～ 3.95	6.60	ABDGHKL	B	灰白色	95%	内面に朱墨痕あり、朱墨の パレット用途か。未野産。 8C後半～9C初頭。
SK2 4	須恵器 杯	(13.10)	残存高 3.50	—	ABGHL	B	灰白色	口縁部10%	未野産。 9C後半か。
SK2 5	須恵器 埴	—	残存高 2.00	8.90	ABDGL	B	灰白色	底部80%	未野産。 9C後半。
SK2 6	土師器 甕	—	残存高 3.30	(4.70)	ABEGJK	B	外面：にぶい黄橙色、橙色 内面：にぶい褐色	胴部下半 ～底部50%	未野産。 9C後半か。
SK2 7	須恵器 長須瓶	頸部径 (7.40)	残存高 13.70	—	ABGL	A	青灰色	胴部40%	未野産。 9C後半か。
SK5 1	土師器 杯	(11.80)	残存高 2.85	—	AEHJK	B	外面：橙色、にぶい褐色 内面：褐色	口縁部20%	8C後半～9C初頭。
SK5 2	土師器 杯	(14.30)	残存高 2.30	—	ACEJU	B	外面：にぶい褐色、明赤褐色 内面：にぶい赤褐色	10%	8C後半～9C初頭。
SK5 3	土師器 杯	(12.00)	残存高 2.50	—	ABHJK	B	褐色	口縁部10%	8C後半～9C初頭か。
SK5 4	須恵器 蓋	(16.60)	残存高 2.50	—	ABFG L	A	青灰色	口縁部15%	南比企産。 8C後半～9C初頭。
SK5 5	須恵器 埴	—	残存高 1.10	(7.60)	ABDF	A	黄灰色、灰褐色	底部25%	南比企産。 8C前半。
SK5 6	須恵器 埴	(15.00)	残存高 (3.90)	—	ABF	A	灰色	口縁部15%	南比企産。 8C後半。

規模は、長軸 0.90 m、短軸 0.86 m を測る。平面プランは、歪に変形した三角形状を呈する。深さは、土層断面観察から最深度で 68 cm を測る。床面は、南寄りがビット状に深くなり、断面形が漏斗状を呈するものである。

埋土は、水平に堆積していること、埋土に浅黄色土のブロック・粒子が多かれ少なかれ含まれることから、人為的に埋め戻された可能性があると考えられる。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器蓋・坏・壺・甕が検出された。

時期は、8 世紀前半の須恵器坏（第 9 図 SK-5）が見られたが、図示できた大半の遺物が示す 8 世紀後半～9 世紀初頭とも考えられる。しかし、これと同時に第 1 号堅穴建物跡との重複関係を踏まえ



ると、いずれも混入したものと考えざるを得ない。よって、時期の詳細は不明としておきたい。

(3) ビット

ビットは、総数 17 基が検出された。いずれのビットも、第 1・2 号竪穴建物跡が所在する箇所であり、土層断面観察ができたビットを見る限りでは、第 1・2 号竪穴建物跡が埋没した以降に、これらを掘り込んで造られたと考えられる。また、これらのビットは、P 7-P 6-P 14 及び P 14-P 9-P 16、P 2-P 4-P 9 のように、一部直線上に並ぶものも見受けられたが、規則性をもって造られたかの確証には乏しいことから、ここではビットとして一括して報告する。

出土遺物については、図示できた P 2、P 10 のほかに P 8、P 13、P 15 において検出できたが、これ以外のビットにおいては検出できなかった。また、出土遺物が検出できたビットにおいても、P 2 のように所属時期を特定しえなかったもの、P 8・P 13・P 15 のように明確に時期が特定できないものもある。図示した遺物のうち、第 11 図 P 2-1 は、須恵器甕の胴部破片で、厚さは 0.95 ~ 1.00 cm である。胎土は、白色粒子、黒色粒子、長石、石英、片岩を含む。焼成は良好である。色調は外面が暗灰色、内面が灰色である。調整は外面が平行叩き、内面はナデられており、外面に自然釉が付着する。

第 11 図 P 10-1 は、須恵器杯の底部破片で 10% の残存率である。胎土は、白色粒子、黒色粒子、石英、片岩を含む。焼成は良好である。色調は黄灰色である。末野産のもので 9 世紀後半の所産と考えられる。

以下、ビットについて一覧表にて記述する（第 10・11 図、第 6 表）。

第 6 表 産松遺跡ビット一覧表（第 10 図）※〈〉 残存値

番号	位置 (グリッド)	プラン	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時 期	重複関係	備 考
1	B-1	楕円形	33	29	28	なし	不明	SI1, SK5	
2	B-1	楕円形	58	24 ~ 36	71	須恵器甕	特定できない	SI1, SI1P4	プランは、楕円形に隅丸方形の突出部が付く形状
3	B-1・2	隅丸長方形	35	22	7	なし	不明	SI1, SI1P4	
4	B-2	楕円形	33	26	9	なし	不明	SI1	
5	B-2	隅丸方形	26	23	22	なし	不明	SI1, SI1P3	
6	B-2	不整形な 隅丸長方形	28	24	5	なし	不明	SI1	
7	B-1	楕円形	45	28	12	なし	不明	SI1	
8	A-2	楕円形	39	24	17	土師器杯・甕 須恵器杯	9C 代?	SI1	
9	A・B-2	楕円形	38	31	54	なし	不明	SI1, SK3	
10	B-2	ハート形	52	33 ~ 47	4	土師器杯・甕 須恵器杯	9C 後半	SI1, SI1P2, SK4	9C 後半 ~ 9C 初頭の土師器器入 (SI1 からか)
11	A-2	隅丸三角形	48	34	9	なし	不明	SI1, SK2	
12	B-1	不整形な 隅丸長方形	27	19	10	なし	不明	SI1, SK5	
13	B-1	ほぼ円形	22	22	6	土師器杯・甕	9C 前半?	SI1, SK5	
14	B-2	ほぼ円形	26	23	65	なし	不明	SI1	
15	B-2	隅丸方形?	(41)	(18)	41	土師器甕 須恵器杯	9C 代?	SI2	
16	A-2	楕円形	43	37	46	なし	不明	SI1	
17	B-2	不整形	39	25 ~ 34	50	なし	不明	SI1	プランは、隅丸方形に楕円形の突出部が付く形状

P 2



P 10



0 10cm
1/4

第 11 図 産松遺跡第 2・10 号ビット出土遺物

(4) 溝跡

第1号溝跡 (第12・13図、第7表)

調査区の西部、ほぼ西半分を占める位置にあり、やや東に傾くが南北方向に走る。A-1・2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第1・2号土坑と重複関係にあり、本遺構が第1号竪穴建物跡を切り、第1・2号土坑に切られている。また、土層断面観察から、本遺構は第2号竪穴建物跡を切っている。

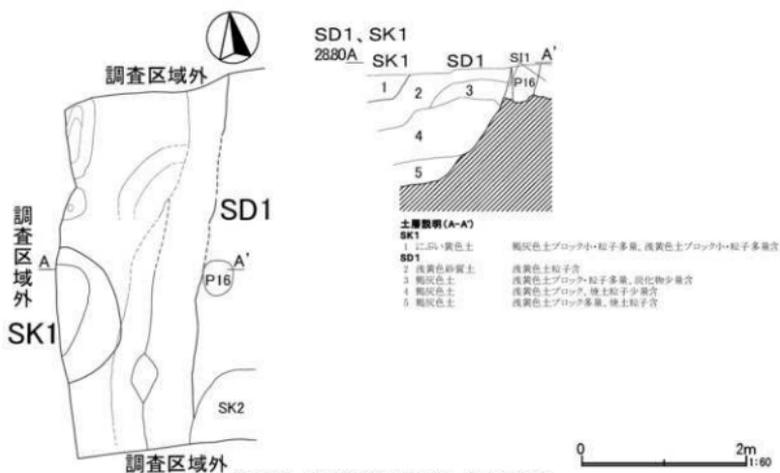
規模は、北部、南部及び西部が調査区域外となり東側の立ち上がり部のみが分かる状況である。検出残存長4.52 m、残存幅は1.46～1.94 mを測る。走行軸の方位は、N-14°-Eを示す。

埋土は、土層断面観察から一部乱れている箇所はあるが、基本的にはレンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。

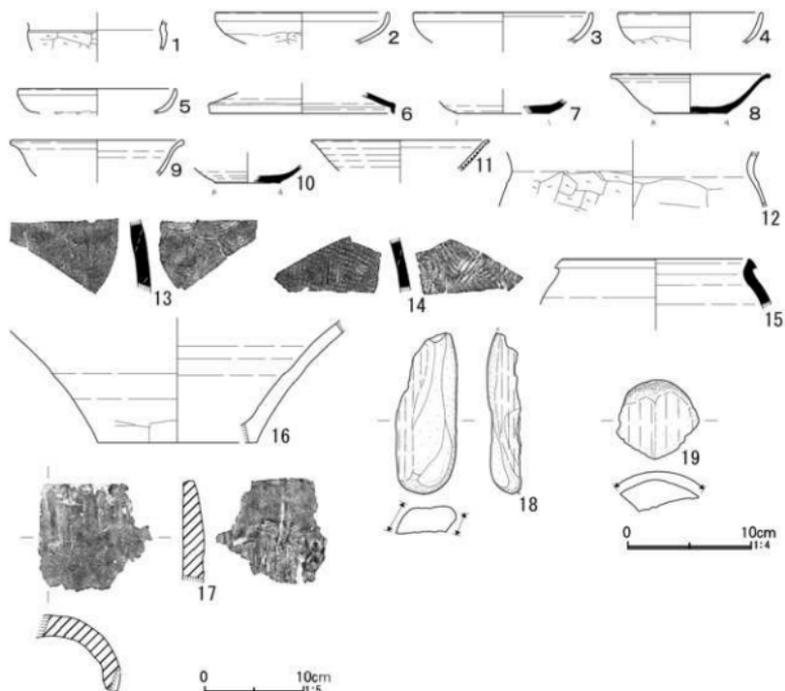
断面形は逆台形状を呈し、深さは、確認面から1.42 mを測る。底面の北西端には、南北に長い楕円形及び円形と考えられるピット状の落ち込みが確認された。いずれも底面から30 cm前後の深さをもっていた。

出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器蓋・杯・甕、灰釉陶器塊、丸瓦、磨石等が検出された。また、瓦質土器片口鉢も見られた。また、特筆すべき点として、丸瓦の内面に製作工人の親指と考えられる指紋が残されていたことである。

時期は、出土遺物を見ると7世紀後半～9世紀後半と幅広い時期であり、また中世に所属する瓦質土器片口鉢もあることから、これを含めて考えると、長期間に亘って使用されたものと考えられる。また、第1・2号竪穴建物跡との重複関係を踏まえると、9世紀後半の須恵器杯(第13図8～10)・短頸壺(同図15)や灰釉陶器塊(同図11)が示す時期を主体として、これ以降の中世でも15世紀以前までが妥当であると考えられる。



第12図 彦松遺跡第1号土坑、第1号溝跡



第13図 彦松遺跡第1号溝跡出土遺物

第7表 彦松遺跡第1号溝跡出土遺物観察表 (第13図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 埴	—	残存高 2.20	—	AJK	B	外面：にぶい赤褐色、 にぶい黄褐色 内面：赤褐色	口縁部下半 ～上半20%	内面に油煙付着。 7C後半小。
2	土師器 杯	(12.90)	残存高 2.50	—	ABDGHJL	B	橙色	口縁部～ 底部15%	8C前半。
3	土師器 杯	(14.40)	残存高 2.50	—	BDHJN	B	外面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色	口縁部10%	8C後半～9C初頭。
4	土師器 杯	(11.60)	残存高 2.55	—	ABDGI	B	外面：灰黄褐色、橙色 内面：にぶい褐色	口縁部25%	8C後半～9C初頭。
5	土師器 杯	(12.60)	残存高 2.00	—	ABDJK	B	にぶい赤褐色	口縁部10%	8C後半～9C初頭。
6	須恵器 蓋	(14.90)	残存高 1.70	—	ABFI	A	外面：灰色 内面：灰色	口縁部 10%以下	南比企産。 8C後半小。
7	須恵器 杯	—	残存高 0.95	(7.40)	ABDF	A	青灰色	底部15%	南比企産。 8C後半～9C初頭小。
8	須恵器 杯	(12.50)	3.20	(6.00)	ABGIL	A	灰色	40%	内外面に火燻痕(特に内面)。 未野産。9C後半。
9	須恵器 杯	(13.80)	残存高 (2.90)	—	ABDILN	C	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色、褐灰 色	口縁部15%	酸化焙焼成。 未野産。9C後半。

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
10	須恵器 環	—	残存高 1.20	(5.20)	ABGL	A	外面：黄灰色 内面：暗灰色	底部30%	未野産。 9C後半。
11	灰釉陶器 埴	(14.20)	残存高 2.50	—	AB	A	灰白色	口縁部10%	内面に灰釉。 兼投産R-90号型式。9C後半。
12	土師器 甕	頸部径 (19.50)	残存高 4.40	—	ABEGJK	A	橙色	頸部付近20%	9C後半～9C初頭。
13	須恵器 甕	厚さ0.85～1.10			ABL	A	灰色	胴部破片	外面：ナデ、自然釉。 内面：青濁波文あて具痕。
14	須恵器 甕	厚さ0.70～0.80			ABGL	A	青灰色	胴部破片	外面：長格子叩き目。 内面：青濁波文あて具痕。
15	須恵器 短頸壺	(15.10)	残存高 3.70	—	ABKL	A	黄灰色、灰色	口縁部10%	未野産。 9C代(9C後半か)。
16	瓦質土器 片口鉢	—	残存高 9.10	(12.80)	ABFGHJLN	A	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色、 にぶい橙色	体部下半15%	内面：残存部のうち底部～体部 2/3平滑(撞部)。 中世(15C以前)。
17	丸瓦	最大長10.90 最大幅8.45 最大厚2.35 重量347g			ADEL	B	外面：オリーブ黒色。 にぶい褐色 内面：黒色	狭端部側 破片	外面：縦位のヘラナデ。 内面：狭端部幅約6cm横位の ヘラナデ。他は縦位の ヘラナデ。指紋残存。 狭端面：横位のヘラナデ。 側面：縦位のヘラナデ。 粘土板一枚張りか。
18	磨石	最大長13.20 最大幅4.90 最大厚2.40 重量214g							磨面は2面。 縦岩製。
19	磨石	最大長6.50 最大幅6.50 最大厚2.50 重量105g							磨面は1面(2か所)。 縦岩製。

(5) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物が少量あったが、図示できるものはなかった。なお、主として平安時代の土師器環・甕、須恵器環が出土したが、9世紀前半と考えられる土師器環、9世紀代と考えられる須恵器環が見られた。

4 調査のまとめ

彦松遺跡においては、本章第2節第3項において記述のとおり、この度の本報告箇所が初めての発掘調査となった。本遺跡内では、これまで個人専用住宅建築工事や建売分譲住宅建築工事、集合住宅建築工事に伴う埋蔵文化財発掘の届出の提出に基づき、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するための試掘調査を数回実施している。その際には、遺物包含層の他に、古墳時代後期～平安時代の遺構・遺物を確認している。しかし、これらが確認された箇所では、遺構を保存するための保護層が確保できることから発掘調査は実施せず、工事施工時の立会調査を実施し、埋蔵文化財に影響を及ぼさないことを確認するに止まっていた。よって、今回の調査成果は、これら試掘調査の成果を検証すると共に補完する内容となった。

では、少し近隣の遺跡まで広げて、その状況を見てみることにする。本章第2節第1項において記述のとおり、本遺跡の周辺には幾つかの遺跡が所在し、本遺跡の東には、隣接して同一遺跡として捉えることができる彦松東遺跡が所在する。また、本遺跡及び彦松東遺跡が立地する自然堤防には、北側に池ノ上遺跡が、さらにその北には大我井遺跡が所在する。また、同じ自然堤防には、本遺跡から南東に少し離れて下宿遺跡が所在する。この自然堤防は、本遺跡の西側を流れる芝川の東側に形成されたものであるが、この芝川は、北へ向かった後東へ向かい、その後は大きく蛇行して南へ向かう流路をとる。つまり、この大きく蛇行する河川に囲まれた内側に自然堤防が形成され、河川を臨むその縁辺部において遺跡の存在が確認されているのである。それは、本遺跡及び彦松東遺跡、池ノ上遺跡、大我井遺跡と北へ続き、そして南の下宿遺跡と続くのである。各々の遺跡は、ほぼ同時期の集落跡が確認されており、掲載順に見ると、古墳時代後期～奈良・平安時代、古墳時代後期～奈良・平安時代さらに鎌倉時代まで、古墳時代前期及び奈良・平安時代～鎌倉時代、古墳時代後期の時期である。これらを総合的に見ると、古墳時代前期ないしは古墳時代後期から奈良・平安時代を経て鎌倉時代まで続く集落が、河川を望む微高地の縁辺部に点々と形成され営まれていたことになる。

目を転じて、本遺跡の芝川を挟んで西を見てみると、芝川の西側に形成された自然堤防に立地する彦松西遺跡が、さらにその西には年代遺跡の所在が確認されている。こちらの2遺跡が立地する自然堤防は、先の自然堤防とは規模が大きく異なり、河川が南北方向から屈曲し東西方向に流れる北側に形成された、極小規模な微高地と考えられる。しかし、遺跡の立地状況については、東の自然堤防の状況と変わりはなく、やはり東ないしは南に河川を臨む自然堤防の縁辺部に形成された集落跡であり、前者が古墳時代後期～奈良時代、後者が古墳時代後期の時期に営まれていたと考えられる。異なる点を強いて挙げるとすれば、現段階では、東の自然堤防の集落とは状況が異なり、古墳時代後期ないしは古墳時代後期～奈良時代と比較的短期間に集落が営まれた点である。

それでは、最後に各遺跡における発掘調査の実施状況とその成果を見てみる。本遺跡においては前述のとおり、このたびの調査が唯一の事例であり、この調査地点は、主として8世紀前半～9世紀後半の時期の集落跡であったことが分かった。では、他の遺跡の状況はというと、本遺跡周辺の遺跡における発掘調査事例は実に少ないのが現状である。本遺跡と同じ立地地形の池ノ上遺跡において1事例、西の自然堤防の彦松西遺跡において1事例と、現在わずか2事例に過ぎない。

池ノ上遺跡の事例は、分譲住宅建築工事に伴う宅地造成予定地であったことから、比較的大規模な面

積約 2,800 m²において調査が実施されたため大きな成果が上がっている。それは、竪穴建物跡 18 棟、土坑 34 基、溝跡 16 条、土師器焼成遺構 2 基等多数の遺構及び遺物が検出されたことである。

竪穴建物跡は、7 世紀後半～9 世紀後半の時期であるが、集落は 7 世紀後半～8 世紀後半の時期に集中しており、一旦時期が開いて 9 世紀後半にわずかに営まれたと考えられている。また、土師器焼成遺構については、遺構からの出土遺物が少なく特定は難しいが、わずかな土器から判断すると大きく 2 時期に分かれ、7 世紀末～8 世紀初頭を中心とした時期及び 9 世紀後半の時期である。これは、それぞれ集落の造営時期と連動しているとも考えられる。加えて、特に 9 世紀後半のものは、同時期の竪穴建物跡が造営された箇所付近に近接して造られている。

もう一つ、注目されるのは、東西に並行して走る溝跡 5 条の検出である。溝跡には、7 世紀末～8 世紀前半の遺物が主体的に出土したものもあるが、これは恐らく当該期の集落の遺物が混入したものと考えられることから、いずれの溝跡も概ね 12～13 世紀及び 13～14 世紀に属するものであると考えられる。12～13 世紀の溝跡 4 条は、土層断面を見ると斬り合いの関係にあることが伺えるため、互いに造り替えて所在していた可能性が考えられる。また、13～14 世紀の溝跡 1 条は、12～13 世紀の溝跡のうち 1 条を切っていることから、平面的には確認されなかったが、概ね 14 世紀まで機能していた溝であったとも考えられる。なお、各々の溝跡の底面の深さを見ると東が浅く、西へ向かって深くなっているものである。これは、調査地点の地形の傾斜にも合致しており、西に現在の芝川が存在することから、地形の高低差を活かし、かつてから西にあった河川への排水路として機能していた可能性が考えられる。

このように、池ノ上遺跡における集落の状況については、7 世紀末～8 世紀前半及び 9 世紀後半、つまり飛鳥時代～奈良時代前半及び平安時代の集落が営まれ、その後の鎌倉時代においても人々の営みがあったということである。

一方、彦松西遺跡の事例は、個人専用住宅建築工事に伴う小規模な面積 63 m²を対象にした調査であり、河川跡と思われる溝跡 1 条及びピット 5 基が検出されているに過ぎない。また、出土遺物もわずかであり、溝跡から 9 世紀前半の須恵器のほかに甕が、遺構外から 9 世紀前半及び 9 世紀後半の土師器等が出土していることから、9 世紀代の平安時代集落の一部であった可能性が考えられる。

以上、本遺跡のほか、周辺集落の状況を発掘調査成果を中心に見てきたが、いずれにしても未だ調査成果の蓄積が極めて少ない状況であり、今後実施されることがあろう発掘調査等から得られる情報に期待し、その情報の一定の蓄積を待って、当地域の歴史的動態等の状況を再考してみたい。

主な引用・参考文献

- 熊谷市教育委員会 2015 『石原古墳群Ⅳ・不二ノ腰遺跡Ⅲ・永井太田北郭遺跡・杉之道遺跡・彦松西遺跡―市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ―』
- 熊谷市教育委員会 2016 『池ノ上遺跡』

下本郷遺跡



Ⅲ 下本郷遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

下本郷遺跡の調査は、建築主（高橋和洋氏）との調整を経て、地盤改良（柱状改良）工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成28年2月19日付けで、埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市今井字下本郷839番1地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59-010 中条古墳群）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成28年4月8日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下107cmで平安時代及び江戸時代の遺構・遺物が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり柱状改良工事を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を平成28年4月18日付け熊教社埋発第32号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成28年5月19日付け教生文第4-79号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。なお、住宅建築に伴う浄化槽埋設箇所については、その規模が狭小であることから工事立会の措置とした。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成28年4月20日付け熊教社埋発第37号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

なお、調査当時は、当該地が埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59-010 中条古墳群）の範囲内にあったため、この埋蔵文化財包蔵地名称で各種書類の処理及び調査を行った。その後、整理・報告書作成作業の際に、当該地で検出された遺構及び遺物の性格が集落跡であると判断されたため、埋蔵文化財包蔵地名称を下本郷遺跡（埼玉県遺跡番号59-117）とした令和4年1月28日付けの埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カードを、同年2月3日付け熊教社埋発第513号で埼玉県教育委員会あてに送付し、埋蔵文化財包蔵地の新規登録をした。また、これに係る埋蔵文化財包蔵地の周知について、同日付け教文資第9-44号で通知があった。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成28年4月25日から同年5月27日にかけて行われた。調査面積は、家屋建築予定箇所全面の58.79㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、堅穴建物跡、堅穴遺構、土坑、溝跡で、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、令和3年4月から令和4年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は平成28年度に、整理・報告書作成は令和3年度に、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第II章の彦松遺跡と同一であるため記述を省略することとし、彦松遺跡の記述を参照されたい。

2 遺跡の概要

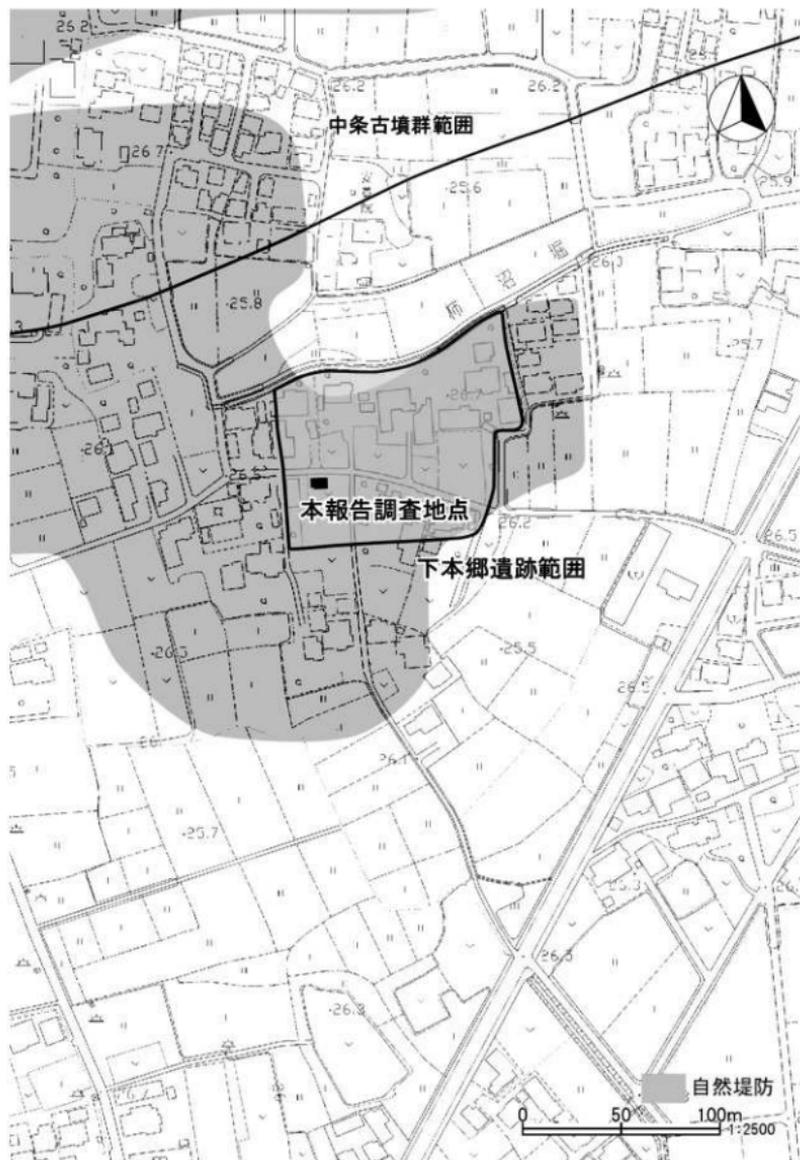
(1) 下本郷遺跡について

下本郷遺跡は、熊谷市北東部中央寄りの荒川左岸、標高26.5m前後の妻沼低地の微高地（自然堤防）に立地する遺跡である。その範囲は面積約10,300㎡と小規模であり、東西約125m、南北約90mを測る規模である（第14図）。

本遺跡は、全体が古墳時代中期～後期に造営された広大な面積を誇る中条古墳群の範囲内にあり、周辺では明確な集落跡が確認されていない。このことは、本遺跡も含めて当地においては、恐らく妻沼低地に点々と所在する自然堤防に遺跡が立地することから、現況が古くから所在する集落である、または、河川の氾濫等により砂・シルト・粘土層が幾重にも厚く堆積したため自然堤防が地下に埋没し平坦な土地となり、現況において旧地形の判別が困難である等の理由により、未だ発見されていない遺跡がある傍証でもありと考えられる。なお、最も近隣に所在する遺跡は、西へ約600mにある古墳時代後期を主体とし中世・近世の集落跡の東浦遺跡である。この遺跡も、やはり小規模な面積の遺跡であるが、本遺跡のすぐ西まで広がる荒川の左岸に形成された新期荒川扇状地の微高地に立地し、本遺跡と同じ低地帯にはあるが若干立地条件が異なる。

本遺跡の存在を知るきっかけは、前述のとおり地形的特徴から、本報告する発掘調査の事前の試掘調査によるが、本遺跡周辺は現況においても周辺より標高がやや高い微高地であり、古くからの集落が形成されている箇所である。そして、前述のとおり、この集落内における新規の住宅建築に伴う事前の試掘調査により、偶然にも遺跡の存在が明らかとなったのである。また、この調査により、奈良時代～平安時代及び近世（江戸時代）の遺跡であると判明したのである。

なお、下本郷遺跡の名称で埋蔵文化財包蔵地の新規登録した際には、北に流れる柿沼堀及びその北側が帯状の地割になっていることから、これが旧河川流路と判断し、また本報告調査地点周辺における開発に伴う工事立会調査情報も合わせて、旧河川流路を範囲の北限とし、東西及び南限の範囲については、工事立会調査により埋蔵文化財の所在が確認されていない箇所を考慮して設定した。結果、現況集落が立地する小規模な範囲となった。ちなみに、本遺跡が立地する自然堤防は、本遺跡範囲のやや南が南端



第 14 図 下本郷遺跡調査地点位置図

とされ、東端は遺跡範囲よりやや東まで及ぶとされる。また、西端は、遺跡範囲から約250m西の箇所
で南北幅が狭まるが約500m先まで、北端は、推定旧河川流路を挟んで本遺跡のやや北西約300mまで
広がるとされる。これは、現況の集落が所在する箇所と概ね合致し、少なくとも本遺跡が形成された時
期以降現代まで、綿々と集落域として利用されていることが分かる。

(2) 調査の方法

調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第IX系）による基準点測量を委託し
て行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に
当たっては、調査区全体が網羅できるよう、北西隅をA-1として東へA・B・C、南へ1・2とし、
Aラインは北から南へA-1・A-2と呼称した。また、Bライン以东もAラインと同様に呼称した。
なお、現場調査時は、北東隅をA-1として西へA・B・Cとしたが、本報告の際に基点の位置を北西
隅に変更した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水系で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方の方法で行った。

(3) 検出された遺構と遺物

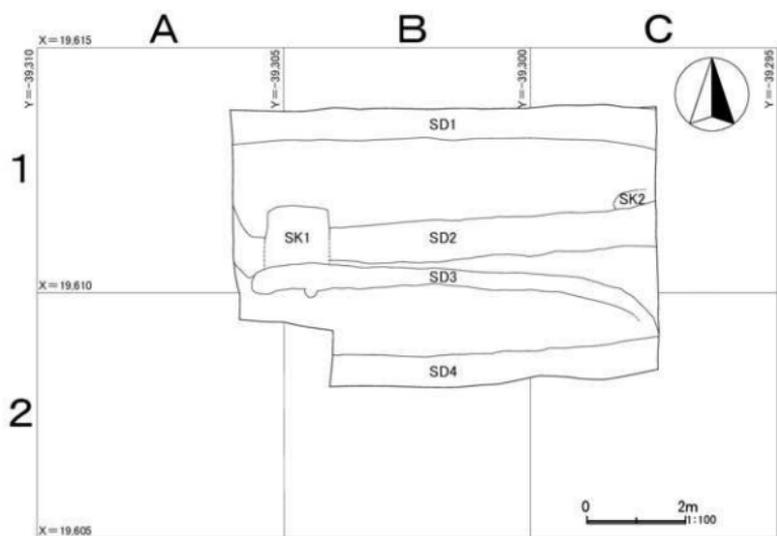
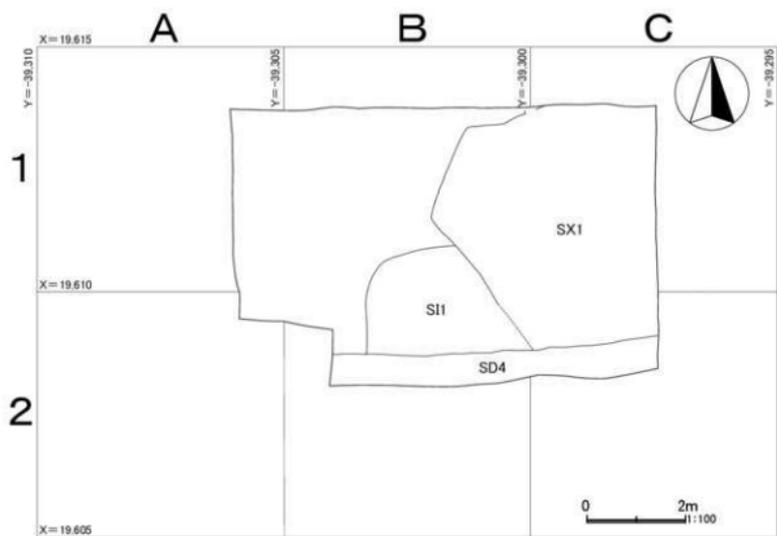
調査地点は、遺跡範囲の南西部の場所で、本調査を実施した初めての事例である。

検出された遺構・遺物は上下2面の文化面があり、遺構については、古い方の下面においては、互い
に重複関係にある竪穴建物跡1棟及び竪穴遺構1基であり、両遺構とも平安時代に属するが、主体とな
る時期は竪穴建物跡が9世紀前半、竪穴遺構が9世紀後半と考えられる。なお、竪穴遺構については竪
穴建物跡である可能性も残される。

一方、新しい方の上面においては、土坑2基、溝跡4条である。一部に土坑と溝跡との重複関係が認
められるが、全て近世（江戸時代）に属すると考えられる。

遺物については、下面の文化面において造られた竪穴建物跡1棟及び竪穴遺構1基の出土遺物量が最
も多く、また竪穴建物跡からの出土量が多かった。これらからの遺物には、土師器坏・甕・台付甕、須
恵器蓋・坏・甕・壺、土錘、石製紡錘車、磨石等が見られた。また、埴輪壺と考えられる須恵器や、古
墳時代前期の土師器台付甕が混じって出土している。

一方、上面の文化面において造られた土坑及び溝跡においては、第4号溝跡と呼称した溝跡が最も出
土量が多く、次いで第3号溝跡であり、その他の遺構についてはさほど出土量は多くなく、特に土坑に
おいては最も少なかった。これらの遺構では、7世紀末から9世紀に至る土師器・須恵器の混入が見ら
れたが、大半が近世に属すると考えられる瓦質土器焙烙、陶器碗・皿・灯火具・水甕・徳利、磁器染付
碗・皿、平瓦・丸瓦、羽口、銭貨、鉄製品の角釘・直刃鎌のほか、砥石・磨石・礫器等も見られた。ま
た、遺構外の出土遺物には、これらと同時期の土師質土器皿、瓦質土器火鉢、多点数の陶器灯火具、陶
器碗・大皿・播鉢、石臼のほか、鉄製品の刀子（小刀）、桃の種子等が見られた。その量はコンテナ（大
きさ：縦54cm、横34cm、深さ15cm）にして3箱であった。



第 15 图 下木郷遺跡調査区全測図 (上: 下面、下: 上面)

3 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第16～19図、第8表）

下面の調査区、中央部南半分に位置する。B-1・2グリッド内にある。第1号竪穴遺構、上面の第4号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第1号竪穴遺構及び第4号溝跡に切られている。

規模は、プランの東部が第1号竪穴遺構に、南部の埋土上半が第4号溝跡に切られている。また、南部が調査区域外にあり、全体を把握するには至っていない。したがって、残存部における規模は、長軸最大長2.42m、短軸最大長3.14mを測る。平面プランは、方形状を呈すると推定されるが、詳細は不明である。主軸方位は、 $N-7^{\circ}-W$ を示すと推定される。

床までの深さは、土層断面観察から40～82cmを測る。埋土は、水平堆積に近いが、南から北へとやや傾斜をもつレンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる（第20図参照）。

床面は、残存部範囲の南部から中央部北寄りにかけて深くなるもので、これを取り囲む周辺部は平坦である。これは、土層断面観察では詳細には分からないが、床面の一部が貼床構造であった可能性が考えられる。また、その深さは約18～30cmであり、埋土は、一部に焼土粒・炭化物粒を含んだ砂質土であった。なお、西寄りの箇所において、最大で東西幅1.3m、南北幅1.9mの範囲に主に炭化物の広がりがある箇所が確認され、貼床の埋土と考えられる直上の土層は砂層であった（以上、第20図参照）。

壁溝は、平面では検出されず、土層断面観察でも分からなかった。

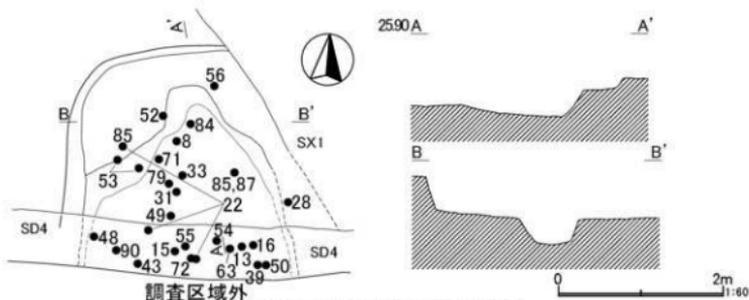
床面には、柱穴等のピットは確認できなかった。

カマドは、推定される箇所も含めて検出できなかった。

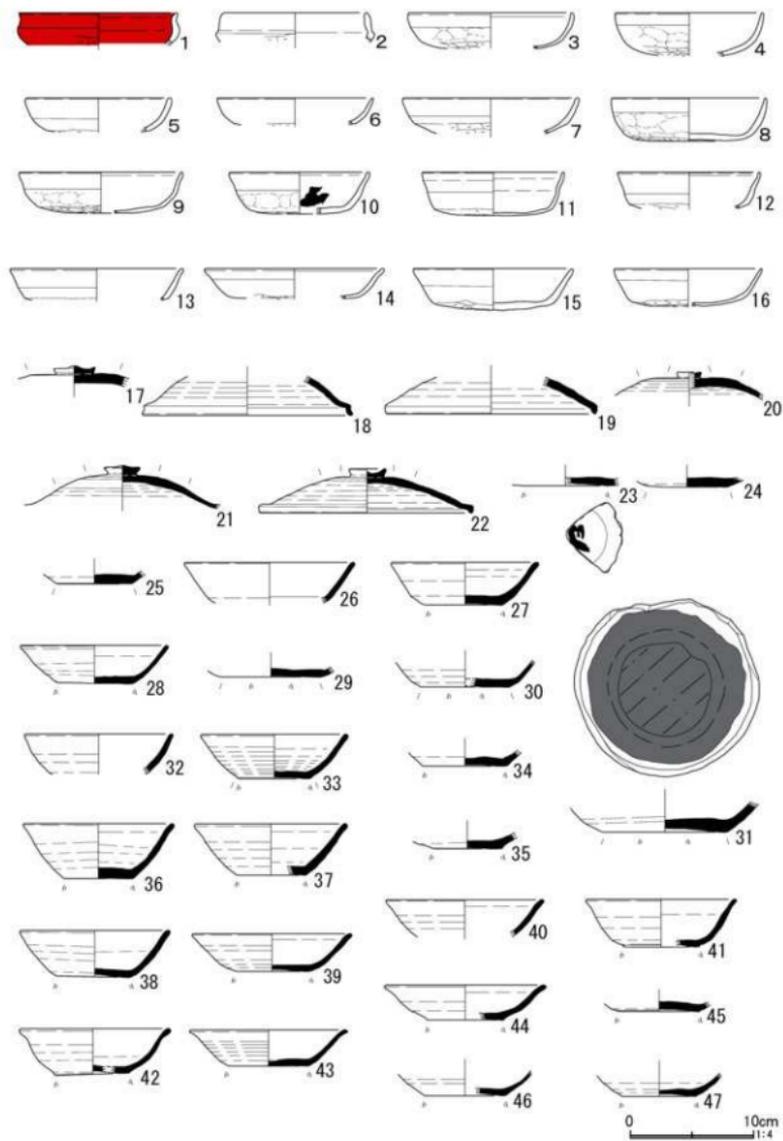
貯蔵穴についても、検出できなかった。

出土遺物は、土師器環・甕・台付甕、須恵器蓋・環・甕・壺、土錘、石製紡錘車、磨石等が検出され、貼床構造であった可能性が考えられる、遺構残存部範囲の南部から中央部北寄りにかけての範囲に集中して出土した。なお、混入品と思われるが、須恵器埴輪壺片が出土し、また、8世紀前半のものと考えられる須恵器環の底部には墨書文字の一部が見られる。

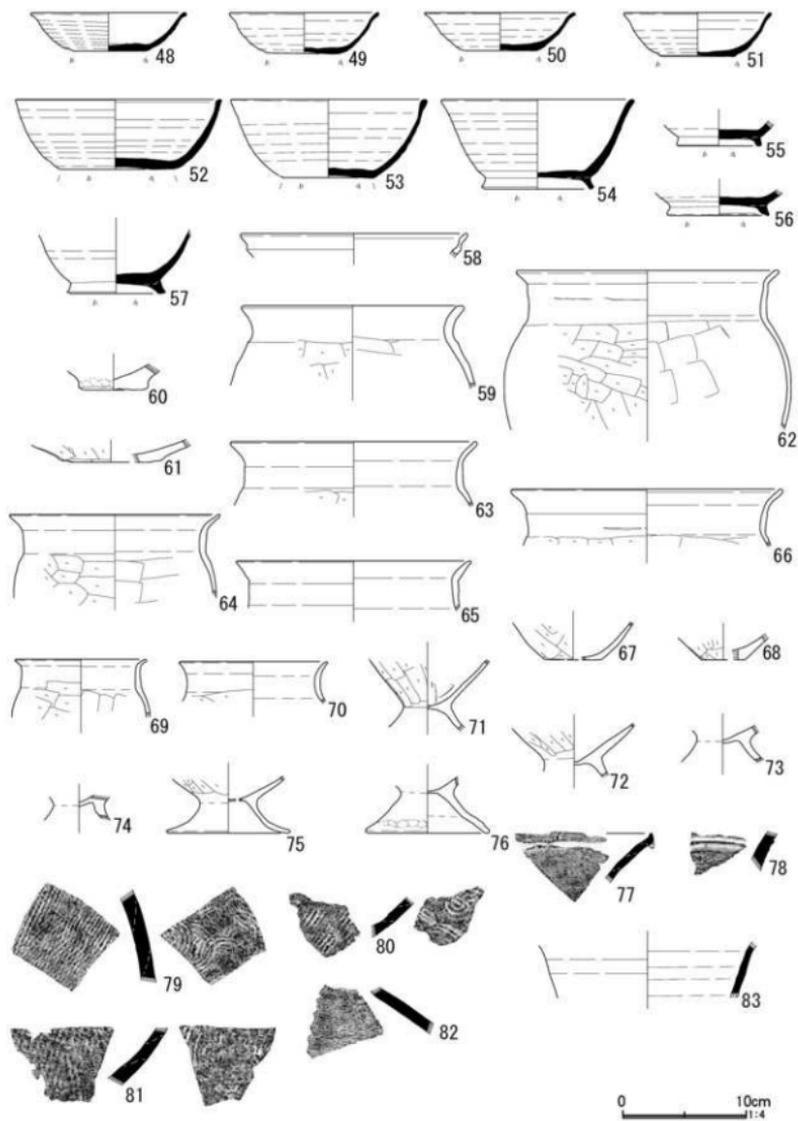
時期は、一部に6世紀後半の土師器環、7世紀末～8世紀初頭の須恵器蓋、8世紀前半の須恵器環・埴及び8世紀後半～9世紀初頭の須恵器蓋・環、そして9世紀後半の須恵器環・埴及び土師器環・甕・



第16図 下本郷遺跡第1号竪穴建物跡



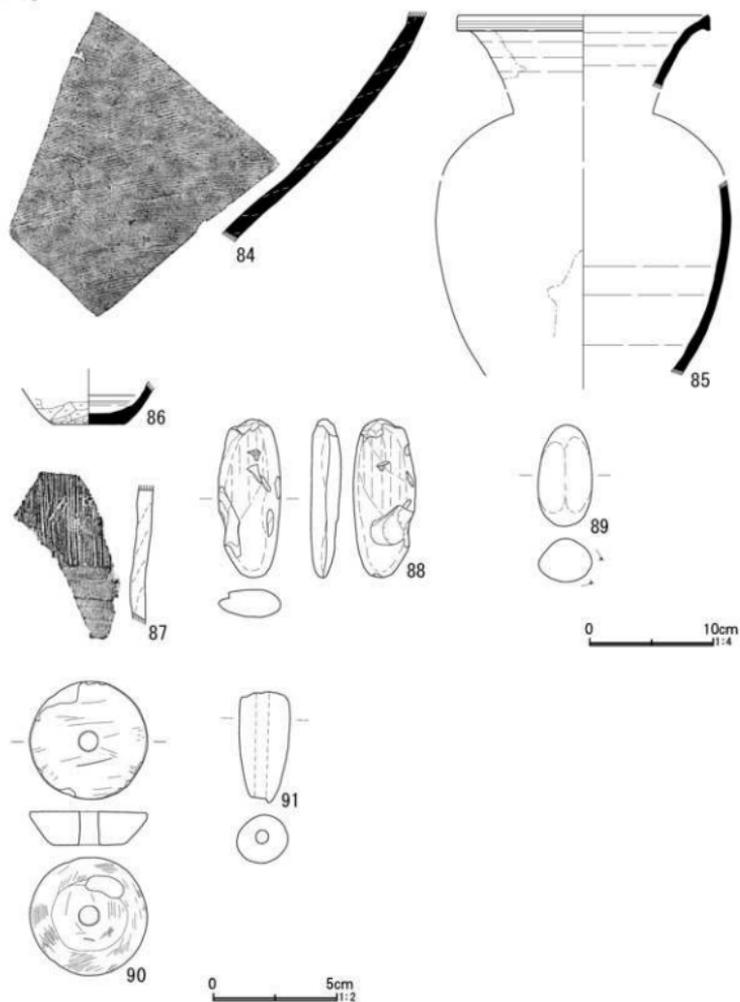
第 17 图 下本郷遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物(1)



第 18 图 下本郷遺跡第 1 号竪穴建物跡出土遺物(2)

台付甕が多数見られるが、重複する第1号竪穴遺構の所属時期を加味して考えると、9世紀前半の土師器坏（第17図4～9）や須恵器蓋・坏（同図21・22・29・30・32）が示す時期が適当と考えられる。

なお、本遺構の所属時期以外の時期の遺物は流れ込みと思われるが、多数見られた9世紀後半の須恵器坏・埴及び土師器坏・甕・台付甕は、重複する第1号竪穴遺構に所属し、そこからの流れ込みと考えられる。



第19図 下本郷遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(3)

第8表 下木郷遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表(第17～19区)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 杯	(12.70)	残存高 2.70	—	BOGJK	B	褐色	口縁部 10%	内外面に赤彩。比企型杯。 6C 末。流れ込み。
2	土師器 杯	(11.40)	残存高 2.40	—	ADJL	B	褐色	口縁部 10%	6C 後半。流れ込み。
3	土師器 杯	(13.20)	残存高 2.90	—	BEHL	B	外面：褐色 内面：にぶい褐色	15%	(8C 後半～)9C 初頭。
4	土師器 杯	(11.90)	残存高 3.50	—	ABEJJK	C	外面：にぶい褐色 内面：褐色	40%	9C 前半。
5	土師器 杯	(11.60)	残存高 2.70	(8.10)	ARDJL	B	にぶい褐色。褐色	20%	9C 前半。
6	土師器 杯	(12.50)	残存高 2.20	—	CDJL	B	外面：にぶい褐色 内面：褐色	口縁部 20%	着碱が濃く、ヘラタヌリ調整 が読み取れない。9C 前半。
7	土師器 杯	(14.10)	残存高 2.90	—	ABEL	B	褐色	10%	(9C 初頭～)9C 前半。
8	土師器 杯	(12.40)	3.50	(8.80)	ARJN	A	外面：褐色。褐色。 内面：褐色。にぶい褐色	50%	内面に若干窪付着あり、灯明 用迹か。9C 前半。
9	土師器 杯	(13.10)	3.30	—	ABEJKN	B	褐色	25%	9C 前半。
10	土師器 杯	(11.20)	(3.40)	—	AEJL	B	褐色。にぶい褐色	45%	内面に窪付着し、灯明用迹か。 9C 前半～中頭。
11	土師器 杯	(11.40)	3.50	9.50	AERJL	B	褐色	20%	9C 後半。
12	土師器 杯	(11.40)	残存高 2.80	—	ABEJLM	B	外面：明赤褐色 内面：にぶい黄褐色	口縁部 20%	9C 後半。
13	土師器 杯	(13.90)	残存高 2.60	(11.60)	ABCIJK	B	褐色	口縁部 30%	着碱が濃く、ヘラタヌリ調整 が読み取れない。9C 後半。
14	土師器 杯	(14.40)	残存高 2.40	(10.60)	ABDEHK	B	褐色。にぶい黄褐色	口縁部 15%	9C 後半。
15	土師器 杯	(12.80)	3.40	—	AERJL	B	にぶい褐色	45%	9C 後半。
16	土師器 杯	11.90	残存高 3.05	—	AEJ	B	褐色	80%	内面に窪付着か。 9C 後半。
17	須恵器 蓋	—	残存高 1.10	—	ARDJLN	C	外面：灰黄色 内面：灰黄褐色	天井部 50%	未野産。7C 末～8C 初頭。 流れ込み。
18	須恵器 蓋	(16.85)	残存高 3.20	—	ABDFGN	A	灰色	20%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
19	須恵器 蓋	(16.80)	残存高 3.00	—	ABDFGN	B	灰色	20%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
20	須恵器 蓋	—	残存高 1.90	—	ABDJLN	A	青灰色	25%	直径 (1.95) cm。 南比企産。8C 後半～9C 初頭。
21	須恵器 蓋	—	残存高 3.20	—	ABDGL	A	外面：灰色 内面：灰色。灰オリーブ色	40%	直径 2.9 cm。 未野産。9C 前半。
22	須恵器 蓋	17.10	3.60	—	ARDJLN	A	外面：黄灰色 内面：灰白色	70%	直径 3.0 cm。 未野産。9C 前半。
23	須恵器 杯	—	残存高 0.05	(8.70)	ABDF	A	外面：灰白色 内面：灰白色	底部 25%	底部外面に墨書「口」(肉月の 一部)。
24	須恵器 杯	—	残存高 0.55	6.60	ABDFG	A	外面：灰白色 内面：灰白色	底部 90%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
25	須恵器 杯	—	残存高 0.75	(6.20)	ABDFN	A	灰白色	底部 50%	南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
26	須恵器 杯	(13.60)	残存高 3.30	—	ABDF	A	灰白色。灰色	15%	内外面に穴穿痕。 南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
27	須恵器 杯	(11.60)	3.50	6.00	ABDFG	B	外面：灰色。灰白色 内面：灰白色	70%	内外面に穴穿痕。 南比企産。 8C 後半～9C 初頭。
28	須恵器 杯	11.80	3.10	6.20	ABDLN	A	外面：灰色 内面：青灰色	80%	未野産。 (8C 後半～)9C 初頭。
29	須恵器 杯	—	残存高 0.50	(8.00)	ABDFGN	A	灰色	底部 25%	南比企産。 9C 前半。
30	須恵器 杯	—	残存高 2.00	(7.15)	ABDFI	A	外面：灰白色 内面：灰白色	25%	南比企産。 9C 前半。
31	須恵器 杯 (転写版)	—	残存高 2.30	9.90	ABFGN	A	灰色	底部 100%	内面の一部が平滑。その平滑部 の周囲に墨付着痕。南比企産。
32	須恵器 杯	(11.80)	残存高 3.30	—	ABDF	A	青灰色	口縁部～体部 20%	内外面に穴穿痕。 南比企産。9C 前半。
33	須恵器 杯	(11.70)	3.60	(5.70)	AEFGLN	A	外面：灰色 内面：灰白色	50%	南比企産。 9C 後半。
34	須恵器 杯	—	残存高 1.10	(6.60)	ABDFGJL	A	外面：灰色。淡黄色 内面：灰色	底部 45%	南比企産。 9C 後半か。
35	須恵器 杯	—	残存高 0.95	(5.70)	ABEG	A	灰色	底部付近 50%	東金子産か。 9C 後半。
36	須恵器 杯	11.90	4.50	5.60	ABDJLN	A	灰色。灰白色	70%	未野産。 9C 後半。
37	須恵器 杯	(12.10)	4.20	(5.50)	ADL	A	外面：灰色。青灰色 内面：灰色	30%	未野産。 9C 後半。
38	須恵器 杯	12.00	最大 3.90	6.00	ABDFLN	B	外面：灰黄色。灰白色 内面：灰白色	45%	南比企産。 9C 後半。

国版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
39	須恵器 坏	(12.80)	3.10	(6.10)	ABOGLN	A	灰白色、灰色	50%	未野産。 9C 後半。
40	須恵器 坏	(12.50)	残存高 3.05	—	ADFGN	A	灰白色	口縁部 30%	内面に火押痕。 南比金産。9C 後半。
41	須恵器 坏	(12.00)	3.90	(6.20)	ADFN	B	外面：灰白色、灰黄色 内面：灰白色、褐色	40%	南比金産。 9C 後半。
42	須恵器 坏	(11.90)	3.50	6.00	ADLN	A	外面：灰色 内面：黄灰色	45%	未野産。 9C 後半。
43	須恵器 坏	(12.40)	3.05	(6.50)	ADGL	A	外面：灰色、オリーブ褐色 内面：灰色、灰白色	25%	未野産。 9C 後半。
44	須恵器 坏	(12.70)	2.85	(6.10)	ADBG	B	灰色	15%	未野産。 9C 後半。
45	須恵器 坏	—	残存高 0.60	6.60	ADFGLN	A	灰色	底部 95%	南比金産。 9C 後半。
46	須恵器 坏	—	残存高 1.80	(6.50)	ADL	A	灰色	体部下半 ～底部 40%	未野産。 9C 後半。
47	須恵器 坏	—	残存高 1.70	(6.00)	ADGL	A	外面：灰色 内面：黄灰色	底部付近 50%	未野産。 9C 後半。
48	須恵器 坏	(12.40)	3.15	5.80	ADGLN	A	灰白色、灰色	50%	未野産。 9C 後半。
49	須恵器 坏	12.00	3.40	5.90	ADGL	A	黄灰色、灰白色	70%	未野産。 9C 後半。
50	須恵器 坏	(12.00)	3.10	(6.00)	ADGL	A	黄灰色	50%	未野産。 9C 後半。
51	須恵器 坏	(11.80)	3.55	(6.30)	ADBL	A	外面：灰色 内面：灰色 外面：暗灰色、暗青灰色、 灰色 内面：灰色	35%	未野産。 9C 後半。
52	須恵器 坏	(16.50)	5.70	9.00	ADFL	A	外面：暗灰色、暗青灰色、 灰色 内面：灰色	40%	南比金産。 9C 前半。
53	須恵器 坏	(15.70)	6.40	(7.20)	ADFGLN	A	外面：灰色 内面：灰色	70%	南比金産。 9C 後半。
54	須恵器 坏	(15.30)	7.30	8.50	ADLN	A	外面：灰色 内面：灰色	55%	未野産。 9C 後半。
55	須恵器 坏	—	1.75	6.50	ADFL	A	外面：灰色 内面：灰白色	底部 100%	南比金産。 9C 後半。
56	須恵器 坏	—	残存高 1.75	8.00	ADLN	B	灰白色	底部 100%	未野産。 9C 後半。
57	須恵器 坏	—	残存高 4.80	(8.00)	ADL	B	外面：灰色、灰黄色 内面：灰白色	40%	未野産。 9C 後半。
58	土師器 台付罐	(18.10)	残存高 2.00	—	ADGM	B	灰黄褐色	口縁部 10%	S字口縁台付罐。 古埴埴前期。流れ込み。
59	土師器 壺	(17.60)	残存高 6.50	—	ADGN	B	浅黄色	口縁部 20%	9C 前半か。 流れ込み。
60	土師器 壺	—	残存高 2.10	(5.50)	ABCIN	B	褐色	底部 25%	
61	土師器 壺	—	残存高 1.40	(8.10)	ADGN	B	外面：にぶい黄褐色、黄灰色 内面：浅黄褐色	底部 20%	
62	土師器 壺	(20.80)	残存高 13.00	—	ADJKB	B	外面：にぶい褐色、褐色 内面：褐色	口縁部～ 胴部上半 30%	9C 後半。
63	土師器 壺	(19.80)	残存高 5.20	—	ADKJKB	B	褐色、にぶい黄褐色	口縁部 20%	9C 後半。
64	土師器 壺	(16.80)	残存高 7.50	—	ADGJL	B	外面：褐色、にぶい黄褐色 内面：褐色、明赤褐色 外面：にぶい褐色、明赤褐色 内面：にぶい褐色。	口縁部～ 胴部上半 20%	9C 後半。
65	土師器 壺	(18.90)	残存高 3.80	—	ADGJL	B	外面：褐色、にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色。	口縁部 20%	9C 後半。
66	土師器 壺	(20.70)	残存高 4.60	—	ADGJKB	B	外面：褐色、にぶい褐色 内面：褐色、にぶい褐色	口縁部 20%	9C 後半。
67	土師器 壺	—	残存高 3.00	(4.70)	ADKHJK	B	外面：にぶい褐色 内面：褐色	底部付近 15%	
68	土師器 壺	—	残存高 1.80	(3.50)	ADJKB	B	外面：褐色、灰黄褐色 内面：明赤褐色	底部付近 25%	
69	土師器 台付罐	(10.50)	残存高 5.40	—	ADHKL	B	外面：褐色、灰褐色 内面：黒褐色、灰褐色	口縁部 40%	9C 後半。
70	土師器 台付罐	(11.80)	残存高 3.20	—	ADGJKB	B	外面：褐色、灰褐色 内面：にぶい褐色、灰褐色	口縁部 10%	9C 後半。
71	土師器 台付罐	—	残存高 5.50	—	ADJL	B	外面：褐色、にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色、灰黄褐色	胴部下半 ～底部 40%	9C 後半。
72	土師器 台付罐	—	残存高 4.00	—	ADJKB	B	外面：明赤褐色、灰褐色 内面：明赤褐色	胴部下半 ～台部上半 30%	胴部下半に覆付着。 9C 後半。
73	土師器 台付罐	—	残存高 2.30	—	ADGJKB	B	外面：褐色 内面：灰色	台部付近 25%	9C 代 (9C 後半か)。
74	土師器 台付罐	—	残存高 1.90	—	ADJKB	B	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色、灰褐色	台部付近 30%	9C 代 (9C 後半か)。
75	土師器 台付罐	—	残存高 4.40	(9.80)	ADJKB	B	褐色、にぶい褐色	台部付近 20%	台付内外面に一部に覆付着。 9C 後半。
76	土師器 台付罐	—	残存高 4.00	9.70	ADJL	B	外面：褐色、にぶい赤褐色 内面：褐色、灰褐色	台部 60%	9C 代 (9C 後半か)。
77	須恵器 壺	—	—	—	ADG	A	灰色	口縁部破片	口唇部・内面に自然釉。
78	須恵器 壺	—	—	—	ADL	A	灰色	頸部破片	3条以上の突帯下に脱状文脈。 外面に自然釉。

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
79	須恵器 甕	厚さ	1.10 ~ 1.15		ABGHLN	A	外面：黒褐色 内面：赤灰色	胴部破片	外面：平行印き（キザミ入り）、 内面：青海波文あて具痕。 未野産か。	
80	須恵器 甕	厚さ	0.60 ~ 0.80		ABEG	B	外面：にぶい赤褐色 内面：暗青灰色	胴部破片 （底部付近）	未野産。	
81	須恵器 甕	厚さ	0.80 ~ 1.10		ADGL	A	外面：暗青灰色 内面：青灰色	胴部下半破片 （底部付近）	外面：長梯子印き。内面：わづ かに青海波文あて具痕。未野産。	
82	須恵器 甕	厚さ	0.75 ~ 0.85		ABIFG	A	外面：青灰色 内面：青灰色	胴部上半破片	外面：平行印き。 内面：ヨコナダ、ナダ。 南比企産。	
83	須恵器 甕	—	残存高 4.20	—	ABL	A	灰色	胴部破片	内面に自然釉。	
84	須恵器 甕	厚さ	0.95 ~ 1.40		ABFGN	A	外面：灰色 内面：灰色	胴部破片	南比企産。	
85	須恵器 壺	(20, 20)	6.05 + (15.80)	—	ABFGLN	A	外面：灰色、黄灰色 内面：灰白色、灰色	口縁部 25% 胴部中央 ~ 下半 20%	胴部内外面の一部に自然釉。 南比企産。	
86	須恵器 壺	—	残存高 3.00	5.70	ABKGHLN	A	外面：青灰色、灰色 内面：灰色	底部 100%	未野産。	
87	須恵器 埴輪蓋	厚さ	1.10 ~ 1.25		ABG	B	外面：灰色 内面：青灰色	胴部下半破片?	未野産。	
88	磨石	最大長	12.90	最大幅	5.00	最大厚	2.40	重量	172 g	両面とも中央部付近を磨面として 使用か。砂岩製。
89	磨石	最大長	8.20	最大幅	4.30	最大厚	3.50	重量	175 g	ほぼ全周する磨面（長端両側を 除く）。砂岩製。
90	砂鉢車 （弾丸車）	広端直径	4.80	狭端直径	2.70 ~ 3.10	最大厚	1.35	重量	46 g	孔径 0.75 cm。 表面に多数の樹痕。粘板岩製。
91	土埴	残存長	4.50	最大幅	2.05	最大厚	1.95	重量	16.5 g	65% 孔径（最大）0.55 cm。

(2) 竪穴遺構

第 1 号竪穴遺構（第 20・21 図、第 9 表）

下面の調査区、東半部に位置する。B・C-1・2 グリッド内にある。第 1 号竪穴建物跡、上面の第 1・4 号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第 1 号竪穴建物跡を切り、第 1・4 号溝跡に切られている。

規模は、プランの東部、北部及び南部が調査区域外にあり、全体を把握するには至っていない。したがって、残存部における規模は、長軸最大長 5.90 m、短軸最大長 5.00 m を測る。平面プランは、やや不整形な方形を呈すると推定されるが、詳細は不明である。主軸方位は、N-33°-W を示すと推定される。

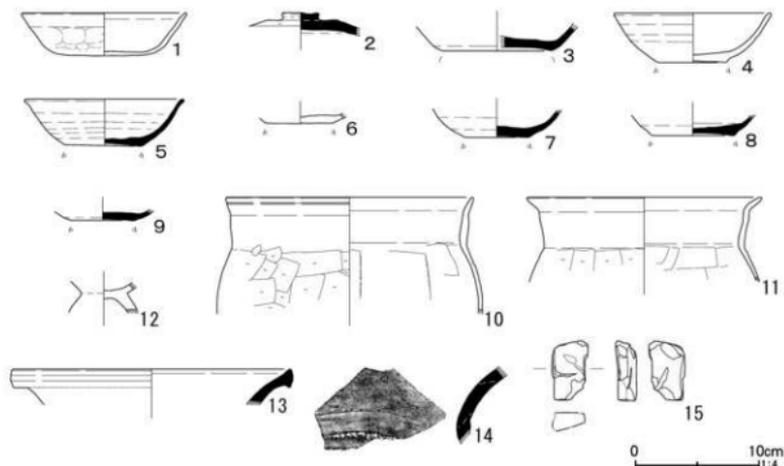
床までの深さは、土層断面観察から 58 ~ 80 cm を測る。埋土は、やや水平堆積に近いレンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。また、調査区東壁の土層断面観察において、大きく 2 時期の堆積が認められた（土層断面 C-C' の第 1 ~ 4 層が第 1 次堆積、第 5 ~ 13 層が第 2 次堆積と考えられる）。

床面は、ほぼ平坦であるが、残存する壁の際は、幅 10 ~ 64 cm のテラス状になっていて、特に北西隅付近が幅広である。また、遺構残存部範囲の北寄りに大きく 2 か所及び中央部の東寄り 1 か所に、炭化物の広がり（一部少量の焼土を含む）がある箇所が確認された。なお、貼床構造の箇所は認められない。

床面には、ピットが 2 基（P1・3）、床面から壁際に 1 基（P2）確認できた。これらの規模及び平面形は、P1 が長軸推定 90 cm、短軸 70 cm、深さ 16 cm の楕円形、P3 が残存長軸 50 cm、短軸 42 cm、深さ 37 cm の楕円形、P2 が残存長軸及び短軸 72 cm、深さ 8 cm の推定隅丸形状である。

なお、北壁に推定長軸 62 cm、短軸 35 cm、深さ 24 ~ 30 cm を測るカマド状の長楕円形の掘込みが確認された。この掘込みの埋土は、上層に焼土層、中間層に焼土粒・炭化物を少量含む浅黄色土、下層に炭化物を多量を含む灰黄色砂質土であり、本遺構を竪穴建物と捉えるとカマドである可能性が考えられるが、確証がないことから、本報告では本遺構を竪穴遺構とした。

出土遺物は、土師器・甕・杯・甕、須恵器・甕・杯・甕、磁石等が検出され、遺構残存部範囲の南端



第21図 下本郷遺跡第1号竪穴遺構出土遺物

第9表 下本郷遺跡第1号竪穴遺構出土遺物観察表 (第21図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 杯	(13.20)	3.50	(7.60)	AEH	B	にぶい橙色、橙色	30%	9C後半。
2	須恵器 蓋	—	残存高 1.30	—	ABDG	B	灰白色、黄灰色	天井部付近 65%	径径3.0cm。 未野産。(9C後半～)9C初頭。
3	須恵器 杯	—	残存高 1.90	(8.70)	ABFN	A	外面：青灰色 内面：黄灰色	底部 50%	南比企産。 9C後半～9C初頭。
4	須恵器 杯	(12.60)	4.00	5.70	AEFGN	C	灰黄色、橙色	70%	口縁部～体部上半の一部に埋 付着し、灯明皿用途か。 南比企産。9C後半。
5	須恵器 杯	(12.70)	最大 3.80	6.20	ABGL	A	灰白色	80%	未野産。 9C後半。
6	須恵器 杯	—	残存高 0.50	5.40	ABEFN	B	橙色	底部 100%	酸化塩焼成。 南比企産。 9C後半。
7	須恵器 杯	—	残存高 2.20	5.20	ABGL	A	外面：灰色 内面：灰色	底部付近 100%	未野産。 9C後半。
8	須恵器 杯	—	残存高 1.70	(6.70)	ABDG	A	外面：黄灰色 内面：黄灰色、灰色	底部付近 50%	未野産。 9C後半。
9	須恵器 杯	—	残存高 0.80	5.20	ADFN	A	灰白色	底部 100%	南比企産。 9C後半。
10	土師器 壺	(19.80)	残存高 9.50	—	ABDEIJK	B	外面：橙色、灰白色、灰褐色 内面：橙色、にぶい褐色	口縁部～ 胴部上半 20%	9C後半。
11	土師器 壺	(18.70)	残存高 6.90	—	ABEGIK	B	橙色	口縁部 25%	9C後半。
12	土師器 台付壺	—	残存高 2.50	—	ABEIJKN	B	橙色	台部上半 付近 30%	9C後半。
13	須恵器 壺	(22.40)	残存高 2.90	—	BDGI	B	外面：灰色 内面：褐灰色	口縁部 10%	内外面に自然蝕。
14	須恵器 壺	—	厚さ 0.90～1.10	—	ABEFG	A	黄灰色	口縁部破片	口縁部内面に自然蝕。 胴部に櫛状工具による刺突文 施文。南比企産。
15	砥石	—	—	—	—	—	—	最大長 4.80 最大幅 2.80 最大厚 1.50 重量 27.4 g	使用面5面(2面は欠損顯著)。 一方端(上端)欠損。砂岩製。

(3) 土坑

第1号土坑 (第22・23図、第10表)

上面の調査区、西部の中央に位置する。A・B-1グリッド内にある。第2・3号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号溝跡を切り、第3号溝跡に切られている。

規模は、南部が第3号溝跡に切られ詳細不明であるが、長軸1.30m、残存短軸1.20mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所方で方形を呈する。深さは、土層断面観察から深さ24cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。また、底面直上に堆積した土層には、一部において多量の炭化物が含まれていた。

出土遺物は、図示できたのが鉄製品釘(第23図SK1-1)だけであり、このほか土師器坏・甕、須恵器坏、瓦質土器培塔、陶器碗、磁器碗、平瓦(棧瓦)等が検出された。

時期は、主体となる出土遺物から判断すると近世(江戸時代)と考えられる。また、重複する同じ近世(江戸時代)に所属すると考えられる第3号溝跡よりは古く、第2号溝跡よりは新しい。なお、土師器坏は7世紀末～8世紀初頭に、須恵器坏は9世紀代に所属すると考えられ、流れ込みの遺物である。

第2号土坑 (第22・23図、第10表)

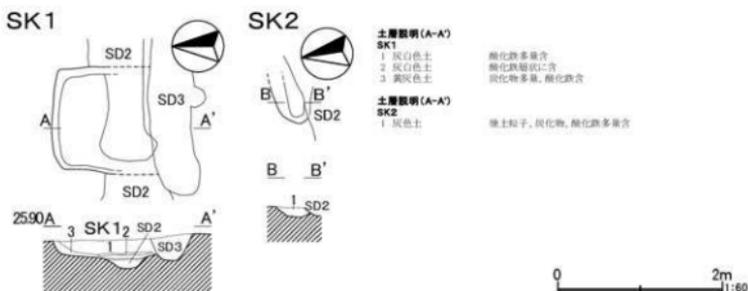
上面の調査区、東端の中央部付近に位置する。C-1グリッド内にある。第2号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号溝跡に切られている。

規模は、東部が不明であるが、検出長軸0.52m、検出残存短軸0.50mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所方で楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から12cmを測る。断面形状は、逆台形を呈する。

埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、図示できたのが須恵系土師質土器坏(第23図SK2-1)だけであり、このほか土師器坏・甕、須恵器坏等が検出された。

時期は、第2号溝跡の所属時期である近世(江戸時代)より以前であり、図示できた須恵系土師質土



第22図 下本郷遺跡第1・2号土坑

器坏が示す時期である10世紀前半と考えるのが妥当であるか。なお、出土した土師器坏には7世紀末～8世紀初頭及び8世紀後半～9世紀初頭と考えられるものがあり、また須恵器坏は9世紀代と考えられるものであることから、これらは流れ込みの遺物と考えられる。

(4) 溝跡

第1号溝跡 (第24・25図、第11表)

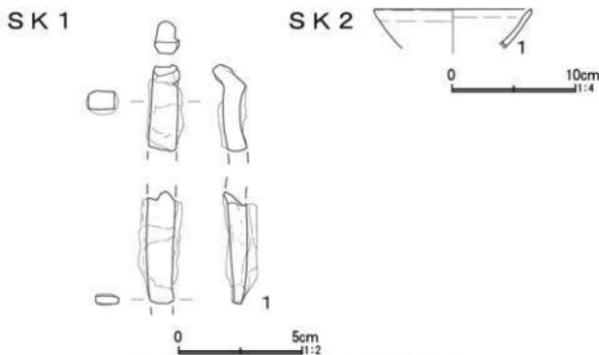
上面の調査区、北部の調査区壁面に沿う位置にあり、ほぼ東西方向に走る。A・B・C-1グリッド内にある。重複関係にある遺構はなく、単独で所在する。ただし、下面の第1号竪穴遺構の埋土最上面をわずかに切っていると考えられるため、上下関係において重複している。

規模については、遺構の検出状況が北部、東部及び西部が調査区域外となり、南側の立ち上がり部のみが見られる状況である中、東端でかろうじて両側の立ち上がり部が確認できた箇所があったことから、検出長8.66m、幅は0.78mを測る。走行軸の方位は、ほぼ東西であり、東端がN-95°-Eを示しわずかに南に傾く。

埋土は、やや南に傾斜をもって北方向から堆積していることから、自然堆積と考えられる。

断面形は、箱形に近い逆台形状を呈し、深さは、東端の土層断面観察から48cmを測る。

出土遺物は、陶器碗・皿、磁器小碗・碗、須恵器坏・壺のほか、図示できなかったが土師器坏等も検



第23図 下本郷遺跡第1・2号土坑出土遺物

第10表 下本郷遺跡第1・2号土坑出土遺物観察表 (第23図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK1 1	角釘	最大長 3.5 + 4.6	最大幅 (1.10)	最大厚 (0.75)	重量 19.4 (12.5 + 6.9)g				断面形は長方形。頭部は、端部を折り曲げて平らに鍛き出す。基部の中関節・先端穴損。
SK2 1	須恵系土師質土師器坏	(12.60)	残存高 3.20	—	AHEI	B	橙色	口径部 20%	10C 前平。

出された。

時期は、出土遺物を見ると、9世紀後半及び近世（江戸時代）と時期差が認められるが、遺構確認面及び主体をなすと考えられる出土遺物の陶器及び磁器が示す近世（江戸時代）と考えるのが適当である。

第2号溝跡（第24・25図、第12表）

上面の調査区、ほぼ中央部の位置にあり、ほぼ東西方向に走る。A・B・C-1グリッド内にある。第1・2号土坑、第3号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号土坑を切り、第1号土坑及び第3号溝跡に切られている。

規模については、東部及び西部が調査区域外となるが、検出された箇所ではほぼ全体の状況が分かることから、検出長8.84m、幅は0.66～0.94mを測る。走行軸の方位は、ほぼ東西であるが、西端が北方向に屈曲する。東西走行箇所は概ねN-88°-Eを示し、西端の屈曲箇所はN-40°-Wを示す。

埋土は、ほぼ水平に堆積する箇所と、北方向へ傾斜をもって南方向から堆積している箇所が見受けられるが、総じて自然堆積と考えられる。

断面形は、逆台形状を呈し、深さは、東端の土層断面観察から56cmを測る。なお、底面の深さについて、土層断面観察した箇所において同一レベルと比較すると、東から西に48cm、34cm、50cmとなり、凹凸が認められ、流れの方向を定めるのは困難であった。また、第1号土坑に切られている箇所は51cmを測り、ここまでの底面の深さが、この付近から西は一段浅くなり西端に至る状況である。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器環（埴）・甕、土師質土器皿、銭貨「寛永通寶」等が検出され、図示できたものは大半が9世紀後半の土師器・須恵器であった。

時期は、出土遺物を見ると、9世紀後半及び近世（江戸時代）と時期差が認められるが、遺構確認面、重複する第1号土坑及び第3号溝跡との関係を合わせて考えると、銭貨「寛永通寶」が示す時期、すなわち近世（江戸時代）と考えるのが適当である。

第3号溝跡（第24・25図、第13表）

上面の調査区、ほぼ中央部やや南寄りの位置にあり、ほぼ東西方向に走る。A・B-1及びC-1・2グリッド内にある。第1号土坑、第2号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第1号土坑及び第2号溝跡を切っている。

規模については、東部が調査区域外となるが、検出された箇所ではほぼ全体の状況が分かることから、検出長約8.50m、幅は0.31～0.58mを測る。走行軸の方位は、ほぼ東西であるが、東端が南方向に緩やかに屈曲した後大きく屈曲する。東西走行箇所は概ねN-91°-Eを示し、東端の屈曲箇所はN-141°-Wを示す。なお、大きく屈曲した後の東端は、調査区東壁では検出されず、現況では第4号溝跡に切れ消滅しているものと考えざるを得ない。

埋土は、ほぼレンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

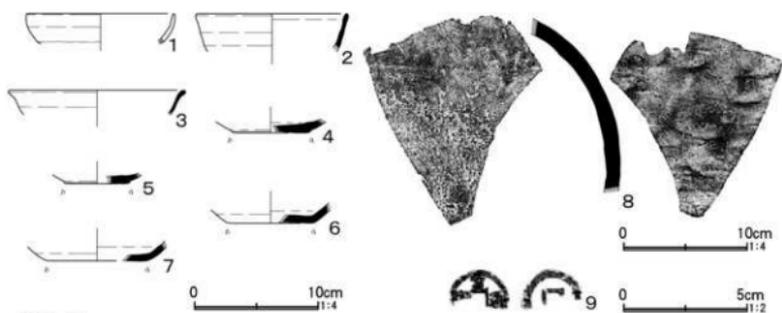
断面形は、逆台形状を呈し、深さは、土層断面観察した箇所において、東から33cm、33cm、30cmを測る。なお、底面の深さについて、同じく土層断面観察した箇所において同一レベルと比較すると、東から西に39cm、51cm、41cmとなり、第2号溝跡と同様に凹凸が認められ、流れの方向を定めるのは困難であった。

出土遺物は、土師器甕、須恵器環、瓦質土器培塔、陶器灯火具・皿、磁器小碗、平瓦・丸瓦、鉄製品

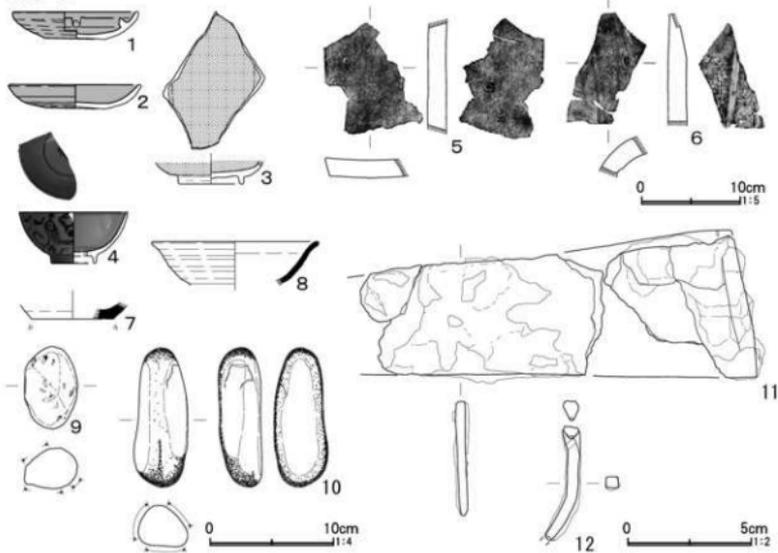
SD 1



SD 2



SD 3



第 25 图 下本郷遺跡第 1~3 号溝跡出土遺物

第11表 下本郷遺跡第1号溝跡出土遺物観察表 (第25図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	陶器 碗	(13.20)	残存高 6.10	—				20%	翅茶碗。口縁部外面～内面に織部釉。 体部外面に薄い鉄釉。 瀬戸美濃産。18C後半～19C。
2	陶器 皿	—	残存高 3.70	—				40%	木瓜形。内外面に鉄釉。 瀬戸美濃産。18C。
3	細器 小皿	6.90	3.50	2.60				70%	袋付小碗。体部上平外面に鉄文。 肥前産(伊万里産)。18C。
4	細器 碗	—	残存高 4.20	(4.20)				体部下半 ～底部25%	袋付碗(くらわんか碗)。 肥前産(伊万里産)。18C。
5	細器 碗	—	残存高 2.60	(3.40)				体部下半 ～底部50%	袋付筒形碗。見込みに二重同心円文・ 中央に五弁花文。外面に青磁釉。 肥前産(伊万里産)。18C。
6	須恵器 杯	—	残存高 0.70	(7.10)	ABFG	A	灰白色	底部15%	南比企産。 8C後半～9C初頭。
7	須恵器 壺	—	厚さ 0.50～0.65	(7.10)	ABGH	A	外面: 緑灰色 内面: 青灰色	胴部下半破片	外面に自然釉。

第12表 下本郷遺跡第2号溝跡出土遺物観察表 (第25図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	土師器 杯	(11.90)	残存高 2.40	—	ABEX	C	褐色	口縁部10%	8C後半～9C初頭。	
2	須恵器 杯	(12.20)	残存高 3.10	—	ABDGL	A	青灰色	口縁部10%	未野産。 9C後半。	
3	須恵器 杯(地)	(14.00)	残存高 2.00	—	ABF	A	外面: 灰色、灰黄褐色 内面: 青灰色	口縁部10%	南比企産。 9C後半。	
4	須恵器 杯	—	残存高 0.90	(6.40)	ADGL	A	灰色	底部20%	未野産。 9C後半。	
5	須恵器 杯	—	残存高 0.70	(5.30)	ABGL	A	灰色	底部20%	未野産。 9C後半。	
6	須恵器 杯	—	残存高 1.10	(7.00)	ABFIN	A	外面: 灰色、青灰色 内面: 青灰色	底部20%	南比企産。 9C後半。	
7	須恵器 杯	—	残存高 1.10	(8.00)	ABDFH	B	灰白色、灰色	底部15%	南比企産。	
8	須恵器 壺	—	厚さ 1.05～1.20	(8.00)	ABDGLN	A	灰白色	胴部上半(唇部) 破片	外面: 平行明きの灰、ナマ調整か。 自然釉。 内面: あて具敷。 未野産。	
9	銭貨	—	直径2.40	乳0.50×(0.50)	—	—	—	重量1.2g	50%	寛永通宝(古)。 1636～1659年铸造。

第13表 下本郷遺跡第3号溝跡出土遺物観察表 (第25図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	陶器 灯火具・受付皿	9.90	2.30	4.90				100%	内外面に鉄釉。 瀬戸美濃産。18C～19C。	
2	陶器 灯火具・油皿	(10.40)	最大 2.00	(4.70)				50%	内外面に鉄釉。 瀬戸美濃産。18C～19C。	
3	陶器 皿	—	残存高 1.80	5.10				底部100%	木瓜形。 内外面に鉄釉。瀬戸美濃産。18C。	
4	細器 小皿	(8.70)	4.20	(3.40)				25%	袋付小碗。体部外面に横龍文・雲雲文。 肥前産。18C～19C。	
5	平瓦	—	残存長 11.70	残存最大幅 8.00	—	—	—	厚さ 1.80～1.90	断面: 横しが小さく腐化。 欠損後被熱し断面の一部が崩落化。	
6	丸瓦	—	残存長 11.30	残存幅 5.20	—	—	—	厚さ 1.70～1.90	上端部側が残存。	
7	須恵器 杯	—	残存高 1.10	(6.70)	ABDFG	B	外面: 青灰色 内面: 灰黄色	底部15%	未野産。9C後半。 流石込み。	
8	須恵器 杯	(13.20)	残存高 3.60	—	ADFGHE	B	灰白色	10%	南比企産。9C後半。 流石込み。	
9	磨石	—	最大長 6.70	最大幅 4.30	—	—	—	最大厚 3.30	重量 41.6g	5面使用。 角閃石安山岩製。
10	磨石	—	最大長 11.30	最大幅 4.30	—	—	—	最大厚 3.40	重量 249g	4面使用。 砂岩製。
11	流石鎌	—	残存長 (15.90)	残存幅 4.30～6.00	—	—	—	最大厚 0.40	重量 60g	切先部・基部下端の一部欠損。
12	角釘	—	残存長 4.90	最大幅 0.70	—	—	—	最大厚 0.70	重量 3.0g	断面形は正方形(最大0.45×0.45 cm)。頭部は端部を折り曲げて平ら に敲き出し、形状は逆三角形。基部 の中程～先端は「く」の字状に屈曲。 基部先端欠損。

直刃鎌・角釘、磨石等が検出され、図示できたものは大半が近世（江戸時代）の陶器・磁器・瓦であった。

時期は、出土遺物を見ると、8・9世紀及び近世（江戸時代）と時期差が認められるが、遺構確認面、重複する第1号土坑及び第2号溝跡との関係を合わせて考えると、陶器・磁器・瓦が示す時期、すなわち近世（江戸時代）と考えるのが適当である。また、第1号土坑及び第2号溝跡より新しい時期と考えられる。

第4号溝跡（第24・26・27図、第14表）

上面の調査区、南部の調査区壁面に沿う位置にあり、ほぼ東西方向に走る。B・C-2グリッド内にある。重複関係にある遺構はなく、単独で所在する。ただし、下面の第1号竪穴建物跡及び第1号竪穴遺構の埋土上半を切っていることから、上下関係において重複している。また、第3号溝跡において記述のとおり、本遺構が第3号溝跡を切っている可能性が考えられる。

規模については、東部及び西部が調査区域外となり、北側の立ち上がり部のみ分かる状況であることから、検出長6.60m、残存幅0.41～0.70mを測る。走行軸の方位は、ほぼ東西であり、概ねN-88°-Wを示す。

埋土は、レンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

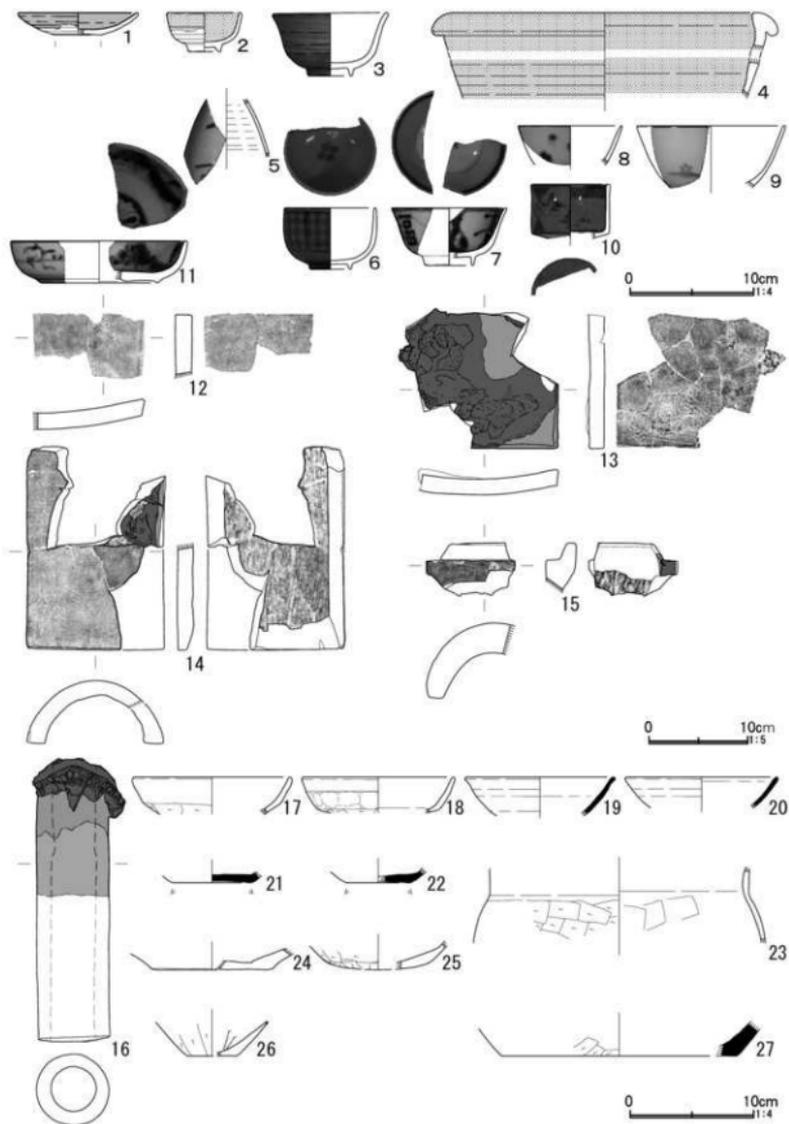
断面形は、逆台形状を呈すると推定され、深さは、東端の土層断面観察から88cmを測る。なお、底面の深さについて、土層断面観察した箇所において同一レベルで比較すると、東から西に68cm、88cmとなり、底面が東から西へと傾斜していることが認められ、この方向に流れがあったものと推定される。

出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・壺、陶器灯火具・小杯・碗・水甕・德利、磁器染付碗・筒形碗・皿、平瓦・丸瓦、羽口、砥石、磨石等が検出され、図示できたものは、8・9世紀の土師器・須恵器及び近世（江戸時代）の陶器・磁器・瓦に二分された。なお、特徴的なのは、遺存状態の良い羽口が、調査区東壁に突き刺さった状態で検出されたことである。また、瓦は、溝跡検出範囲の中央部やや西寄りによりまわって検出された。

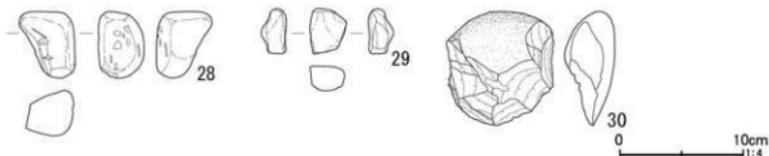
時期は、出土遺物を見ると、前述のとおり8・9世紀及び近世（江戸時代）と時期差が認められるが、遺構確認面と合わせて考えると、主体的に出土した陶器・磁器・瓦が示す時期、すなわち近世（江戸時代）と考えるのが適当である。

第14表 下本郷遺跡第4号溝跡出土遺物観察表（第26・27図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	構成	色調	残存率	備考
1	陶器 灯火具・油皿	(9.60)	1.80	(3.80)				20%	外面の体部上半・内面に鉄錆。 志戸呂産。17C後半～18C。
2	陶器 小杯	(5.80)	3.20	(2.50)				45%	外面体部上半～内面に鉄錆。見込みに2分厚トナシ産。 瀬戸赤濃産。19C後半。
3	陶器 碗	(9.10)	最大 5.15	3.30				60%	端反碗。体部外面に白土を刷毛塗り。 内外面に透明釉。肥前産。18C後半。
4	陶器 水甕	(24.00)	残存高 3.1 + 3.2以上	—				口縁部10% ・体部破片	内外面に鉄錆。 瀬戸赤濃産。19C後半。
5	陶器 德利	—	残存高 4.70	—				胴部上半破片	外面に鉄錆。 鉄軸で文様施文。 瀬戸赤濃産。
6	磁器 碗	7.20	5.00	3.20				70%	染付文碗。体部外面に格子文。見込みに并斬文。 肥前産（伊万里産）。18C後半。
7	磁器 碗	(9.20)	4.70	3.80				60%	染付碗。体部外面に文字「福」「壽」 梅花文。 瀬戸赤濃産。19C前半。
8	磁器 碗	(8.30)	残存高 3.20	—				体部上半55%	染付端反碗。 瀬戸赤濃産。19C前半。

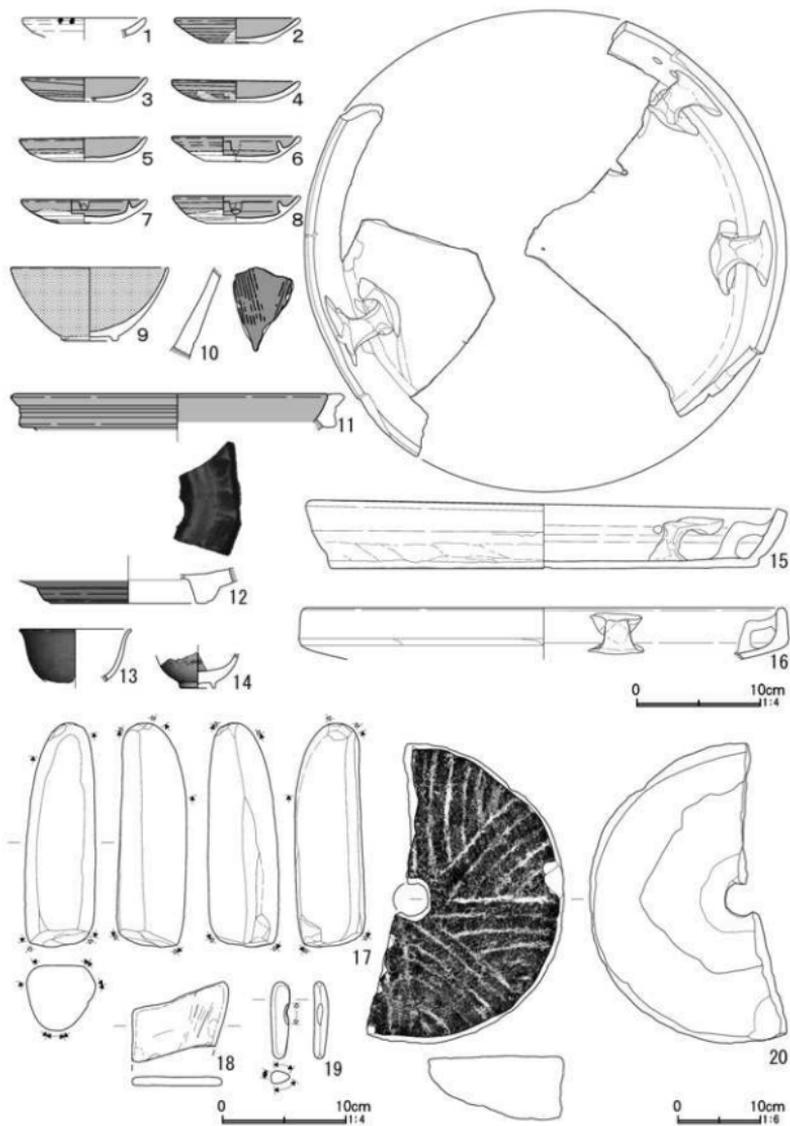


第 26 图 下本郷遺跡第 4 号溝跡出土遺物(1)



第27図 下本郷遺跡第4号溝跡出土遺物②

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
9	磁器碗	(11.80)	残存高 5.10	—				10%	胎付丸碗。 体部外面に海面風景文。 肥前系(伊万里産)。18C前半。
10	磁器碗	(6.10)	残存高 4.40	—				30%	胎付筒形碗。体部外面に草花文。口縁部内面に四方押文。 肥前系(伊万里産)。18C。
11	磁器皿	(14.10)	3.40	(9.30)				25%	胎付皿。体部外面に唐草文。体部内面に菊文。見込みに銀杏葉文。高台内蛇目軸刺ぎ。 肥前系(伊万里産)。18C後半。
12	平瓦			最大長 6.60	最大幅 11.30	最大厚 1.70			一部被熱して発泡化。
13	平瓦			最大長 13.80	最大幅 14.20	厚さ 1.60 (発泡化箇所 2.30)			欠損被熱し表面が全体的に発泡化。
14	丸瓦			最大長 20.70	最大幅 14.00	厚さ 1.40 ~ 2.60			一部欠損被熱し発泡化。 広端部(軒先側)破片。 №15と同一個体。
15	丸瓦			最大長 5.30	最大幅 9.00	厚さ 0.40 ~ 3.10			一部被熱して発泡化。 玉縁部破片。 №14と同一個体。
16	羽口			最大長 23.10	最大径 5.90	重量 589 g			一方端が被熱し発泡ガラス化、その直下が赤色化。もう一方端は灰色化。一部欠損。
17	土師器 坏	(12.60)	残存高 3.00	—	ABIJK	A	外面：橙色。にぶい 黄褐色 内面：橙色	20%	8C前半。 流れ込み。
18	土師器 坏	(12.20)	残存高 2.90	—	BDIK	B	にぶい・橙色	口縁部 30%	9C後半。 SX1 から流れ込み。
19	須恵器 坏	(11.80)	残存高 3.10	—	ABDFG	A	灰色	口縁部 10%	南比企産。9C後半。 SX1 から流れ込み。
20	須恵器 坏	(12.20)	残存高 2.50	—	BDFGK	A	外面：灰色 内面：灰色	10%	外面に自然結。 南比企産。9C後半。 SX1 から流れ込み。
21	須恵器 坏	—	残存高 0.60	(6.20)	ABFGN	B	外面：灰白色、灰黄 褐色 内面：灰黄褐色	底部 50%	南比企産。 9C後半。 SX1 から流れ込み。
22	須恵器 坏	—	残存高 0.90	(5.20)	ABGLM	A	青灰色	底部 10%	南比企産。9C後半。 SX1 から流れ込み。
23	土師器 甕	頸部径 (21.00)	残存高 6.10	—	ABEJK	B	外面：橙色、灰黄褐 色 内面：橙色、にぶい 褐色	10%	9C後半。 SX1 から流れ込み。
24	土師器 甕	—	残存高 1.30	(9.90)	ABDJKM	B	外面：灰黄褐色 内面：にぶい・橙色、 灰黄褐色	底部 30%	S11 または SX1 から流れ込み。
25	土師器 甕	—	残存高 2.00	(8.10)	ABEGLJ	B	橙色	底部 20%	S11 または SX1 から流れ込み。
26	土師器 甕	—	残存高 2.70	(4.00)	ABEJ	B	外面：灰黄褐色 内面：にぶい・橙色、 灰黄褐色	底部 20%	9C後半か。 SX1 から流れ込み。
27	須恵器 甕	—	残存高 2.20	(19.00)	ABEGLN	A	外面：褐色、灰色 内面：灰色	底部 10%以下	内面に自然結。 S11 または SX1 から流れ込み。
28	磨石			最大長 5.50	最大幅 4.20	最大厚 3.70	重量 73 g		4面使用。若干の刃傷致。 硬質岩製。
29	砥石			最大長 3.70	最大幅 2.90	最大厚 2.90	重量 21 g		4面使用。 砂岩製。
30	磁器			最大長 9.30	最大幅 8.70	最大厚 4.00	重量 366 g		一方端・両端を打ち欠いて刃部をつくる。砂岩製。

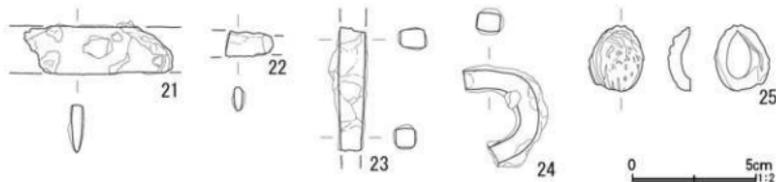


第 28 圖 下本郷遺跡遺構外出土遺物(1)

(5) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物のうち、図示可能な遺物のみ掲載する（第28・29図、第15表）。

古墳時代後期（飛鳥時代）から奈良時代まで及び近世（江戸時代）の、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦のほか刀子、角釘と考えられる鉄製品、石臼、砥石、磨石兼蔽石、桃の種子が出土した。



第29図 下本郷遺跡遺構外出土遺物②

第15表 下本郷遺跡遺構外出土遺物観察表（第28・29図）

図版番号	器種	口径	残存高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師質土器 皿	(9.80)	残存高 1.55	—	ABEJK	B	にぶい・橙色	口縁部15%	口唇部に滲煤が付着（灯芯の痕跡）し、灯明用用途、近世。
2	陶器 灯火具・油皿	9.80	最大 2.10	4.40				90%	鉄軸（外面：底部を除きほぼ全面、内面：全面）。見込みに重ね焼成の際の融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
3	陶器 灯火具・油皿	10.00	最大 2.05	4.40				75%	鉄軸（外面：底部を除くほぼ全面、内面：全面）。見込みに重ね焼成の際の融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
4	陶器 灯火具・油皿	10.20	最大 1.80	4.20				50%	鉄軸（外面：底部を除いて全面、内面：全面）。見込みに重ね焼成の際の融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
5	陶器 灯火具・油皿	(10.20)	最大 2.00	4.40				60%	鉄軸（外面：上半、内面：全面）。見込みに重ね焼成の際の融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
6	陶器 灯火具・受付皿	10.20	最大 2.10	5.00				70%	鉄軸（外面：上半全面、内面：全面）。外面に重ね焼成の際の下部端部脇輪融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
7	陶器 灯火具・受付皿	(9.90)	1.90	4.30				50%	鉄軸（外面：概ね上半、内面：全面）。外面に重ね焼成の際の下部端部脇輪の融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
8	陶器 灯火具・受付皿	10.00	2.25	4.70				90%	鉄軸（外面：体部上半まで、内面：全面）。外面に重ね焼成の際の下部端部脇輪の融着痕。 瀬戸系遺産。18C～19C。
9	陶器 碗	(12.60)	6.00	3.80				30%	内外面に（高台を除く）灰釉。体部外面に鉄軸で意文。肥前系。17C後半。内外面に筋輪（内面の輪は剥離が著しい）。 瀬戸系遺産。16C末～17C。
10	陶器 擂鉢	—	—	—				体部破片	
11	陶器 擂鉢	(24.20)	残存高 3.00	—				口縁部10%	内外面に鉄軸系釉。 産地不明。近代。
12	陶器 大皿	—	残存高 1.90	(12.60)				底部10%	外面に鉄瓦（高台の覆付き部を除く）、内面に白土で刷毛目文様施文後、灰釉。 肥前系（唐津産）。18C。 増反碗。内外面に透明釉。信楽産。18C～19C。
13	陶器 碗	(8.90)	残存高 4.30	—				20%	灰付碗。体部外面に意文。肥前系（伊万里産）。18C。
14	磁器 小碗	—	残存高 2.80	—				体部下半 ～底部60%	

国版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
15	瓦質土器 焙烙	Ø37.30	最大 5.50	(34.50)				55%	内耳3か所。補修孔が体部に1対、 底部に2か所有り。 底部内面の大部分が煤ける。 18C。
16	瓦質土器 焙烙	Ø39.20	(4.10)	(39.60)				口縁部 ・体部 30%	底部内外面が特に煤ける。 18C以降。
17	磨石兼磁石	最大長 18.20	最大幅 5.60	最大厚 5.50	重量 970 g				磨面は5面。上下端部に敲打痕。下 端はステンブ石状に平出。砂岩製。
18	砥石	最大長 5.30	最大幅 7.60	最大厚 0.70	重量 48.2 g				2面使用。一方面には多数の刀傷痕、 もう一面にはわずかに刀傷痕。砂岩 製。
19	磨石兼磁石	最大長 6.25	最大幅 1.55	最大厚 1.10	重量 15.1 g				3面の磨面。側面の1か所に敲打痕。 砂岩製。
20	石臼 (下臼)	最大長 36.90	最大幅 23.50	最大径 (37.00)	最大厚 7.90	重量 9,200 g		50%	心径径 (4.3) cm。目は6分画か。 安山岩製。
21	刀子	残存長 6.10	最大幅 1.90	最大厚 0.95(本体最大厚 0.40)	重量 15 g				切先・基部欠損。
22	刀子?	最大長 1.90	最大幅 1.05	最大厚 0.50(本体最大厚 0.30)	重量 1.6 g				刀子の基部か。
23	角釘	最大長 5.00	本体最大幅 (1.00)	本体最大厚 (0.80)	重量 11 g				上端・下端(切先)とも欠損。
24	障伏鉄製品	残存長 5.50	本体最大幅 (0.90)	本体最大厚 (0.80)	重量 16.1 g				角釘が屈曲したもののか。 両端とも欠損。
25	種子 楕	最大長 2.70	最大幅 2.20	最大厚 0.90(厚さ 0.50)	重量 2.0 g				半欠損。

4 調査のまとめ

下本郷遺跡は、本章第2節第1項で記述したとおり、本報告地点が初めての調査事例となった。また、本遺跡周辺の地形は、すぐ西まで荒川の左岸に形成された新期荒川扇状地が迫っているが、大半は妻沼低地が広がり、荒川の旧流路により形成された帯状の自然堤防が点々と所在し、その微高地上には古くから人々が居を構え、現在も集落を形成している。

このように、本遺跡が位置する今井地区の地形は自然堤防が主体をなす低地帯であり、また新期荒川扇状地扇端とその先の妻沼低地末端地が錯綜する地に当り、複雑に入り組んだ湧水地、旧河道、自然堤防によって形成されている。このため、この低地帯では、荒川と利根川の氾濫等によって砂・シルト・粘土層が幾重にも厚く堆積し、その結果遺跡を地中深く眠らせることとなり、本遺跡もそうであったようにその発見を遅らせる要因ともなっている。

本遺跡の調査地点の様子は、前述のとおり、遺構確認面が2面、つまり大きく2面に亘る文化面が形成されていたことが分かった。それは、古い方がいわゆる古代（奈良・平安時代）であり、概ね700年前後～900年前後の約200年間の時期であり、一方新しい方は近世・江戸時代であり、概ね1650年前後～1800年前後の約150年間の時期である。また、この2つの文化面に隔たりが生じたのは、荒川及び利根川の氾濫等による洪水層が中間に堆積したことによると推定できるが、この洪水と想定される出来事が古代と近世を隔てる原因ともなり、少なくとも古代と近世の間にある時期の中世における人々の暮らしを妨げたのであろう。

ではここで、周辺の同時期及び前後の時期の遺跡の様相と比較することにより、本遺跡を取り巻く状況を考えてみたいと思う。本遺跡の西、新期荒川扇状地の微高地には、古墳時代後期の古墳及び集落が形成されている。それは、中条古墳群小曾根支群に属する小曾根神社古墳であり、東浦遺跡の集落跡である。

小曾根神社古墳は、小曾根支群において唯一実態が分かった古墳で、時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられ、石室からは、耳環、玉類、飾金具、銀製の噴出鏝、鞘口金具が装着された大刀及び銀象嵌が施された鉄製の八窓鏝が検出されている。残念ながら、古墳及び石室の詳細は不明であるが、現在も低墳丘が遺存し、古墳の上には小曾根神社社殿が鎮座し、地域の信仰を集めている。一方、東浦遺跡は、本遺跡と同様に調査を端緒に発見された遺跡であり、古墳時代後期の7世紀代を中心に古くは古墳時代中期の終わり頃の5世紀末～6世紀初頭まで遡る可能性がある堅穴建物跡7棟が検出された集落跡である。また、この集落は、次の奈良・平安時代においては活動の痕跡が確認されず、再び活動の痕跡があるのは中世の段階になってからであることが、調査成果から言える事実である。この時期が一旦途絶える現象は、時期が異なるが本報告の遺跡と同様の現象である。ちなみに、中世の時期では、梁行2間、桁行3間の東西棟掘立柱建物跡1棟、これに主軸方位をほぼ同じくする溝跡1条等が検出されている。また、近世では、中世の溝跡の東に並行して造られる溝跡1条、土坑3基が検出されている。

次に、本遺跡の東及び南東部、緩やかに東に向かって標高が低くなる、同じく妻沼低地の自然堤防に立地する遺跡を見てみる。まず、中条遺跡であるが、この遺跡は本遺跡が立地する自然堤防から東へ約1km離れたところを中心に広がる東西約700m、南北約350m規模の集落跡で、古墳時代中期頃から集落が営まれた遺跡である。その後、集落は、奈良・平安時代へと続き、平安時代末から中世・鎌倉時代

には、この地を本拠地にして中条氏が活躍し、館を構えた場所である。

もう一つ、本遺跡近隣の遺跡を挙げると、本遺跡から南東へ約1.3km離れたところを中心に広がる、規模の大きい自然堤防及びその北の低地において複雑な河道により形成された自然堤防に大きく広がって所在する北島遺跡がある。この自然堤防は、新期荒川扇状地の北東縁の先にある妻沼低地に形成されたもので、北島遺跡の発掘調査では大きく蛇行する旧河川及びこれに接続する支流が確認されている。そして、この河川を挟んで集落が展開している。その集落は、弥生時代中期～平安時代を主体とし中世以降まで続くものであり、特筆すべきは、弥生時代前期末～後期の生産域を伴う集落跡や7世紀後半から11世紀まで続いた地域有力者層の居宅と考えられる大規模集落跡があったことが判明していることである。遺構については、主体となる時期の竪穴建物跡約930棟、掘立柱建物跡230棟のほか、中世以降まで含めると井戸跡約170基、土坑約1,550基、溝跡約1,300条、掘立柱列9列、道路跡6条、水田跡（条里跡）及び灌漑施設等膨大な数の遺構が検出され、遺物についても土器、石器、木器、金属製品等多種多様及び多量の遺物が検出されている。

このように、本遺跡周辺の集落跡を少し範囲を広げて見てみると、次のような歴史的環境の中、本遺跡の集落は営まれていたことが分かる。つまり、地形的な原因により未だ発見がないという現状ではあるが、本遺跡の主たる時期である9世紀代には、本遺跡に近接する場所には集落の存在が確認されておらず、東ないしは南東にやや離れた場所に比較的規模の大きい集落、ないしはかなり大規模な集落が営まれ、中世段階まで続いている状況である。

遺跡周辺の現況を踏まえると、今後も発掘調査に至るケースは少ないとも考えられるが、開発に伴う工事立会調査等の情報も含めてその蓄積に努め、一定の蓄積を待って再考を試みたいと思う。

主な引用・参考文献

熊谷市東浦遺跡調査会 2006 『東浦遺跡』

熊谷市教育委員会 2021 『北島遺跡Ⅱ・石原古墳群第4号墳・諏訪木遺跡Ⅵ・瀬戸山古墳群第29号墳―市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ―』

熊谷市 2015 『熊谷市史 資料編1 考古』

大竹遺跡Ⅱ・Ⅲ



IV 大竹遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

大竹遺跡の調査は、建築主2者それぞれとの調整を経て、保護層を設けられない工法で個人専用住宅が建築されることにより埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。なお、2者のうち建築主を細井康之氏とする調査区を第2次調査、大澤勇太氏とする調査区を第3次調査と呼称し、調査を実施した。経過については、次のとおりである。

まず、第2次調査は、平成30年2月13日付けで、埼玉県教育委員会あてに、建築主より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市西別府字瀬ノ下1686番6地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号No.59-003 大竹遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成30年3月19日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下38cmで埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、地盤改良を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を平成30年4月19日付け熊教社埋発第20号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成30年4月19日付け教文資第4-124号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99号第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成30年4月23日付け熊教社埋発第24号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

次に、第3次調査は、平成30年4月10日付けで、埼玉県教育委員会あてに、建築主より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市西別府字瀬ノ下1686番4・8地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号No.59-003 大竹遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成30年5月29日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下40cmで埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、建築物基礎工事により保護層を設けられない工法であったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を平成30年5月29日付け熊教社埋発第93号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成30年5月29日付け教文資第4-342号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99号第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成30年5月29日付け熊教社埋発第104号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、第2次調査を平成30年4月23日から5月25日にかけて実施し、調査面積は67.07㎡であった。また、第3次調査を同年5月29日から7月13日にかけて実施し、調査面積は99.37㎡であった。

まず、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、土坑、ピット、性格不明遺構で、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、写真撮影については適宜行った。また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については適宜行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、第2次・第3次調査ともに令和3年4月から令和4年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと併行して遺構の図面整理を行った。なお、遺構の整理に当たって、第16・17表のとおり遺構の見直しを図り、遺構番号の振替を行った。

次に、遺物のトレースを行い、図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理、遺物写真撮影を行い、写真図版の割付けをした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成30年度

教育長	野原 晃
教育次長	小林 教子
社会教育課長	鶴田 敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健
社会教育課業務主幹（文化財保護係）	宮前 章生
文化財保護係係長	松田 哲
主査	星 祥子
主査	小島 洋一
主査	藏持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
主任	新井 端
主事	武部 喜充（任期付職員）
主事	島村 範久（任期付職員）
主事	大野美知子（任期付職員）

イ 整理・報告書作成事業

組織については、第Ⅱ章及び第Ⅲ章と同一であるため記述を省略することとし、第Ⅱ章及び第Ⅲ章を参照されたい。



第 30 圖 大竹遺跡地点位置圖

2 遺跡の概要

(1) 大竹遺跡について

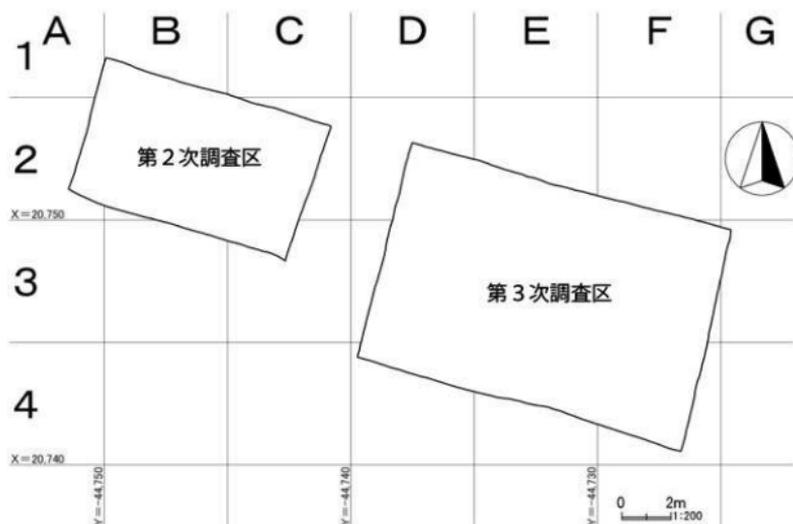
大竹遺跡は、熊谷市西部の西別府地内に所在する遺跡である。櫛挽台地北東端部に位置し、幡羅官衙遺跡群の南に近接している。遺跡の範囲は、東西に細長く広がっており、標高は34～35mを測り、規模148,000㎡である。なお、幡羅官衙遺跡群については、幡羅郡家跡である深谷市幡羅官衙遺跡、祭祀遺跡の熊谷市西別府祭祀遺跡、古代寺院の同市西別府廃寺、郡家跡の一部と見なされる同市西別府遺跡の4つで構成されており、平成30年2月13日付けで「幡羅官衙遺跡群」として国史跡に指定されている。大竹遺跡は、この幡羅官衙遺跡群には含まれないが、幡羅郡家を支える集落の一つとしてとらえられ、古墳時代から奈良・平安時代までの複合遺跡である。

過去における本遺跡の調査については、まず平成9年10月28日に遺跡範囲の東端に位置する別府中学校校庭内で試掘調査を実施した。その結果、古墳時代の住居跡や土坑が検出され、土師器や須恵器等が多数出土した。

次に、平成24年11月15日から12月19日にかけて、幡羅官衙遺跡群確認調査の一環として、遺跡範囲の北西隅で2か所、計約276㎡の確認調査を実施した。その結果、7世紀後半から10世紀前半までの集落跡が確認された。

(2) 調査の方法

調査の方法は、第2次・第3次調査区ともに世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第IX系）



第31図 大竹遺跡第2次調査・第3次調査区位置図

による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように1辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体を把握できるように、北西隅をA-1として東へA・B・C、南へ1・2・3とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3・・・と呼称した。Bライン以東もAラインと同様に呼称した。

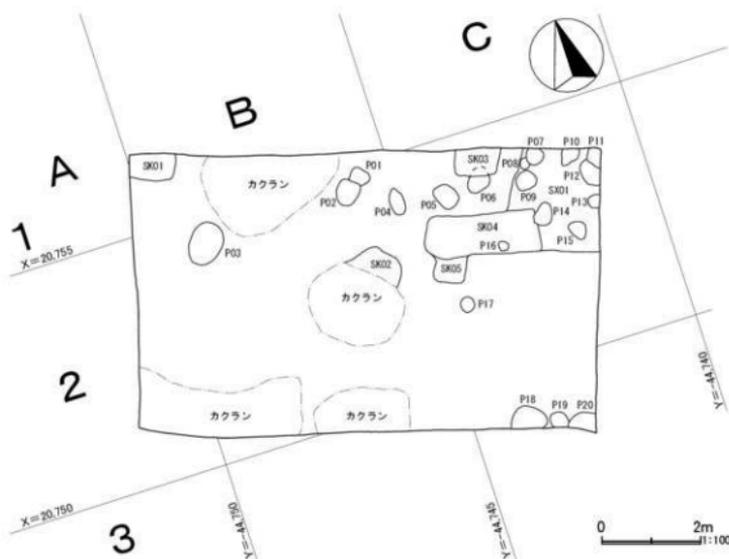
実測作業にあたっては、交点を基準に水系で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方の方法で行った。第2次・第3次調査、各々の調査区の基本層序は、第33・34図のとおりであった。

(3) 検出された遺構と遺物

今回の調査地点は、遺跡範囲の中央部北端に位置し、西別府廃寺の寺院遺構が検出された特別養護老人ホームの南側に位置する。第2次調査及び第3次調査の調査区は隣接しており、第2次調査区の約3.5m東に第3次調査区が位置する(第31図)。

第2次調査区において検出された遺構は、土坑5基、ピット20基、性格不明遺構1基であった。遺物については、土師器、須恵器が中心であり、出土遺物の総量はコンテナにして1箱であった。

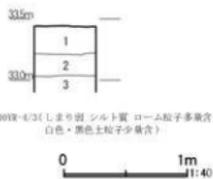
第3次調査区において検出された遺構は、土坑6基、ピット4基であった。遺物については、土師器、須恵器を中心に土師質土器・皿や青磁碗等が出土した。出土遺物の総量はコンテナにして2箱であった。



第32図 大竹遺跡第2次調査区全測図

第 16 表 大竹遺跡第 2 次調査区遺構番号新旧対照表 (左: 新番号、右: 旧番号)

土坑 (SK)					
1	SK03	3	P15	14	P17
2	SK04	4	P13-2	15	P08
3	SK02	5	P01	16	P22
4	SK01	6	P10	17	P20
5	P02	7	P04	18	P13-1
ピット (P)		8	P21	19	P12
1	P14	9	P19	20	P11
2	P16	10	P05	性格不明遺構 (SX)	
		11	P06	1	SK01
		12	P23		
		13	P07		

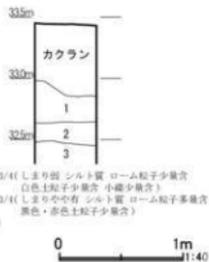


- 1 表土
2 濃い黄褐色土 10YR-6/3 (しまり畑 シルト質 ローム粒子多量含
白色・黒色土粒子少量含)
3 ソフトローム層

第 33 図 大竹遺跡第 2 次調査区基本層序図

第 17 表 大竹遺跡第 3 次調査区遺構番号新旧対照表 (左: 新番号、右: 旧番号)

土坑 (SK)		ピット (P)	
1	SK01	1	P01
2	SK02	2	P03
3	SK03	3	SK10
4	SK04	4	SK09
5	SK12		
6	SK11		



- 1 暗褐色土 10YR-3/4 (しまり畑 シルト質 ローム粒子少量含
白色土粒子少量含 小礫少量含)
2 暗褐色土 10YR-3/4 (しまり畑や有 シルト質 ローム粒子多量含
黒色・赤色土粒子少量含)
3 ソフトローム層

第 34 図 大竹遺跡第 3 次調査区基本層序図

3 遺構と遺物

(1) 第2次調査

ア 土坑

第1号土坑 (第35・36図、第18表)

調査区の北西端に位置する。A・B-1グリッドにある。北及び西が調査区外になる。平面形は長方形で、検出長軸0.96m、検出短軸0.55mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.45mを測る。断面形は箱形であり、床面は平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、須恵器甕が検出されたが、流れ込みの可能性がある。

時期は、不明である。

第2号土坑 (第35図)

調査区の中央部に位置する。B-2グリッドにある。南側は擾乱を受けている。平面形は不整形で、検出長軸1.12m、検出短軸0.55mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.32mを測る。床面は、平坦である。

埋土は、単層の堆積である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第3号土坑 (第35・36図、第18表)

調査区の北東部に位置する。C-2グリッドにある。南側は第6号ピットと重複関係にあり、第6号ピットを切っている。平面形は方形で、検出長軸0.9m、検出短軸0.6mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.43mを測る。断面形は箱形であり、床面は西側に一段やや高い平坦面がある。

埋土は、レンズ状の堆積であり、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、土師質土器坏や鉄製品が検出された。SK3-1はロクロ左回転の土師質土器坏であり、SK3-2はロクロ右回転の土師質土器坏であり、古賀公方系のもと考えられる。SK3-3は鉄製品の鏡である。

時期は、出土遺物から判断して15世紀後半～16世紀前半と考えられる。

第4号土坑 (第35図)

調査区の北東部に位置する。C-2グリッドにある。第5号土坑、第1号性格不明遺構、第14・16号ピットと重複関係にあり、第5号土坑及び第1号性格不明遺構を切っていて、第14・16号ピットに切られている。平面形はいびつな長方形で、検出長軸2.35m、検出短軸0.9mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.12mと浅い。断面形は皿状で、床面は平坦である。

埋土は、単層の堆積である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第5号土坑 (第35図)

調査区の北東部に位置する。C-2グリッドにある。第4号土坑と重複関係にあり、第4号土坑に切

第18表 大竹遺跡第2次調査第1・3号土坑、第1号性格不明遺構出土遺物観察表（第36図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK1-1	須恵器 壺	—	—	—	AIN	B	にぶい艶 7.5YR-5/3	胴部破片	
SK3-1	土師質土器 坏	—	(1.8)	(4.2)	BE	B	橙 7.5YR-7/6	口縁部～ 底部 50%	外面：取目状庄痕 内面：見込み指子穴痕 底部付近が厚い ロクロ左回転
SK3-2	土師質土器 坏	—	(1.6)	(4.6)	CE	B	外面：にぶい黄 2.5Y-6/3 内面：にぶい橙 7.5YR-7/4	底部 10%	ロクロ右回転 15C 後半～16C 前半 吉河公方系
SK3-3	新製品 鉢	最大長 (2.2)		最大幅 0.6	最大厚 0.3	重量 2.1g		—	
SX1-1	須恵器 鉢	—	—	—	ABDF	B	灰 5Y-5/1	胴部破片	南北企業

られている。平面形は方形で、検出長軸 0.65 m、検出短軸 0.55 m を測る。深さは、遺構確認面から最深で 0.15 m と浅い。断面形は皿状で、床面はほぼ平坦である。

埋土は、単層の堆積である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

イ 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第35・36図、第18表）

調査区の北東端に位置し、C-2グリッド内にある。第4号土坑及び第7～15号ピットと重複関係にあり、第4号土坑及び第7～15号ピットに切られている。北及び東が調査区外になり、平面形は長方形で、検出長軸 2.06 m、検出短軸 1.86 m を測る。深さは遺構確認面から最深で 0.08 m と浅い。断面形は皿状で、床面は平坦である。なお、第7～15号ピットは円形状に並ぶことから、本遺構に付属する遺構かと考えたが、堆積状況等を踏まえ別の遺構とした。

埋土は、単層の堆積である。

出土遺物は、須恵器鉢（SX1-1）が検出された。ただし、この遺物は流れ込みと考えられる。

時期は、不明である。

ウ ピット

ピットは、計 20 基が検出された。その大半が調査区の北東部に検出された。第7号ピット～第15号ピットの位置が、第1号性格不明遺構内で、円形状に並ぶことから、第1号性格不明遺構に付属するようが見えたが、各々堆積状況を踏まえうえて、別の遺構として捉えることとする。出土遺物については、いずれのピットにおいても検出できなかった。したがって、時期は不明である。

以下、一覧表にて記述する（第37図、第19表）。

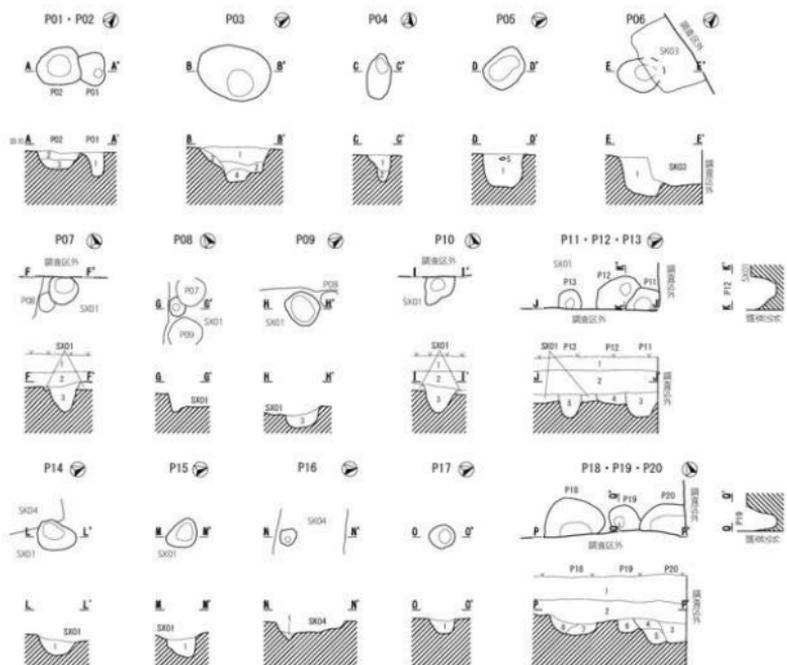
エ 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した遺物を掲載する（第38図、第20表）。

土師器、須恵器、土師質土器、陶器、瓦質土器、砥石が出土した。

1・2は、土師器坏である。1は、内面に放射状の暗文が見られる。3は、土師器甕の底部である。4は、

須恵器坏である。5は、古賀公方系の土師質土器坏である。6は、瀬戸美濃系の鉄軸皿である。7は、片口の口縁を持つ挿鉢である。8は、須恵器甕である。9は、砥石である。



P01・P02

- 1 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含)
- 2 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子少量含)
- 3 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 黒色土粒子少量含)

P03

- 1 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 黒色土粒子多量含)

P04

- 1 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含)
- 2 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含)

P05

- 1 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子・ブロック少量含)

P06

- 1 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含)

P07

- 1 表土
- 2 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 白色土粒子少量含 黒色土粒子少量含)
- 3 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含)

P09

- 1 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含)

P10

- 1 表土
- 2 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 白色土粒子少量含 黒色土粒子少量含)
- 3 暗褐色土 10YR-2/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含)

P11・P12・P13

- 1 表土
- 2 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 白色土粒子少量含 黒色土粒子少量含)
- 3 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含)
- 4 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子少量含 ロームブロック多量含)
- 5 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含)

P14

- 1 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 黒色土粒子多量含)

P15

- 1 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 黒色土粒子少量含 赤色土粒子少量含)

P16

- 1 黄褐色土 10YR-2/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含)

P17

- 1 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ロームブロック少量含)

P18・P19・P20

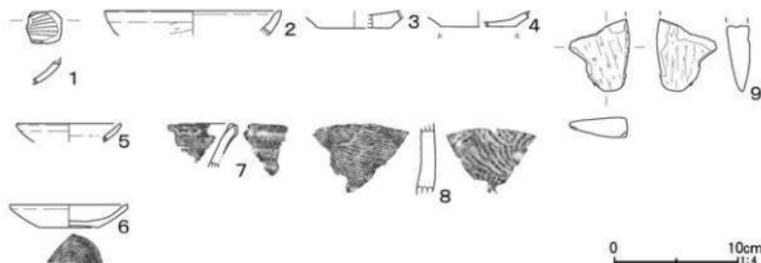
- 1 表土
- 2 濃い黄褐色土 10YR-6/3(しまり割 シルト質 ローム粒子少量含 白色土粒子少量含 黒色土粒子少量含)
- 3 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含 黒色土粒子少量含)
- 4 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 黒色土粒子少量含)
- 5 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 黒色土粒子少量含)
- 6 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子多量含 ロームブロック少量含 黒色土粒子少量含)
- 7 暗褐色土 10YR-3/4(しまり割 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 白色土粒子少量含 黒色土粒子少量含)
- 8 暗褐色土 10YR-3/3(しまり割 シルト質 ローム粒子少量含 黒色土粒子少量含)



第 37 圖 大竹遺跡第 2 次調査第 1～20 号ピット

第19表 大竹遺跡第2次調査ピット一覧表 (第37図)

番号	位置 (グリッド)	プラン	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	重複関係	備考
P01	B-2	円形	41	(30)	30	なし	不明	P02	
P02	B-2	楕円形	52	45	20	なし	不明	P01	
P03	B-2	楕円形	89	65	21	なし	不明		
P04	B・C-2	楕円形	55	29	33	なし	不明		
P05	C-2	楕円形	53	41	40	なし	不明		
P06	C-2	楕円形	57	41	47	なし	不明	SK03	
P07	C-2	円形	(34)	36	32	なし	不明	P08 SK01	
P08	C-2	楕円形	24	19	23	なし	不明	P07 SK01	
P09	C-2	円形	42	38	42	なし	不明	SK01	
P10	C-2	楕円形	(39)	35	32	なし	不明	SK01	
P11	C-2	楕円形	(39)	(28)	30	なし	不明	P12 SK01	
P12	C-2	楕円形	59	(30)	40	なし	不明	P11 SK01	
P13	C-2	楕円形	(24)	28	29	なし	不明	SK01	
P14	C-2	楕円形	48	36	41	なし	不明	SK04 SK01	
P15	C-2	楕円形	41	31	44	なし	不明	SK01	
P16	C-2	円形	22	20	22	なし	不明	SK04	
P17	C-2	円形	32	29	16	なし	不明		
P18	C-3	楕円形	74	(47)	14	なし	不明		
P19	C-3	楕円形	(41)	34	37	なし	不明	P20	
P20	C-3	楕円形	(56)	(36)	29	なし	不明	P19	



第38図 大竹遺跡第2次調査遺構外出土遺物

第20表 大竹遺跡第2次調査遺構外出土遺物観察表 (第38図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	土師器 杯	—	—	—	AB1JN	B	明赤褐色 5YR-5/8	胴部破片	内面：放射状暗文 北武蔵型	
2	土師器 杯	(14.9)	(2.1)	—	ACI	B	明赤褐色 5YR-5/6	口縁部破片	外面：へう削り	
3	土師器 甕	—	1.3	(6.0)	AEN	B	橙 7.5YR-7/6	底部40%		
4	須恵器 杯	—	(1.3)	(6.2)	ABDM	B	灰黄 2.5Y-7/2	底部20%	底部回転糸切り	
5	土師質土器 杯	(8.2)	(1.5)	—	ABDJ	B	黄 2.5Y-7/3	口縁部破片	外面：放射状庄痕 内面：指ノ字痕 古河公方系	
6	陶器 皿	(9.5)	1.9	(4.8)	AD	B	暗赤灰 10R-3/1	口縁部～ 底部25%	藤里 鉄箱 瀬戸系遺品	
7	瓦質土器 鉢鉢	—	—	—	ACEI	B	にぶい・黄橙 10YR-6/3	口縁部破片	15C 後半～16C	
8	須恵器 甕	—	—	—	ADH	B	褐灰 10YR-6/1	胴部破片	外面：平行タタキ 内面：同心円状のあて具による調整	
9	石製品 砥石	最大長 5.8 最大幅 4.8 最大厚 1.6 重量 23.5g					—	—	—	軽石

(2) 第3次調査

ア 土坑

第1号土坑 (第40図)

調査区の北西部に位置する。D-2グリッドにある。北が調査区外になる。南側は第2号土坑と重複関係にあり、第2号土坑を切っている。平面形は長方形で、検出長軸0.96m、検出短軸0.55mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.45mを測る。床面は、平坦である。

埋土は、単層の堆積である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

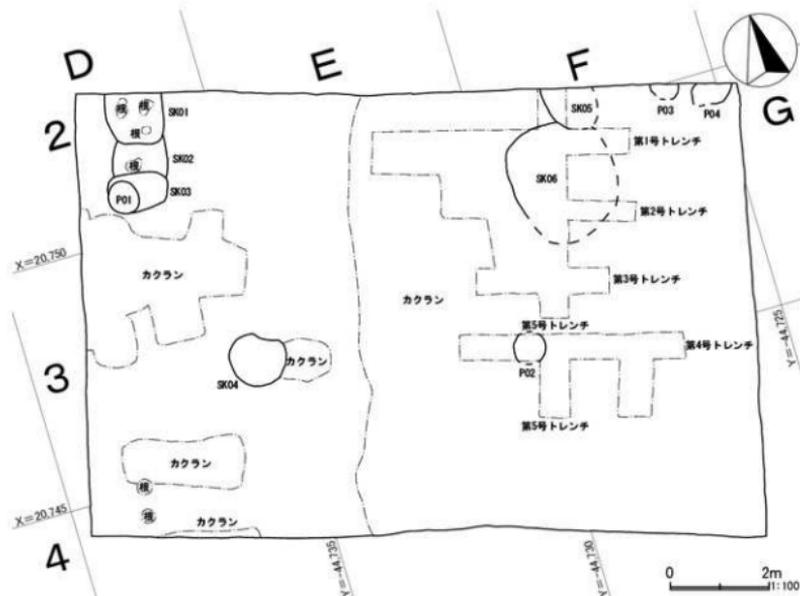
第2号土坑 (第40・41図、第21表)

調査区の北西部に位置する。D-2グリッドにある。第1・3号土坑と重複関係にあり、第1・3号土坑双方に切られている。平面形は不整形で、検出長軸1.12m、検出短軸0.55mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.32mを測る。床面は、平坦である。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、瓦質土器香炉が検出されたが、流れ込みの可能性もある。なお、2-1は外面に回転印刻がある。

時期は、不明である。



第39図 大竹遺跡第3次調査区全測図

第3号土坑 (第40図)

調査区の北西部に位置する。D-2グリッドにある。第2号土坑、第1号ピットと重複関係にあり、本遺構が第2号土坑を切り、第1号ピットに切られている。平面形は方形で、検出長軸0.9m、検出短軸0.6mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.43mを測る。床面は、西側がやや高いがそのほかは平坦である。

埋土は、水平堆積である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第4号土坑 (第40図)

調査区の西部に位置する。D・E-3グリッドにある。東側が擾乱を受けている。平面形はいびつな長方形で、検出長軸2.35m、検出短軸0.9mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.12mを測る。床面は、平坦である。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

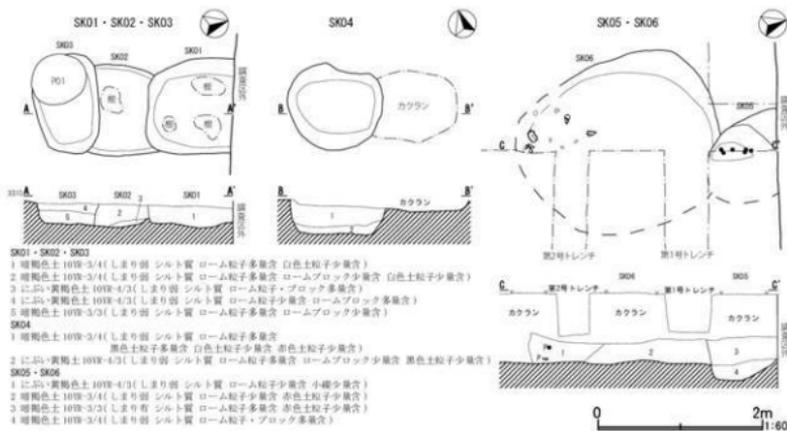
出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

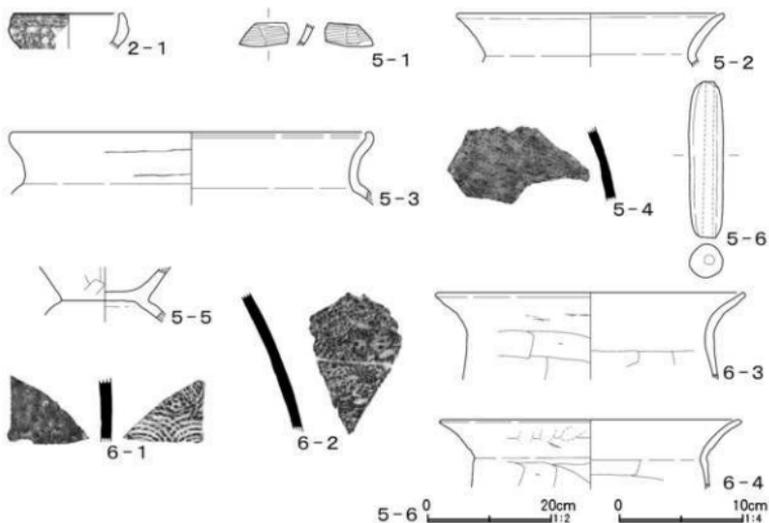
第5号土坑 (第40・41図、第21表)

調査区の北東部に位置する。F-2・3グリッドにある。上面が擾乱により削平を受けており、第5号トレンチで検出された。北は調査区外で、第6号土坑と重複関係にあり、第6号土坑を切っている。平面形は方形で、検出長軸0.65m、検出短軸0.55mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.15mを測る。床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。



第40図 大竹遺跡第3次調査第1～6号土坑



第41図 大竹遺跡第3次調査第2・5・6号土坑出土遺物

第21表 大竹遺跡第3次調査第2・5・6号土坑出土遺物観察表 (第41図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2-1	瓦質土器 香炉	(9.0)	(2.9)	—	ABC	B	外面：オリーブ黒 5Y-3/1 内面：オリーブ黄 5Y-6/3	口縁部 20%	外面：回転印短 非常に丁寧な作り 中世
5-1	土師器 杯	—	—	—	AC	B	赤褐色 5YR-4/8	体部破片	外面：横方向ヘラミガキ 内面：横方向ヘラミガキ
5-2	土師器 甕	(21.4)	(4.4)	—	AEO	B	橙 7.5YR-6/6	口縁部 13%	「く」の字状口縁
5-3	土師器 甕	(29.0)	(6.0)	—	AGIN	B	橙 5YR-6/8	口縁部 15%	「コ」の字状口縁
5-4	須恵器 甕	—	—	—	ABDGRN	B	黄褐色 2.5Y-5/3	胴部破片	外面：ハケ目状工具によるタタキ調整 6-2と第47図5-21と同一個体
5-5	土師器 台付甕	—	(4.4)	—	ABF	B	橙 5YR-6/6	20%	
5-6	土製品 土埴	最大長6.4	最大幅1.3	最大厚1.3	重量12.8g		にがい褐 7.4YR-6/3	—	
6-1	須恵器 甕	—	—	—	DIH	B	外面：灰黄褐 10YR-5/2 内面：褐灰 10YR-6/1	胴部破片	内面：同心円状のあて具による調整 自然釉
6-2	須恵器 甕	—	—	—	ABDMN	B	外面：暗灰黄 2.5Y-5/2 内面：褐灰 7.5YR-6/1	胴部破片	外面：ハケ目状工具によるタタキ調整 5-4と第47図5-21と同一個体
6-3	土師器 甕	(24.6)	(7.1)	—	ABJ	B	橙 5YR-6/6	口縁部 12%	外面：横方向ヘラタヌリ 内面：横方向ヘラナゲ 「く」の字状口縁
6-4	土師器 甕	(24.0)	(5.7)	—	ABEIK	B	橙 7.5YR-7/6	口縁部 10%	外面：横方向ヘラタヌリ 内面：横方向ヘラナゲ 「く」の字状口縁

出土遺物は、土師器坏・甕・台付甕、須恵器甕、土錘が検出された。なお、5-1は土師器坏で、内外面に横方向のヘラ磨きが見られる。5-2・3は、土師器甕で、5-2は「く」の字口縁、5-3は「コ」の字口縁である。5-5は、土師器台付甕の接合部である。

時期は、出土遺物から奈良時代（8世紀前半か）と考えられる。

第6号土坑（第40・41図、第21表）

調査区の北東部に位置する。F-2グリッドにある。上面が攪乱により削平を受けており、第5号トレンチで検出された。第5号土坑と重複関係にあり、第5号土坑に切られている。平面形は方形で、検出長軸0.65m、検出短軸0.55mを測る。深さは、遺構確認面から最深で0.15mを測る。床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、水平堆積である。

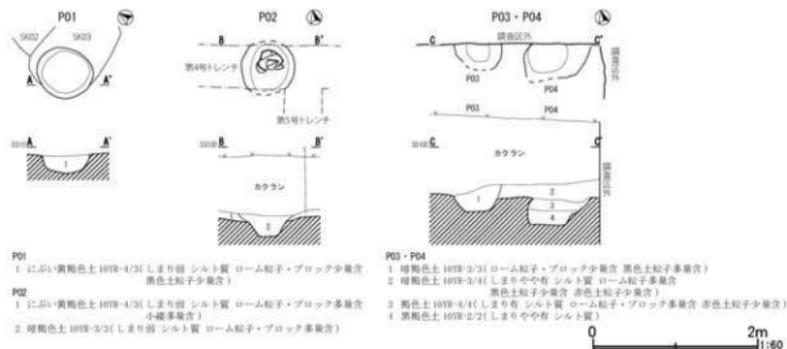
出土遺物は、須恵器甕、土師器甕が検出された。なお、6-3・4は土師器甕で、口縁が「く」の字である。

時期は、出土遺物のうち土師器甕から判断すると、飛鳥時代（7世紀前半）と考えられる。

イ ピット

ピットは、計4基検出された。出土遺物は、土師器や須恵器が検出された

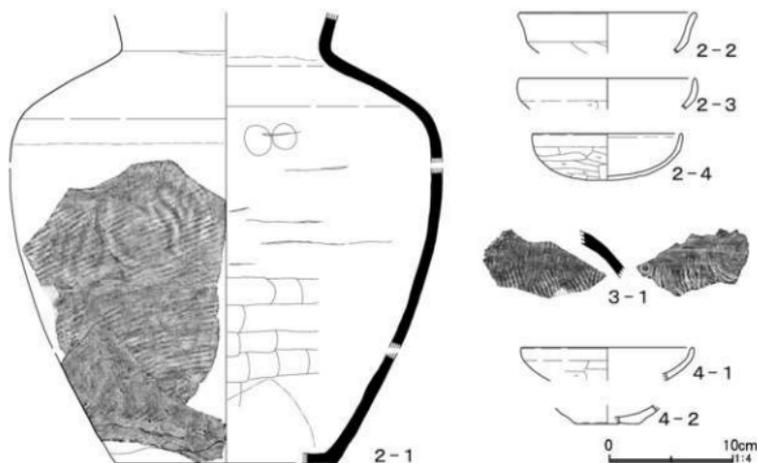
以下、一覧表にて記述する（第42・43図、第22・23表）。



第42図 大竹遺跡第3次調査第1～4号ピット

第22表 大竹遺跡第3次調査ピット一覧表（第42図）

番号	位置 (グリッド)	プラン	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	重複関係	備考
P01	D-2	円形	69	61	21	なし	不明	SK03	
P02	E・F-3	円形	69	68	25	土師器坏 須恵器甕	8C 前半		
P03	F-2・3	楕円形	58	(32)	39	須恵器甕	不明		
P04	F・G-3	楕円形	(55)	65	31	土師器坏	不明		



第43図 大竹遺跡第3次調査第2～4号ピット出土遺物

第23表 大竹遺跡第3次調査ピット出土遺物観察表 (第43図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2-1	須恵器壺	—	(36.7)	(18.0)	ABDFKM	B	外面：灰N-6/ 内面：灰7.5Y-6/1	20%	外面：肩部～胴部下半部にかけてタタキによる調整有 内面：胴部下半部にヘラ状工具による調整有
2-2	土師器 杯	(14.1)	(3.3)	—	ABCJ	B	橙7.5YR-6/6	口縁部10%	外面：ヘラケズリ 8C前半
2-3	土師器 杯	14.5	(2.5)	—	AB	B	橙7.5YR-6/6	口縁部12%	8C前半
2-4	土師器 杯	(12.0)	3.8	—	ABDGIK	B	橙5YR-6/6	70%	外面：横方向ナデ、底面ヘラケズリ 内面：横方向ナデ 外面に横方向の強いナデの結果、一部沈線に見える 8c前半
3-1	須恵器 壺	—	—	—	ABMN	B	灰黄褐 10YR-6/2	胴部破片	外面：タタキ状の調整有 内面：平円状のあて具による調整
4-1	土師器 杯	(13.9)	(2.7)	—	ABIJN	B	橙5YR-6/6	口縁部10%	8C前半
4-2	乳息系土師質土器 杯	—	(1.5)	(5.0)	ABCJ	B	明赤褐 5YR-6/6	底部20%	10C前半

ウ トレンチ

大竹遺跡第3次調査区は、西側半分が礫やローム土、黒色土が混合した堆積土であり、遺物が多数見つかっていた。そこで、その内容を確認するため、調査区の東西軸に並行して任意に4箇所、南北軸に1箇所トレンチを設定し、掘削した(第44図)。その結果、上面全てが攪乱であり、現地表面下約1.5mから第5・6号土坑や第2～4号ピットの遺構が検出される状況であった。これについては、近隣住民に聞いたところ、昭和20～30年代まで、現在のJR籠原駅付近から別府沼付近まで一面桑畑だったとの話があり、これ以後の桑の伐根によって攪乱されたのではないかと考えられる。

5箇所のトレンチからは、奈良時代～平安時代、中世を中心に多くの遺物が出土している。そこで、この場所に集落跡が存在した可能性を考慮して、トレンチごとにその状態を記述することにした。

第1号トレンチ (第44・45図、第24表)

調査区の東西軸に長さ約5m、幅0.5mに設定し掘削した結果、土師器坏、須恵器皿・壺・甕・長頸壺、土師質土器羽釜が出土した。遺構は検出できなかった。

1-1～3は土師器坏で、1-1・2は内面に放射状の暗文が見られる。1-3は、口縁が内湾する土師器坏で北武蔵型と考えられる。

第2号トレンチ (第44・45図、第24表)

調査区の東西軸に長さ約3.8m、幅0.5mに設定し掘削した結果、土師器坏、灰軸陶器壺、須恵器坏・壺・甕・長頸壺が出土した。遺構は検出できなかった。

2-1は土師器坏で、内面に放射状の暗文が見られる。2-2は灰軸陶器壺であり、2-3は須恵器坏、2-4は須恵器坏である。全体的に赤く焼成している。

第3号トレンチ (第44・45図、第24表)

調査区の東西軸に長さ約2.5m、幅0.5mに設定し掘削した結果、土師器坏、須恵器甕、瓦質土器片口鉢が出土した。遺構は検出できなかった。

3-1は土師器坏であり、内面に放射状の暗文が見える。

第4号トレンチ (第44・46図、第25表)

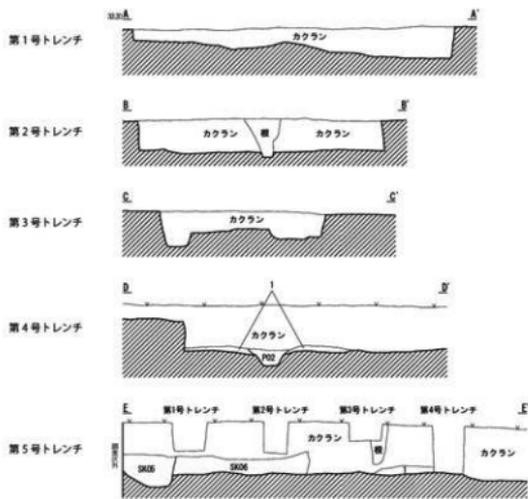
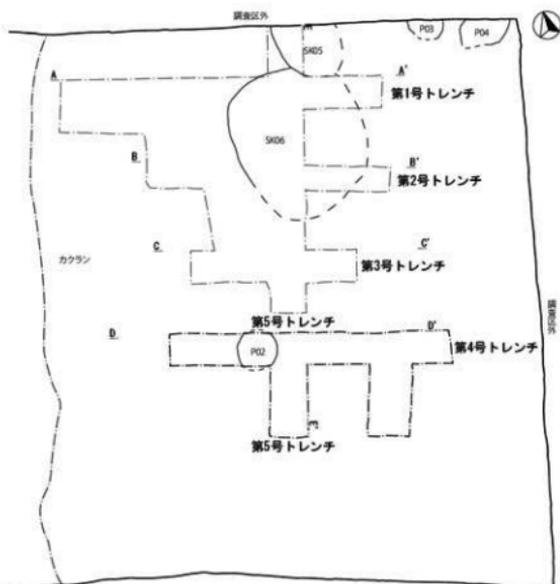
調査区の東西軸に長さ約4.3m、幅0.5mに設定し掘削した結果、土師器坏、須恵器坏・壺・甕、灰軸陶器長頸瓶、土鍾、鉄釘、羽口が出土した。遺構は、第2号ピットが検出された。

4-1～7・9は土師器坏である。4-1・2は、内面に放射状の暗文が見られる。4-3は、模倣坏の内面にわずかに暗文が見える。4-5～7は平底で口縁が内湾した北武蔵型坏である。4-9・11は墨書土器である。4-9は底部外面に「原(ハラ)」と書かれている。

第5号トレンチ (第44・47・48図、第26表)

調査区の南北軸に長さ約5.5m、幅0.5mに設定し掘削した結果、土師器坏・甕・台付甕、須恵器壺・壺・甕、灰軸陶器壺・長頸瓶、土師質土器坏・皿、瓦質土器培塔・片口鉢、陶器、磁器、土鍾、銭貨、砥石、板碑が出土した。遺構は、第5・6号土坑が検出された。

5-1～7は土師器坏である。5-1は体部内面に放射状の暗文がある。5-2・3は模倣坏、5-4～6は口縁が内湾する北武蔵型坏、5-7は厚みのある土師器坏である。5-13～15・17は土師器甕である。5-13・5-14は「く」の字口縁である。5-15は「コ」の字口縁である。5-16は土師器台付甕の接合部であるが、台部は剥落している。5-34は常滑系の甕である。5-35は龍泉窯系青磁碗であり、蓮弁文が片切彫りされている。5-37は北宋銭の大観通宝である。5-39～41は板碑である。キークなどの印刻や、工具痕などは確認できなかったが、法量や製作方法から判断した。

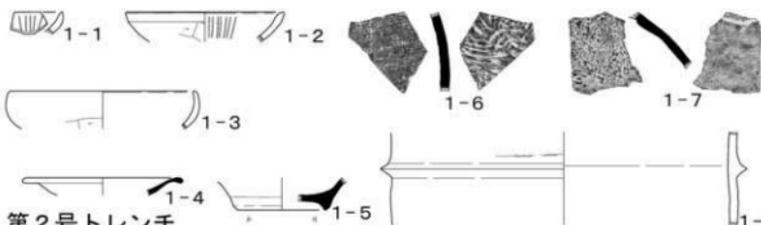


第1～5号トレンチ

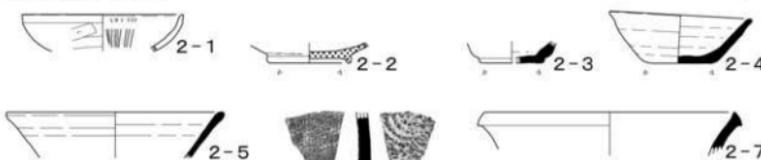
1 に近い黄褐色土 10YR-4/3(しまり部 シルト質 ローム粒子・ブロック多量含 小礫多量含)

第44図 大竹遺跡第3次調査第1～5号トレンチ

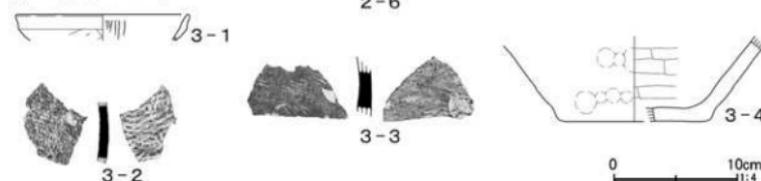
第1号トレンチ



第2号トレンチ



第3号トレンチ



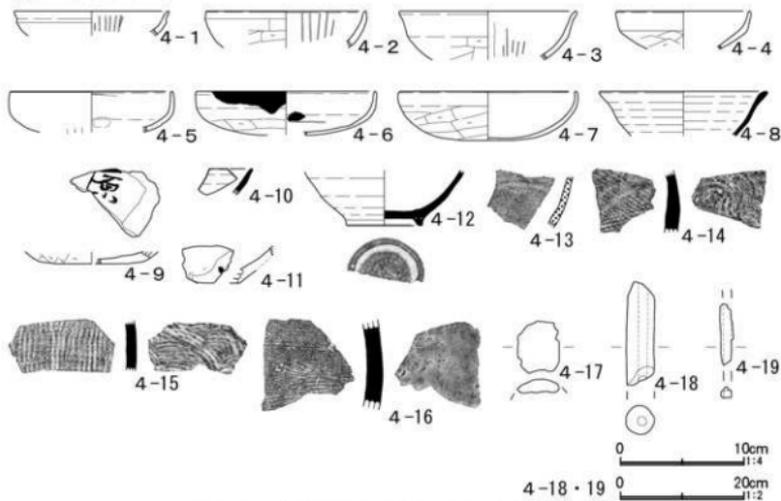
第45図 大竹遺跡第3次調査第1～3号トレンチ出土遺物

第24表 大竹遺跡第3次調査第1～3号トレンチ出土遺物観察表 (第45図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1-1	土師器 杯	—	—	—	AE	B	明赤褐色 2.5Y-6/6	口縁部破片	外面：ヘラケズリ 内面：放射状堆文
1-2	土師器 杯	(12.6)	(2.4)	—	ACK	B	明赤褐色 2.5Y-5/6	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ 内面：放射状堆文
1-3	土師器 杯	(14.8)	(3.1)	—	BD0	B	いぶい煙 7.5YR-6/4	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ
1-4	須恵器 皿	(13.0)	(1.4)	—	ABI	B	堆灰黄 2.5Y-5/2	口縁部 20%	未産産
1-5	須恵器 埴	—	(2.7)	(7.1)	ABCIJ	B	灰黄 2.5Y-6/2	底部 25%	
1-6	須恵器 甕	—	—	—	AB	B	外面：灰黄 2.5Y-6/2 内面：黄灰 2.5Y-6/1	肩～胴部破片	内面：同心円状のあて具による調整 2-6と同一個体
1-7	須恵器 長頸壺	—	—	—	ABD	B	外面：灰 7.5Y-6/1 内面：黄灰 2.5Y-5/1	肩部破片	
1-8	土師質土器 羽釜	—	(7.7)	—	ABCIJ	B	外面：黒褐色 2.5Y-3/1 内面：黄褐色 2.5YR-5/3	胴部破片	ロケロ壺形
2-1	土師器 杯	(13.0)	(3.0)	—	ABN	B	明赤褐色 5YR-5/8	10%	内面：放射状堆文
2-2	灰輪陶器 埴	—	6.8	(1.7)	AB	A	外面：灰白 2.5Y-7/1 内面：灰黄 2.5Y-7/2	底部、台部一部欠	内面：自然輪

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2-3	須恵器 坏	—	(1.8)	(5.2)	ABN	B	明褐 7.5YR-5/6	底部 40%	
2-4	須恵器 坏	11.3	4.0	5.4	ABCI	B	にぶい黄褐 10YR-7/3	ほぼ完形	内面：一部黒色化
2-5	須恵器 埴	(17.4)	(3.7)	—	ABIJ	B	灰白 2.5Y-8/1	口縁部 15%	
2-6	須恵器 甕	—	—	—	AL	A	灰黄 2.5Y-6/2	胴部破片	外面：ハケ目状工具によるタタキ 内面：同心円状のあて具による調整 1-6と同一個体
2-7	須恵器 甕	(20.2)	(3.6)	—	AEFN	B	黄灰 2.5Y-5/1	口縁部 10%	
3-1	土師器 坏	(14.0)	(2.2)	—	AB	B	にぶい橙 5YR-6/4	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ 内面：放射状暗文
3-2	須恵器 甕	—	—	—	AL	B	にぶい黄褐 10YR-5/3	胴部破片	外面：ハケ目状工具によるタタキ 内面：同心円状のあて具による調整 第47図5-26と同一個体
3-3	須恵器 甕	—	—	—	ABDF	B	灰 7.5Y-5/1	胴部破片	内面：横方向ヘラナデ
3-4	瓦質土器 片口鉢	—	(7.0)	(12.0)	ABHI	C	黄灰 2.5Y-5/1	底部 25%	外面：指頭圧痕 内面：横方向のヘラナデ 底面：回転糸切り後ヘラケズリ

第4号トレンチ



第46図 大竹遺跡第3次調査第4号トレンチ出土遺物

第25表 大竹遺跡第3次調査第4号トレンチ出土遺物観察表 (第46図)

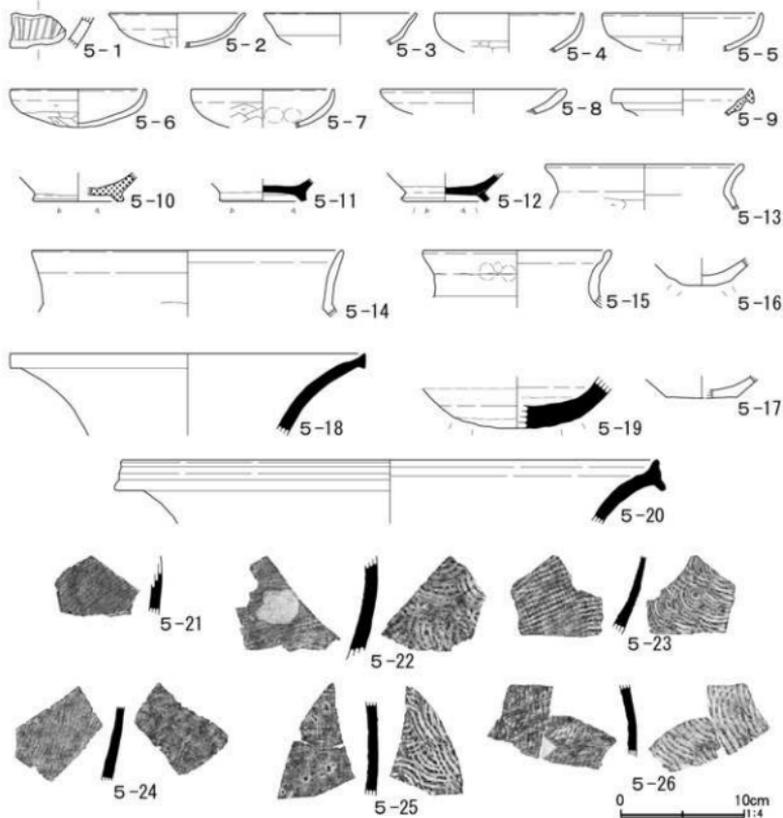
No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
4-1	土師器 坏	(12.4)	(2.0)	—	ABDGHK	B	橙 5YR-6/6	口縁部 5%	外面：ヘラケズリ 内面：放射状暗文
4-2	土師器 坏	(12.9)	(3.0)	—	ABCI	B	赤褐 5YR-4/6	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ 内面：放射状暗文
4-3	土師器 坏	(14.2)	(4.0)	—	ABCIJN	B	橙 5YR-6/8	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ 内面：放射状暗文

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
4-4	土師器 環	(10.8)	(3.1)	—	ABCJ	B	にぶい褐色 7.5Y-5/4	口縁部 20%	外面：底面ヘラケズリ 底面丸底
4-5	土師器 環	(13.0)	(3.3)	—	ABIN	B	明赤褐色 5YR-5/6	口縁部 10%	外面：底面ヘラケズリ 内面：指頭圧痕有
4-6	土師器 環	14.5	(3.5)	—	BIK	A	にぶい赤褐色 5YR-5/3	50%	外面：底面ヘラケズリ、蓋押付着 内面：横方向ナゲ、煤付着 底面丸底
4-7	土師器 環	(14.2)	(4.0)	—	BJK	B	橙 5YR-6/6	40%	外面：横方向ヘラケズリ 底面丸底
4-8	須恵器 環	(13.6)	(3.7)	—	ABI	B	灰 5Y-4/1	口縁部 15%	
4-9	土師器 環	—	(8.6)	(1.0)	BCDEM	B	浅黄褐色 10YR-8/3	底部 20%	外面：ヘラケズリ 底面内面に墨書「原」
4-10	須恵器 環	—	—	—	ADL	A	灰白 2.5Y-8/1	口縁部 10%	
4-11	土師器 環	—	—	—	BD	B	外面：にぶい黄褐色 10YR-6/4 内面：橙 7.5YR-7/6	体部破片	外面に墨書
4-12	須恵器 環	—	(4.5)	(6.2)	ABDIK	B	外面：浅黄 2.5Y-7/3 内面：黄灰 2.5Y-6/1	底部 50%	内面体部に刃物痕らしき痕跡が多数有 底面に刻書のような化礫有
4-13	灰輪陶器 長頸壺	—	—	—	B	B	外面：灰黄 2.5Y-7/2 内面：灰白 10YR-8/1	胴部破片	外面：自然釉 第49図8と同一体
4-14	須恵器 甕	—	—	—	ADDH	B	灰 N-4/	胴部破片	外面：格子目状の調整 内面：同心円状のあて具による調整
4-15	須恵器 甕	—	—	—	ADH	B	灰 7.5Y-5/1	胴部破片	外面：格子目状の調整 内面：同心円状のあて具による調整 第47図5-23と同一体
4-16	須恵器 甕	—	—	—	ABIL	A	灰 N-5/	胴部破片	外面：タタキ目状工具による調整
4-17	土製品 羽口	残存長 (4.0)	残存幅 (3.3)	残存厚 (1.1)	ABDKM	B	橙 7.5YR-6/6	胴部破片	表面の一部のみ残存
4-18	土製品 土埴	最大長 (4.4) 重量 6g	最大幅 1.2	最大厚 1.2			褐色 7.5YR-4/3	—	
4-19	鉄製品 釘	最大長 (2.5)	最大幅 0.6	最大厚 0.5			重量 0.9g	—	

第26表 大竹遺跡第3次調査第5号トレンチ出土遺物観察表 (第47・48図)

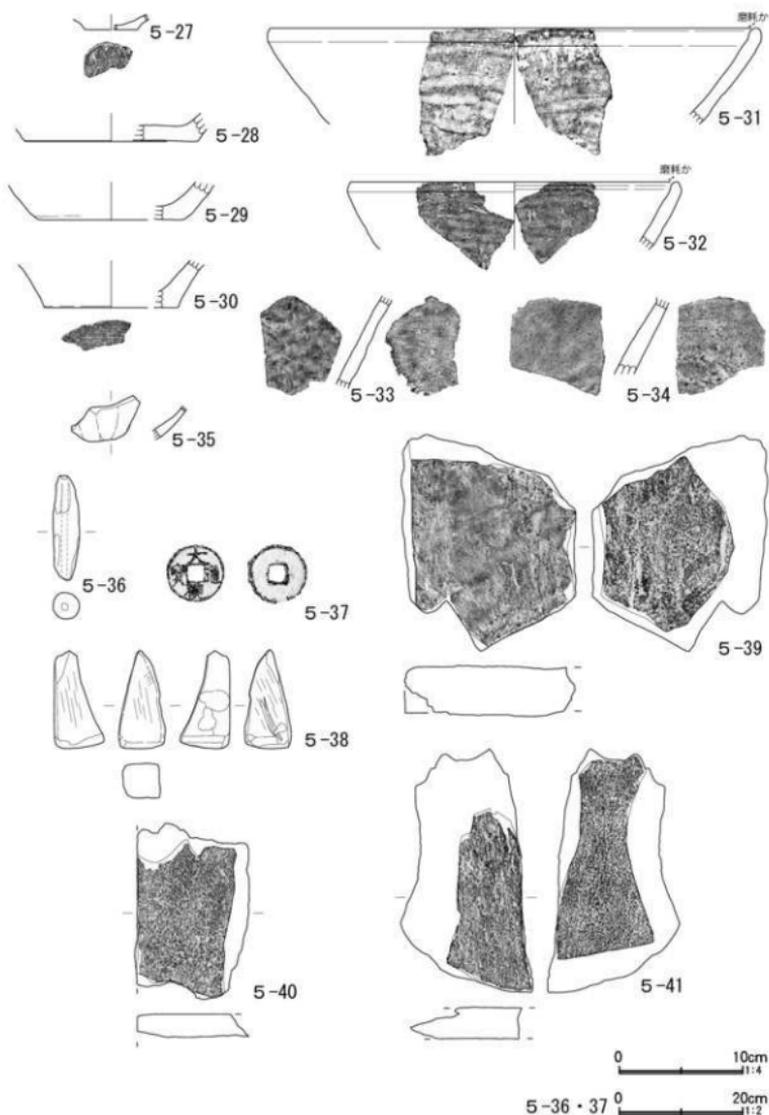
No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
5-1	土師器 環	—	—	—	ABOK	B	外面：にぶい黄褐色 10YR-6/4 内面：橙 7.5YR-6/6	体部破片	外面：ヘラケズリ 内面：放射状暗文
5-2	土師器 環	(11.0)	(2.8)	—	ABCJ	B	にぶい褐色 7.5YR-6/4	口縁部 20%	底面：ヘラケズリ
5-3	土師器 環	(12.3)	(2.6)	—	ABE	B	にぶい黄 2.5Y-6/4	口縁部 10%	
5-4	土師器 環	(11.9)	(3.2)	—	ABI	B	にぶい褐色 7.5YR-5/4	口縁部 20%	
5-5	土師器 環	(12.8)	(3.1)	—	BDIK	B	橙 7.5YR-7/6	口縁部 10%	外面：ヘラケズリ
5-6	土師器 環	(10.8)	3.1	—	ABI	B	外面：にぶい褐色 7.5YR-6/4 内面：橙 5YR-6/6	40%	外面：ヘラケズリ
5-7	土師器 環	(11.4)	(3.1)	—	ABCJ	B	にぶい褐色 7.5YR-5/4	口縁部 25%	外面：ヘラケズリ 内面：指頭圧痕有
5-8	土師質土器 皿	(14.6)	(3.4)	—	ABCJ	B	にぶい黄褐色 10YR-5/4	口縁部 10%	
5-9	灰輪陶器 長頸瓶	(11.1)	(2.2)	—	B	B	外面：にぶい黄 2.5Y-6/3 内面：灰白 2.5Y-7/1	口縁部 10%	内外面：自然釉

第5号トレンチ



第47図 大竹遺跡第3次調査第5号トレンチ出土遺物(1)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
5-10	灰輪陶器 埴	—	(2.4)	(6.9)	ABE1	C	にぶい黄橙 10YR-6/3	底部 40%	
5-11	須恵器 埴	—	(1.9)	(6.2)	AH	B	灰黄 2.5Y-7/2	底部 90%	
5-12	須恵器 埴	—	(2.3)	(6.4)	ABD1L	B	浅黄 2.5Y-7/3	高台部 50%	
5-13	土師器 甕	(15.8)	(3.8)	—	ABD	B	外面：橙 5YR-6/6 内面：にぶい赤黒 5YR-5/4	口縁部 12%	外面：横方向のヘラケズリ 内面：口唇部に凹線状の調整有 「く」の字状口縁
5-14	土師器 甕	(25.0)	(5.4)	—	AE1	B	橙 7.5YR-6/6	口縁部 10%	
5-15	土師器 台付甕	(15.2)	(4.7)	—	ABC1J	B	橙 7.5YR-6/8	口縁部 10%	外面：指頭王肌有 「コ」の字状口縁



第48図 大竹遺跡第3次調査第5号トレンチ出土遺物②

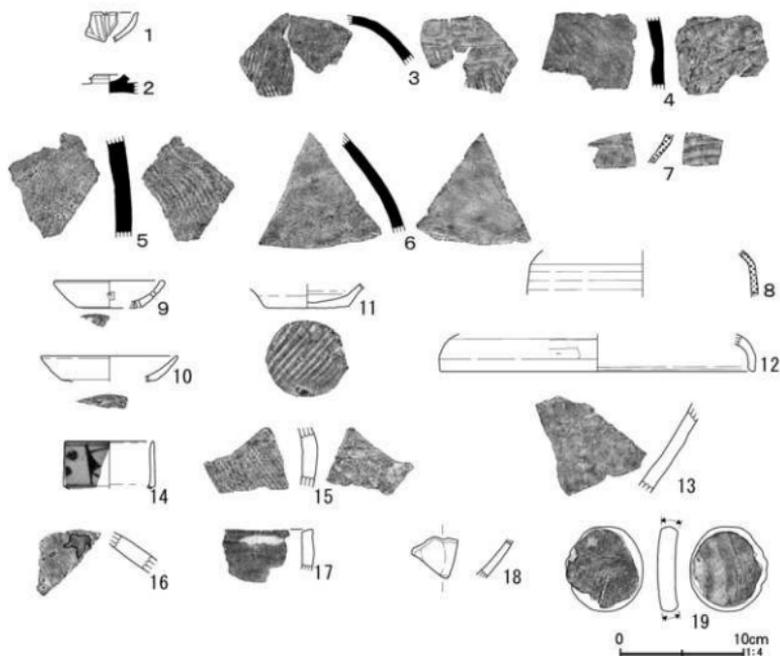
No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
5-16	土師器 台付壺	—	(2.2)	—	D	B	外面：にぶい・橙 2.5YR-6/4 内面：にぶい・黄橙 10YR-6/4	上部接合部 80% 上部欠損	
5-17	土師器 壺	—	(1.8)	(5.8)	AI	B	外面：明赤褐 2.5YR-5/6 内面：明黄褐 10YR-6/6	底部 20%	
5-18	須恵器 壺	28.6	6.7	—	ABN	B	灰 5Y-5/1	口縁部 10%	
5-19	須恵器 壺	—	(4.2)	—	ABN	B	オリーブ黒 7.5Y-3/1	底部 10%	
5-20	須恵器 壺	(43.2)	(5.2)	—	ABDF	B	灰 7.5Y-5/1	口縁部 10%	南比企産
5-21	須恵器 壺	—	—	—	AB	C	外面：灰 5Y-4/1 内面：灰 5Y-6/1	胴部破片	外面：タタキ状工具による調整 第 41 図 5-4 と第 41 図 6-2 と同一個体
5-22	須恵器 壺	—	—	—	ABH	B	外面：にぶい・黄橙 10YR-6/3 内面：にぶい・橙 7.5YR-7/4	胴部破片	外面：ハケム状工具によるタタキ 内面：同心円状工具によるあて具
5-23	須恵器 壺	—	—	—	AI	A	褐灰 7.5YR-5/1	胴部破片	外面：梯子目状工具によるタタキ 内面：同心円状工具によるあて具 第 46 図 4-15 と同一個体
5-24	須恵器 壺	—	—	—	ABFN	B	灰 5Y-5/1	胴部破片	外面：タタキ状工具による調整 南比企産
5-25	須恵器 壺	—	—	—	ABL	A	外面：鉄黄 2.5Y-8/3 内面：黄灰 2.5Y-6/1	胴部破片	外面：梯子目状工具によるタタキ 内面：同心円状工具によるあて具
5-26	須恵器 壺	—	—	—	AB	B	外面：にぶい・褐 7.5YR-5/3 内面：にぶい・橙 7.5YR-6/4	胴部破片	外面：梯子目状工具後ハケム状工具による調整 内面：同心円状工具によるあて具 第 45 図 3-2 と同一個体
5-27	土師質土器 杯	—	(1.3)	(4.4)	ABD	B	外面：鉄黄 2.5Y-7/4 内面：黒褐 2.5Y-3/1	底部 50%	
5-28	瓦質土器 焙烙	—	(2.3)	(14.0)	AIN	B	黒褐 10YR-3/1	底部 5%	内外面：炭化物（煤）付着
5-29	瓦質土器 片口鉢	—	(3.1)	(11.9)	ABHI	C	灰黄褐 10YR-5/2	底部 20%	内面：磨耗か 中世
5-30	瓦質土器 片口鉢	—	(3.9)	(10.8)	ABI	B	灰 5Y-5/	底部 20%	5-33 と同一個体
5-31	瓦質土器 片口鉢	(39.2)	(7.8)	—	ABH	B	外面：にぶい・黄橙 10YR-7/2 内面：黄灰 2.5Y-6/1	口縁部 10%	外面：横方向ヘラケズリ 内面：横方向ヘラナデ 口縁部磨れている 15C 中世
5-32	瓦質土器 片口鉢	(26.4)	(5.4)	—	ABIN	B	灰 5Y-6/1	口縁部 10%	口縁部磨耗か 15C 中世
5-33	瓦質土器 片口鉢	—	—	—	ABIL	A	灰 5Y-6/1	胴部破片	5-30 と同一個体
5-34	陶器 壺	—	—	—	ABNV	B	外面：にぶい・橙 5YR-6/3 内面：赤灰 2.5YR-5/1	胴部破片	底部付着 内面：横方向ナデ 常滑系 中世
5-35	磁器 青磁碗	—	—	—	—	B	—	体部破片	龍泉系系蓮弁文
5-36	土製品 土埴	最大長 4.3 最大幅 1.1 最大厚 1.1 重量 4.0g					にぶい・黄橙 10YR-7/3	ほぼ完形	
5-37	銭貨	直径 2.20 孔 0.60 × 0.60 重量 1.8 g						100%	北宋 大観通宝 真書 初铸 1107 年
5-38	石製品 砥石	最大長 8.0 最大幅 3.7 最大厚 4.0 重量 116.0g						破片	黏灰岩製 砥面 3 面使用
5-39	板碑	最大長 17.7 最大幅 14.1 最大厚 4.1 重量 1700g						破片	緑泥石片岩製 抜熱
5-40	板碑	最大長 14.4 最大幅 9.2 最大厚 1.9 重量 427g						破片	緑泥石片岩製
5-41	板碑	最大長 19.8 最大幅 10.7 最大厚 2.5 重量 690g						破片	緑泥石片岩製

エ 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した遺物を掲載する（第49図、第27表）。

土師器、須恵器、灰軸陶器、土師質土器、陶器、瓦質土器、陶器、磁器、土器片鏟が出土した。

1は、内面に放射状暗文の土師器坏である。9は土師質土器坏で、体部と底部に2箇所径2mm穿孔している。15は、常滑系の陶器甕である。18は、龍泉窯系の青磁碗である。蓮弁文が片切彫りされている。19は、甕の破片を円形状に整形し、破断面には入念な研磨痕が残されている。また、刃物痕らしき跡も残されていることから、土器破片を砥石に転用したものと考えられる。



第49図 大竹遺跡第3次調査遺構外出土遺物

第27表 大竹遺跡第3次調査遺構外出土遺物観察表 (第49図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 環	—	—	—	ABD	B	橙 2.5YR-6/8	口縁部破片	外面：体部ヘラケズリ 内面：放射状唯文
2	須恵器 蓋	つまみ径 3.2	(1.5)	—	ADPH	B	黄灰 2.5Y-6/1	つまみ部 90%	南比金産
3	須恵器 甕	—	—	—	AEN	B	黄褐 2.5Y-5/4	肩部破片	外面：タタキ目状工具による調整 内面：縦方向の沈線状の調整有
4	須恵器 甕	—	—	—	ADN	B	外面：灰オリーブ 5Y-6/2 内面：灰 5Y-5/1	胴部破片	内面：ハケ目状工具による調整
5	須恵器 甕	—	—	—	ABH	B	外面：灰白 N-7/ 内面：灰 5Y-4/1	胴部破片	内面：同心円状のあて具による調整
6	須恵器 甕	—	—	—	ABH	B	灰 N-4/	胴部破片	外面：平行タタキ
7	灰釉陶器 環	—	—	—	B	B	灰白 10YR-7/1	体部破片	外面：ヘラケズリ
8	灰釉陶器 壺	—	(3.2)	—	A	B	灰白 2.5Y-8/1	肩部破片	外面：自然釉 第46図4-13と同一個体
9	土師質土器 環	(9.0)	2.2	(4.4)	AB	B	橙 5YR-6/6	口縁部 15%	体部と底部に計2か所穿孔有 口クロ回転時計回り 中世
10	土師質土器 環	(11.0)	(2.1)	—	ABAN	B	にぶい橙 7.5YR-7/4	口縁部 10%	口クロ回転時計回り 底面：糸切り 中世
11	土師質土器 環	—	(2.0)	6.6	ADI	B	にぶい橙 7.5YR-6/4	底部 100%	口クロ形成 内面：ヘラナゲ 底面：板目状調整、糸切り 中世
12	瓦質土器 蓋	(25.6)	(3.1)	—	ABD	B	黄灰 2.5Y-5/1	口縁部 10%	外面：横方向ヘラケズリ 中世
13	瓦質土器 片口鉢	—	—	—	ABCLJK	B	黄灰 2.5Y-5/1	体部破片	外面：煤付着 内面：ヘラ状工具による調整 中世
14	磁器 高台碗	(7.2)	(3.9)	—	—	B	灰白 N-8/	20%	
15	陶器 甕	—	—	—	ABDN	B	外面：赤褐 10R-5/4 内面：にぶい赤褐 2.5YR-5/3	胴部破片	外面：タタキ目有 内面：指頭横ナゲ痕 常滑系 中世
16	陶器 甕	—	—	—	AB	A	灰白 7.5Y-7/1	胴部破片	外面：自然釉 内面：ヨコナゲ
17	瓦質土器 碓	—	—	—	ADIN	B	外面：暗褐 10YR-3/3 内面：にぶい黄褐 10YR-5/3	口縁部破片	外面：煤付着
18	磁器 青磁碗	—	—	—	D	B	オリーブ灰 2.5GY-5/1	体部破片	龍泉窯系蓮弁文
19	土器転用 砥石?	最大長 6.9 最大幅 6.2 最大厚 1.1 重量 70g						—	獲片

4 調査のまとめ

この度の大竹遺跡の調査は、前述のとおり第2次調査及び第3次調査の調査区が隣接している。そこで、各調査区の内容及び周辺遺跡との関係から調査成果について考えていきたいと思う。

第2次調査では、調査区の北東部に遺構が偏在し、遺物は、少片であるが、奈良・平安時代及び中世のものが確認された。特に第3号土坑では、15～16世紀の遺物、古河公方系の土師質土器環が見つっている。これは、今後遺跡の性格を考える上で貴重な資料である。

第3次調査では、前述のとおり調査区の半分が桑の伐根によって攪乱されていたものの、奈良・平安時代から中世にかけての遺物を豊富に出土した。中でも第4号トレンチ出土の「原」と書かれた墨書土器(第46図4-9)は、読み「ハラ」から、幡羅郡家との関連性が考えられるものである。残念ながら、

底面破片のため、詳細な時期は不明であるが、胎土や製作方法から、8～9世紀と考えられる。また、第2号ピットの底面に、須恵器甕（第43図2-1）が比較的良好な遺存状態で残されており、何かを埋納したとも考えられたが、上層が攪乱のため、詳細は不明である。また、5箇所のトレンチでは、7世紀末～8世紀後半の遺物及び中世（15～16世紀）の遺物を中心に検出された。特に第5号トレンチでは、中世の遺物がまとまって出土しているため、この時期の遺構が存在した可能性が高いと考えられる。

第2次・第3次調査区からは、主に奈良・平安時代（7～8世紀が中心）及び中世（15～16世紀が中心）の遺構・遺物が確認された。これらの成果を周辺遺跡との関連から考えてみたい。

まず、奈良・平安時代の遺構・遺物については、本遺跡の北側に所在する、幡羅官衙遺跡群との関連があげられる。この遺跡群は、武藏国幡羅郡の郡家跡（幡羅官衙遺跡）・祭祀跡（西別府祭祀遺跡）・寺院跡（西別府廃寺）を複合した郡衙関連遺跡であり、7世紀後半から11世紀前半までの遺構・遺物が確認されている。本遺跡では、北西部で第1次調査の成果から同時期の集落跡が確認されていること、第3次調査での墨書土器出土や同調査区の第2号ピットの土器検出状況から、幡羅官衙遺跡群との関連性が浮かび上がってくる。本遺跡は幡羅郡家を支える衛星集落の1つと再確認できる。

次に、中世遺物について考えてみたい。本遺跡の北側には、市指定史跡の西別府館跡が所在する。ここは、12世紀中葉から別府条里の開墾に尽力した別府氏が、13世紀初頭に西別府氏と東別府氏に分かれて以降、西別府氏によって築造された館跡である。この西別府館跡の時期は、この分裂から戦国時代の終焉までと考えられ、最近まで一部に土塁や堀が確認されていたと伝えられている。この伝承が確かなものならば、戦国時代（14～17世紀）のものと考えられるが、現在は市指定史跡の標識が立つのみで、他の痕跡は確認されていない。両調査区は、この西別府館跡の南側に位置し、第2次調査の第3号土坑や第3次調査の中世遺物の出土等、15～16世紀の時期を中心に出土することから、西別府館跡との関連性を指摘できるだろう。

まとめてみると、今回の調査成果からは、奈良・平安時代の遺構・遺物から幡羅官衙遺跡群との関連を再確認できたが、一方、中世については、遺構がほとんど確認できなかった。しかし、多数の遺物の存在と両調査区の位置から西別府館跡との関連性が浮かび上がってきたようである。また、本遺跡内で第1次調査と第2次・3次調査の成果に差が見られるようでもある。このことについては、今後の検討課題としておきたい。

主な引用・参考文献

- 熊谷市教育委員会 2013 『西別府祭祀遺跡、西別府廃寺、西別府遺跡 統括報告書Ⅰ』
熊谷市 2015 『熊谷市史 資料編1 考古』
熊谷市教育委員会 2018 『大竹遺跡Ⅰ』

瀬戸山古墳群第 14 号墳



V 瀬戸山古墳群第14号墳の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査に至る経過

瀬戸山古墳群の調査は、建築主（中島大光氏）との調整を経て、個人専用住宅建築に伴う基礎掘削工事により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成30年6月1日付けで、埼玉県教育委員会あてに、建築主より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市平塚新田字前原518番1地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号№59-027 瀬戸山古墳群及び埼玉県遺跡番号№59-028 瀬戸山遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成30年7月25日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下50cmで古墳の周溝跡と共に埴輪が確認された。

個人専用住宅建築は、基礎工事の掘削深度が深く、埋蔵文化財の保護層が設けられないため、発掘調査の措置が適当である旨の副申を付して、埋蔵文化財発掘の届出を平成30年8月1日付け熊教社埋発第205号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成30年8月1日付け教文資第5-681号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99号第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成30年8月22日付け熊教社埋発第262号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成30年8月6日から8月27日まで実施した。調査面積は、62.1㎡である。

まず、遺構確認面まで重機による表土剥ぎを行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、古墳の周溝跡及び性格不明遺構で、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。最後に、重機による埋め戻しや器材の撤収を行い、現場におけるすべての作業を終了した。なお、調査終了後、検出された周溝跡が、検出位置及びその状況から、既に墳丘が削平された瀬戸山古墳群第14号墳（埼玉県遺跡番号59-027-27）の周溝と判断されたため、本報告では遺跡名称として当該名称を使用する。

整理・報告書作成作業は、令和3年4月から令和4年3月まで実施した。まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと併行して遺構の図面整理を行った。

次に、遺物のトレースを行い、図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理、遺物写真撮影を行い、写真図版の割付けをした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は平成30年度に、整理・報告書作成は令和3年度に実施し、いずれも熊谷市教育委員会が主体者であった。なお、組織については、第IV章の大竹遺跡と同一であるため記述を省略することとし、第IV章の記述を参照されたい。

2 遺跡の概要

(1) 瀬戸山古墳群について

瀬戸山古墳群は、熊谷市南東部の平塚新田及び楊井に所在する古墳群である。本古墳群は、北西に位置する平塚新田から南東の楊井まで約1.7kmの範囲に広がっている(第50図)。地形的には、北を東へ流れる和田吉野川とその南を同じく東へ流れる和田川に挟まれた細長い江南台地の東端に立地しており、標高は平塚新田で44～46m、楊井で32～42mを測る。なお、本古墳群とほぼ同所には、瀬戸山遺跡も所在している。なお、瀬戸山遺跡は、古墳時代前期から奈良・平安時代、近世までの複合遺跡であり、縄文時代及び弥生時代については、現時点では遺構は確認されていないが、遺物が出土していることから今後遺構が確認される可能性が高い。

本古墳群では、現在までに計36基の古墳が確認されており、その分布状況から平塚新田地区と楊井地区に所在するものの2つのグループに分けられる(第28表)。本古墳群の築造年代については、6世紀後半から7世紀末～8世紀初頭までと考えられている。

本古墳群における発掘調査は、これまでに計7回実施されており、調査が行われた古墳の総数は計20基である。発掘調査が実施された古墳は、調査順に挙げると、楊井古墳(12)、伊勢山古墳(1)、第21・15号墳(2・28)、楊井薬師寺古墳第1・3号墳(7・9)、第13号墳(26)、第1～12号墳(14～25)、第29号墳(34)である。以下、発掘調査が行われた古墳の概要について調査順に述べる。

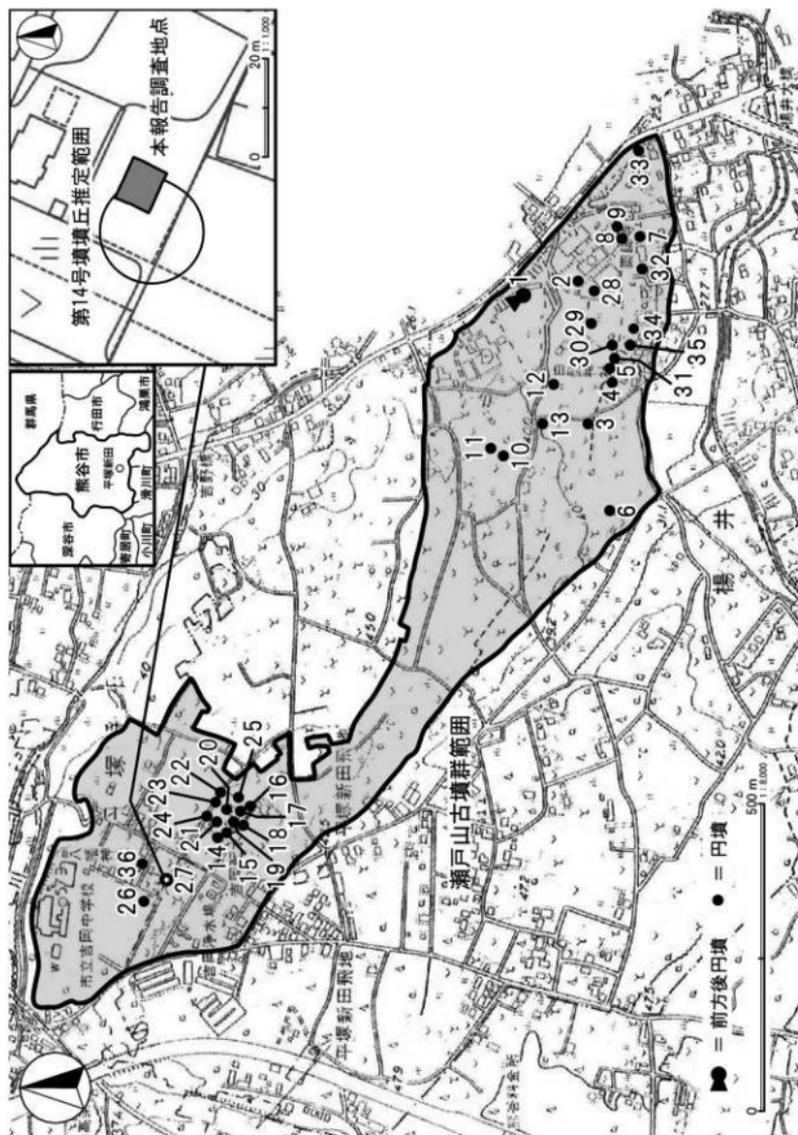
本古墳群で最初に発掘調査が行われたのは、楊井古墳(12)である。本古墳は、台風で欠損した道路の改修に伴い、畑地の土取りを行った際に石室が発見されたことから調査が行われた。調査時期は、1959(昭和34)年2月27・28日、調査主体者は熊谷市教育委員会、担当者は小澤國平である(埼玉県教育委員会1973)。

本古墳は、径15～16m、高さ2mを測る円墳であるが、現在墳丘は削平されている。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による両袖式横穴式石室であり、羨道部から玄室奥壁までは残存していたが、東側は羨道部と玄室の境以外欠損していた。西側羨道部は根石のみ残存していた。規模は、玄室が長さ2.25m、幅1.95m、羨道部が長さ1.5m、幅は羨門部で0.5m、玄室との境で0.9mを測る。玄室棺床面には、拳大の川原石が敷かれていた。遺物は、玄室から大刀7点、鏢1点、小尻1点、須恵器片2点、土師器片1点、鉄製耳環1点、銅製耳環1点、鉄釘22点が出土している。遺物の詳細は不明であるが、築造年代は石室の形態からみて7世紀前半の可能性が高い。

次に調査が行われたのは、伊勢山古墳(1)である。調査期間は、1961(昭和36)年9月18日から27日までである。調査主体者は熊谷市教育委員会、担当者は小澤國平である(熊谷市1963)。調査原因は工場建設であり、本古墳は現在消滅している。

本古墳は、全長41mを測る本古墳群唯一の前方後円墳である。墳丘の高さは、前方部が3.5m、後円部が3mを測る。主体部は、後円部墳頂からやや南寄りに位置する。凝灰質砂岩の切石積による片袖式横穴式石室であり、玄室は長さ2.75m、幅1.45m、羨道部の長さは1.7mを測る。遺物は、玄室から大刀1点、刀子1点、鉄織片、鉄製轡1点、金製耳環1点、円筒埴輪、土師器、須恵器の破片が出土しており、築造年代は6世紀後半と考えられている。

第21・15号墳(2・28)の調査は、工場建設に伴い、1972(昭和47)年7月22日から10月25日まで、



第50図 瀬戸山古墳群分布図、瀬戸山古墳群第14号墳調査地点位置図

第28表 瀬戸山古墳群一覧表 (第50図)

No.	遺跡No.	名称	墳形	規模	遺構・出土遺物	備考
1	No.59-027-001	伊勢山古墳	前方後円墳	全長41m	片地型横穴式石室、直刀、鉄鏝、耳環、円筒埴輪	消滅。
2	No.59-027-002	第21号墳	円墳	径28m、高4m	横穴式石室	S42城西大調査(1号墳)、消滅。
3	No.59-027-003	第22号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
4	No.59-027-004	第23号墳	円墳	径7m、高0.6m	-	墳丘削平。
5	No.59-027-005	第24号墳	円墳	径10m、高2.5m	-	半壊状態。
6	No.59-027-006	第25号墳	円墳	径18m、高1m	-	ほぼ完存。
7	No.59-027-007	横井薬師寺古墳第1号墳	円墳	径32m	胴張型横穴式石室、直刀、土師器	消滅。
8	No.59-027-008	横井薬師寺古墳第2号墳	円墳	径27m、高2.4m	-	ほぼ完存。
9	No.59-027-009	横井薬師寺古墳第3号墳	円墳	径10m	横穴式石室	消滅。
10	No.59-027-010	第26号墳	円墳	径16m、高1.2m	-	半壊状態。
11	No.59-027-011	第27号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
12	No.59-027-012	横井古墳	円墳	径15～16m、高2m	横穴式石室、太刀、鏝、鉄鏝、土環、土師器	墳丘削平。
13	No.59-027-013	第28号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
14	No.59-027-014	第1号墳	円墳	径13m	円筒・形象(馬)埴輪、土師器	墳丘削平。
15	No.59-027-015	第2号墳	円墳	径11m	土師器	墳丘削平。
16	No.59-027-016	第3号墳	円墳	径13m	土師器	墳丘削平。
17	No.59-027-017	第4号墳	円墳	径9m	-	消滅。
18	No.59-027-018	第5号墳	円墳	径6m	-	墳丘削平。
19	No.59-027-019	第6号墳	円墳	径13m	-	墳丘削平。
20	No.59-027-020	第7号墳	円墳	径10m	円筒埴輪	消滅。
21	No.59-027-021	第8号墳	円墳	径10m	円筒埴輪	墳丘削平。
22	No.59-027-022	第9号墳	円墳	径21m	円筒埴輪、土師器	二重周堀。墳丘削平。
23	No.59-027-023	第10号墳	円墳	径23m	円筒埴輪、土師器	二重周堀。墳丘削平。
24	No.59-027-024	第11号墳	円墳	径15m	円筒埴輪	墳丘削平。
25	No.59-027-025	第12号墳	円墳	径8m	円筒埴輪	墳丘削平。
26	No.59-027-026	第13号墳	円墳	径10m	土師器	墳丘削平。
27	No.59-027-027	第14号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
28	No.59-027-028	第15号墳	円墳	不明	-	S42城西大調査(2号墳)、消滅。
29	No.59-027-029	第16号墳	円墳	径8m、高2.5m	-	消滅。
30	No.59-027-030	第17号墳	円墳	径18m、高2.5m	横穴式石室	ほぼ完存。
31	No.59-027-031	第18号墳	円墳	径10m、高1m	-	半壊状態。
32	No.59-027-032	第19号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
33	No.59-027-033	第20号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
34	No.59-027-034	第29号墳	円墳	不明	横穴式石室、鉄鏝、耳環	石室半分欠。
35	No.59-027-035	第30号墳	円墳	不明	横穴式石室	石室一部露出。
36	No.59-027-036	第31号墳	円墳	径13.6m	円筒埴輪	墳丘削平。

城西大学考古学研究会が主体となって行われた。本報告がないため詳細は不明であるが、当時の遺跡報告会の発表要旨では、現在の名称である第21号墳は「第1号墳」、第15号墳は「第2号墳」に該当する。また、工場敷地内にはもう1基古墳(30:現在の第17号墳)が所在するが、この古墳については工場内での公園造成に伴い、現状保存されている(貞末1973)。これらの古墳の築造年代は、7世紀前半と考えられている。

第21号墳(2)は、径約28m、墳丘の高さは約4mを測る円墳である。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、規模は玄室が長さ約5.5m、幅2.5m、羨道部は長さ約2mを測る。遺

物は、玄室から金箔が一部残る金具、杏葉、雲珠、鉄織、小玉、切子玉、大刀の鞘口一部等が出土している。

第15号墳(28)は、墳丘の大半が既に削平された状態にあり、主体部の一部が残存するにとどまる。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室と思われるが、玄室と羨道部の根石が確認されたのみである。規模は、玄室が長さ約3m、幅約1.5mを測り、第21号墳より小さい。遺物は、鉄織約40点、管玉1点、切子玉2点が出土している。

楊井薬師寺古墳第1・3号墳(7・9)の調査は、墓地造成に伴い、1977(昭和52)年7月25日から9月1日まで行われた。調査主体者は、熊谷市教育委員会である。なお、寺院境内にはもう1基古墳(8:楊井薬師寺古墳第2号墳)が存在するが、この古墳については現状保存されている(熊谷市教育委員会1978)。これらの古墳の築造年代は、7世紀末～8世紀初頭と考えられている。

楊井薬師寺古墳第1号墳(7)は、径32m、墳丘の高さ約3mを測る円墳であり、幅約1.5～2mの周溝が巡る。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、玄室以外は破壊されていた。玄室は、長さ3.3m、幅3.15mを測る。玄室内には、長さ2.44m、幅2m、厚さ0.94mを測る大形の天井石が落下していたが、礎の敷かれた棺床面との間に約50cmの土砂が堆積しており、遺物は鉄製品の破片が1点出土したのみである。

楊井薬師寺古墳第3号墳(9)は、既に墳丘が削平された状態にあり、周溝と主体部の一部が確認された。径約10mの小さい円墳と思われ、周溝は幅約1.4mを測る。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、玄室の根石と棺床面が確認されたのみである。玄室は、長さ1.65m、幅1.2mを測る。本古墳に伴う遺物は出土していない。

第13号墳(26)の調査は、市立吉岡中学校校庭拡張に伴い、1982(昭和57)年6月2日から30日まで行われた。調査主体者は、熊谷市教育委員会である(熊谷市教育委員会2001)。墳丘は既に削平された状態にあり、円形に巡る周溝のみ確認された。径約10mの円墳であり、周溝は幅約1m、深さは0.35m前後で南東にブリッジを持つ。遺物は、周溝から完形の土師器境が出土した。

第1～12号墳(14～25)の調査は、市立吉岡配水場建設に伴い、1982(昭和57)年7月12日から9月11日まで行われた。調査主体者は、熊谷市教育委員会である。12基の古墳は、調査面積3,000㎡内に密集する形で所在しており、墳丘はすべて削平されていた(熊谷市教育委員会2001)。

第1号墳(14)は、東側の周溝が確認されただけであるが、径約13mの円墳と思われる。周溝は、幅3m、深さ0.5m前後を測る。遺物は、土師器高坏、円筒埴輪片、形象埴輪(馬形)片が出土している。

第2号墳(15)は、径約11mの円墳である。幅1.5m、深さは北・西側が0.8m、南・東側が0.4m前後の周溝が全周する。遺物は、土師器模倣坏が出土している。

第3号墳(16)は、北側の周溝が確認されただけであるが、径約13mの円墳と思われる。周溝の幅は、東側が3.4mと広く、西側が1.3mと狭い。深さは、0.12mと浅い。遺物は、土師器甕片が出土している。

第4号墳(17)は、径約9mの円墳である。幅0.5～1.3m、深さ0.2m前後の周溝が全周する。本古墳に伴う遺物は、出土していない。

第5号墳(18)は、径約6mの小規模な円墳である。南側は調査区外にあるが、周溝は、幅0.5m、深さ0.2m前後を測り、北西と北東にブリッジを持つ。出土遺物に図示可能なものは、みられなかった。

第6号墳(19)は、径約13mの円墳である。周溝は、幅1m、深さは0.2m前後を測り、南側にブリッジを持つ。本古墳に伴う遺物は、出土していない。

第7号墳(20)は、径約10mの円墳である。幅1.5m、深さ0.25m前後を測る周溝が全周する。遺物は、円筒埴輪片1点のみである。

第8号墳(21)は、径約10mの円墳である。周溝は、幅にややバラツキがみられるが、概ね1.3m、深さ0.3m前後を測り、全周する。遺物は、円筒埴輪片が少量出土している。

第9号墳(22)は、南西部の約1/4が検出されただけであるが、周溝が二重に巡る円墳と思われる。周溝は、内側の幅が0.2～0.9mと狭いが、外側は2.5～3.8mと広く、深さは内側が0.3mと浅く、外側が0.55m前後とやや深い。内側と外側の距離は、約2mを測る。規模は、外側の周溝を含めて径約21mと大きい。遺物は、外側の周溝から多量の円筒埴輪片が出土しており、土師器模倣坏も若干出土している。内側の周溝からは、円筒埴輪片が少量出土している。

第10号墳(23)は、南側の半分が検出されただけであるが、第9号墳同様、周溝が二重に巡る円墳と思われる。周溝は、内側の幅が1～1.4mと狭いが、外側は2.6～3.8mと広い。深さは、内側が0.4～0.5m、外側が0.3～1m前後を測る。内側と外側の距離は、約1.2mである。規模は、外側の周溝を含めて径約23mと第9号墳よりさらに大きい。遺物は、内外の周溝とも少ないが、土師器坏、円筒埴輪片が少量出土している。特に外側の周溝の東側では、赤彩された土師器坏が3個体まとまって出土している。

第11号墳(24)は、東側の周溝が確認されただけであるが、径約15mの円墳と思われる。周溝は、幅1.4～3.8mとバラツキがみられ、深さは0.7mを測る。遺物は、円筒埴輪片が少量出土している。

第12号墳(25)は、西側周溝の外側の立ち上がり部のみ検出された。直径を還元すると、径約8mの円墳と思われる。遺物は、円筒埴輪片が1点出土しているのみである。

第1～13号墳の築造年代については、埴輪を持つものと持たないものがあることから本古墳群の築造年代である6世紀後半から7世紀末～8世紀初頭までと考えられている。

第29号墳(34)の調査は農地の開墾に伴い石室の一部が露出する状態で発見され、石室の記録保存を目的に、発掘調査が平成28年3月1日から3月25日まで行われた。調査主体は熊谷市教育委員会である(熊谷市教育委員会2020)。規模は不明である。凝灰質砂岩の切石切組積による胴張型横穴式石室の玄室東側壁と奥壁等が確認されている。その長さは2.84m、最大幅約2.14mを測る。遺物は、鉄鍔及び金銅製耳環が出土している。

以上、瀬戸山古墳群で発掘調査が行われた古墳について概要を述べた。調査は、昭和30年代を皮切りにほぼ10年周期で実施されてきたが、これらの調査以前にも本古墳群には古い記録が残っている。

『新編武蔵國風土記稿』「巻之二百二十一 大里郡之三 御正領」の「平塚新田」の項には、付近にある古墳の存在から村の名前に「塚」が付けられたとの記述があり、また村内にある「業師堂」の項には、古墳から出土した鉄鍔が納められているとの記述もみられる(塩野2004)。1915(大正4)年には、楊井字瀬戸山山地内で開墾中に金製耳環3点、銀製耳環2点、大刀5点、鏢4点、鉄鍔・刀子各1点が発見されたとの記録も残っている(本村1991)(塩野2004)。東京大学史料編纂所蔵の『大日本国誌 武蔵國』「古墳墓」の項(内務省地理局編)に「平塚新田古墳」として、平塚新田字前原の林中に2基の

古墳が存在し、1基は「大塚」と呼ばれ、もう1基は埴輪をもち、石室が構築されたとの記述がある（塩野 2004）。

以上のことから、瀬戸山古墳群の所在する平塚新田地区及び楊井地区では、古くからこの地に古墳が多数所在することが伝わっており、現在確認されている36基以上の古墳が存在していたことは間違いない。ではここで、本古墳群とほぼ同所に所在する瀬戸山遺跡についても若干触れておきたい。

瀬戸山遺跡における発掘調査は、これまでに計3回実施されている。このうちの2回は、上記の1972（昭和47）年に城西大学考古学研究会が実施した調査と1982（昭和57）年に熊谷市教育委員会が市立吉岡配水場建設に伴い、実施した調査が該当する。そして、3回目は、2011（平成21）年、携帯電話用電波塔建設に伴い、熊谷市遺跡調査会により実施されている（熊谷市遺跡調査会 2011）。

各調査の成果については、紙数の都合もあるため詳細は省くが、冒頭でも述べたとおり、本遺跡は古墳時代前期から奈良・平安時代、近世まで続く複合遺跡であることが判明しており、縄文時代・弥生時代は遺物のみ確認されている。このうち最も多く検出されているのは、古墳時代前期であり、本古墳群とほぼ同所に集落が広がっていることが考えられる。また、3回目に実施した調査は、調査地点が古墳群の遺跡範囲ほぼ中央の南側に位置し、平安時代の竪穴建物跡が2棟検出されていることから同時代の集落も広がっていることが考えられる。

(2) 調査の方法

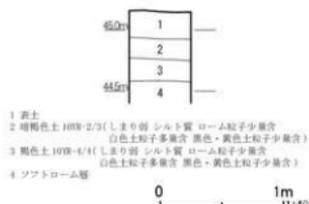
調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標IX系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体を把握できるように、北西隅をA-1として東へA・B・C、南へ1・2・3とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3と呼称した。Bライン以东もAラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1m間隔メッシュを張り、簡易遺り方の方で行った。

(3) 検出された遺構と遺物

本調査地点は、遺跡範囲の北西部に位置し、1982年（昭和57年）市立吉岡中学校校庭拡張に伴う調査で検出された第13号墳の南東に位置し、第31号墳の南側に位置する。調査時点では、墳丘は削平されていた。

検出された遺構と遺物については、遺構が、古墳時代後期の古墳周溝跡（第14号墳周溝跡）1条、時期不明の性格不明遺構1基であった。遺物は、円筒埴輪及び土師器小片が出土した。出土遺物の総量はコンテナにして1箱であった。



第51図 瀬戸山古墳群第14号墳基本層序図

3 遺構と遺物

(1) 古墳(周溝跡)

第14号墳(第53～56図、第29表)

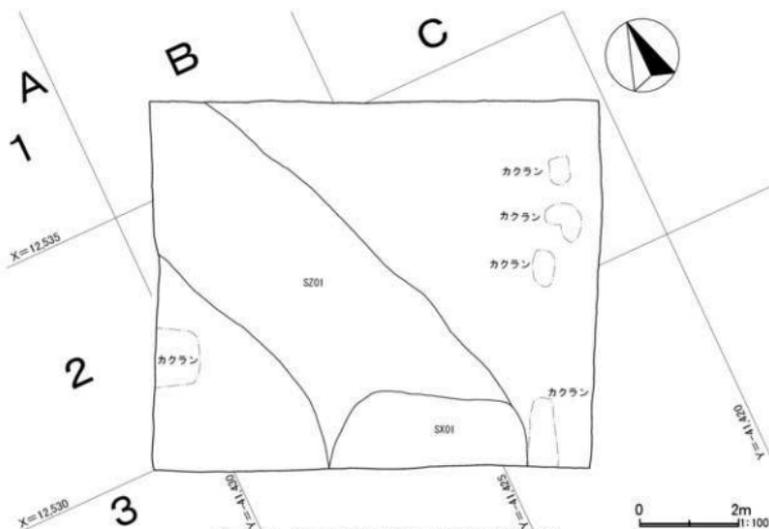
調査区の北西端から中央に向かってわずかに弧を描き、南端の中央部に至る位置にある。B-1・2・3及びC-2・3グリッドにある。第1号性格不明遺構と重複関係にあり、第1号性格不明遺構に切られている。なお、墳丘部分は既に削平されていたが、調査区の南西隅の土層堆積状況から、墳丘の一部と考えられる土層が確認された(第53図土層断面図第10層)。

今回の調査で確認された周溝は全体の1/8程度で、これを頼りに全体の古墳の規模を推定してみたが、誤差が大きく復元できなかった。ただし、径10m以下の小規模ではなく、径15～20m以上の規模と考えられる。

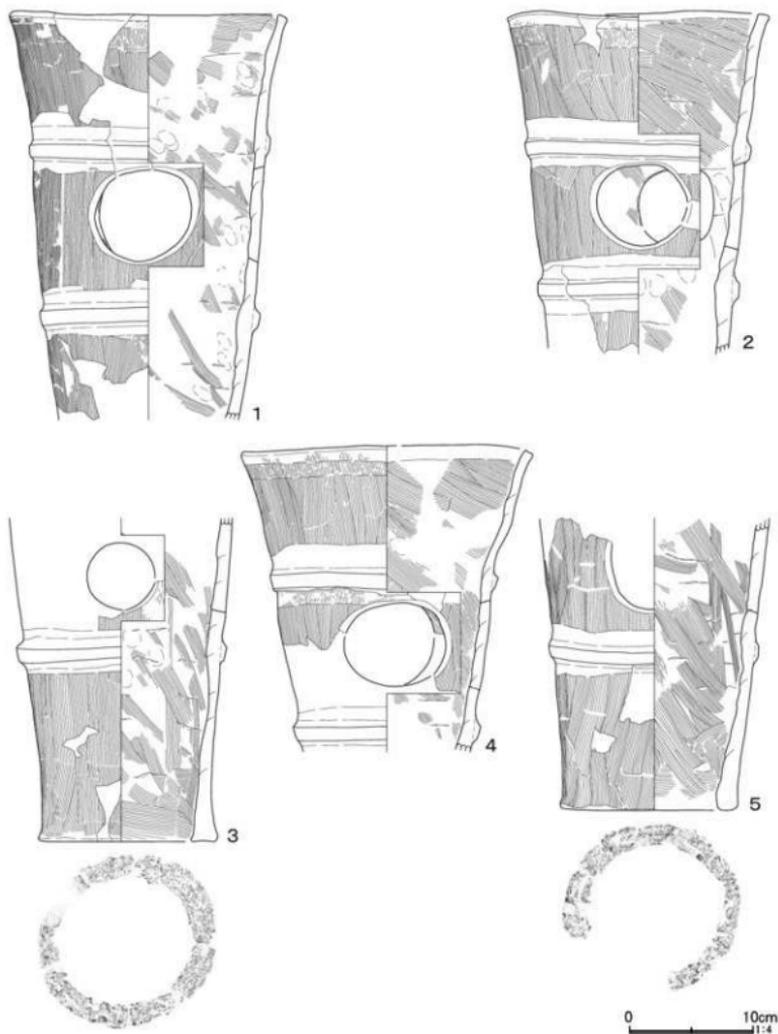
確認された周溝は、ややいびつな弧を描いているように見えるが、これは第1号性格不明遺構に切られているためと考えられる。実際は直線に近くわずかに湾曲していたようである。周溝は、確認面で幅2.8～3.4mであり、深さは確認面で0.4～0.64mである。また、周溝の形状は、墳丘側が緩やかに、外側はやや鋭角に立上がっているが、船底形に近い形状を呈している。

周溝の埋土は、土層断面観察から墳丘側から徐々に埋まっていったと考えられる。

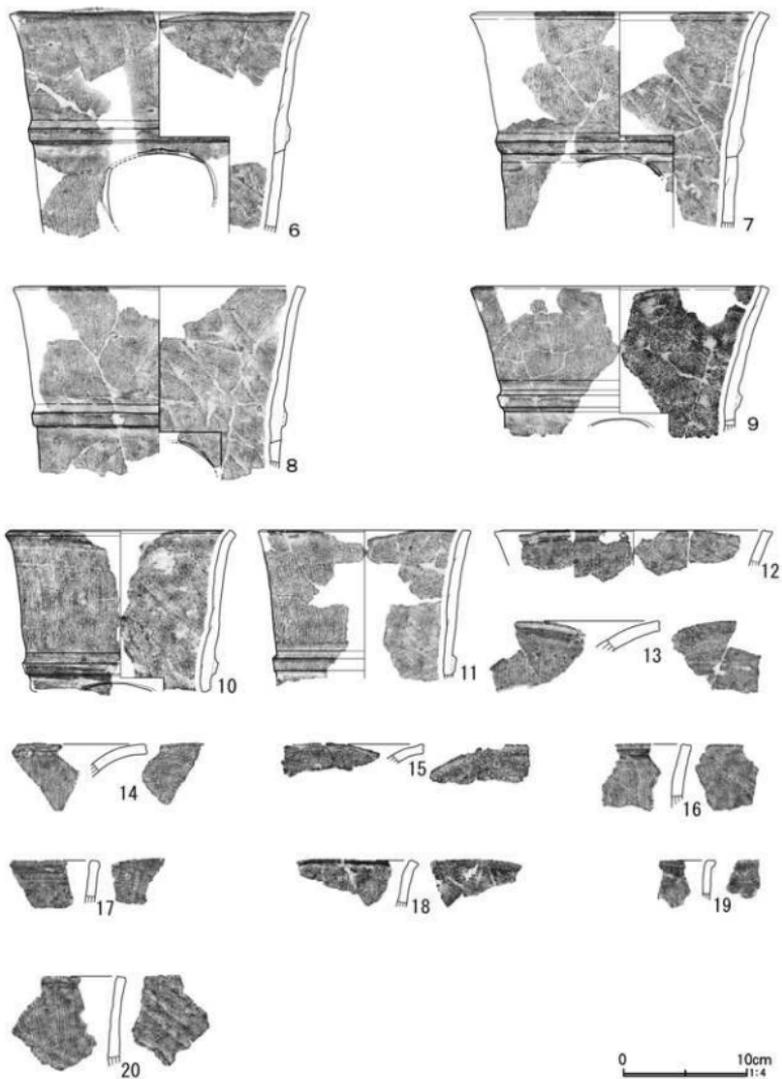
遺物は、埋土中から円筒埴輪が出土し、調査区の北西部に集中していた。また、いずれも墳丘側の周溝の底部よりもやや高い位置で出土した。なお、遺物は、円筒埴輪のほか土師器片も出土している。これらは、元々墳丘上に配列されていたものが、周溝に落下したものと考えられる。このほか、図示しなかったが、緑泥石片岩片が出土した。



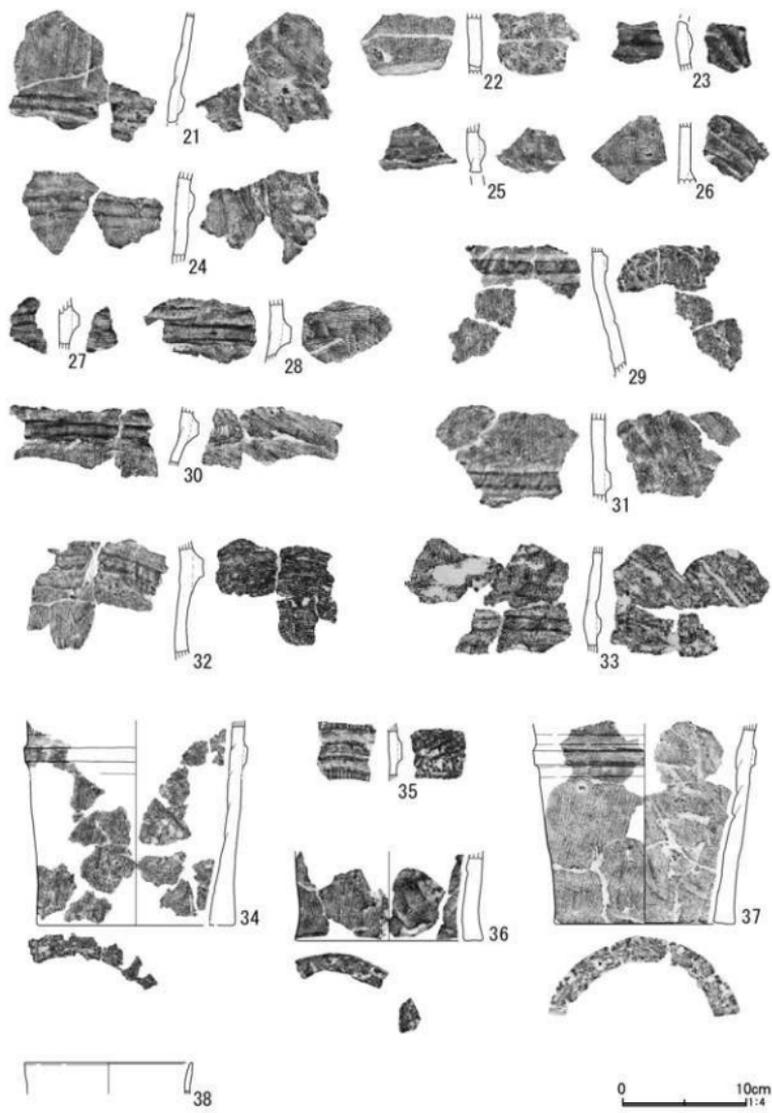
第52図 瀬戸山古墳群第14号墳調査区全測図



第 54 图 瀬戸山古墳群第 14 号墳出土遺物(1)



第 55 図 瀬戸山古墳群第 14 号墳出土遺物②

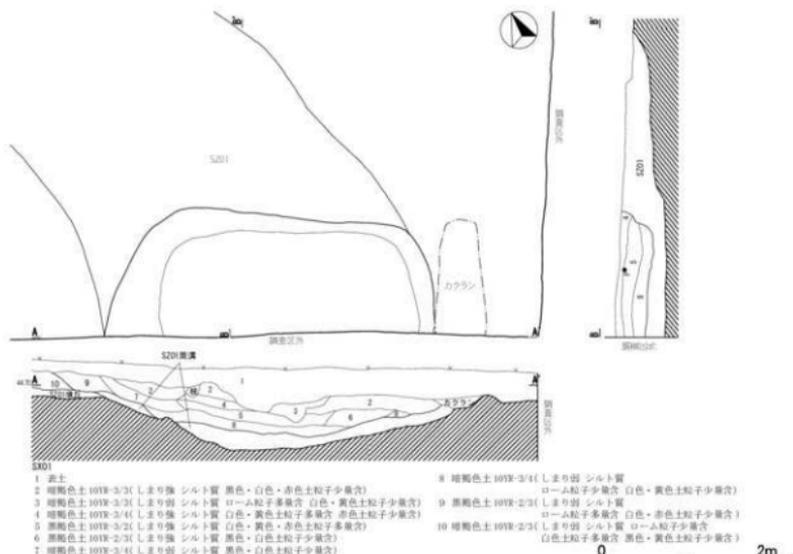


第 56 图 瀬戸山古墳群第 14 号墳出土遺物③

第29表 瀬戸山古墳群第14号墳出土遺物観察表(第54~56図)

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円筒埴輪	21.5	(33.0)	—	ABCJN0	A	明赤褐色 5YR-5/6	80%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目、指頭圧痕有 台形状の突帯が2条 凹形透孔有が2ヶ所
2	円筒埴輪	21.1	(27.7)	—	ABC1JN	A	明赤褐色 5YR-5/6	50%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目、指頭圧痕有 台形状の突帯が2条 ずれた位置で凹形透孔が2ヶ所
3	円筒埴輪	—	(26.4)	14.0	ABC1N	A	明赤褐色 5YR-5/8	70%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目、指頭圧痕有 台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
4	円筒埴輪	22.8	(24.9)	—	ABC1JN	A	橙 7.5YR-6/6	40%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 台形状の突帯が2条 3ヶ所 凹形透孔有が2ヶ所
5	円筒埴輪	—	23.8	(13.8)	ABC1JN	A	明赤褐色 5YR-5/6	50%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
6	円筒埴輪	(22.9)	(18.0)	—	ABE1N	B	橙 5YR-6/8	口縁部へ 胴部 40%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
7	円筒埴輪	(22.7)	(17.5)	—	ABD1N	B	橙 5YR-6/6	口縁部へ 胴部 30%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
8	円筒埴輪	(22.5)	(14.8)	—	ABD1N	B	橙 5YR-6/6	口縁部へ 胴部 40%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
9	円筒埴輪	(23.4)	(11.9)	—	ABCDB0N	B	にぶい・橙 7.5YR-7/4	口縁部へ 胴部 25%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
10	円筒埴輪	(18.1)	(13.1)	—	ABC1	B	橙 7.5YR-6/6	口縁部へ 胴部 20%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
11	円筒埴輪	(17.2)	(12.1)	—	ABC1	B	橙 7.5YR-6/6	口縁部へ 胴部 20%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
12	円筒埴輪	(21.4)	(2.9)	—	ABD1N	B	橙 5YR-6/6	口縁部 12%	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目
13	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	AN	B	橙 7.5YR-7/6	口縁部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 口縁部、外反しつづいて、横位ヘラナデ
14	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	AEM	B	橙 5YR-6/8	口縁部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 横位ハケ目
15	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	ABC1	B	橙 7.5YR-6/6	口縁部破片	外面: 横位ナデ 内面: 斜位ハケ目、横位ナデ
16	円筒埴輪	—	—	—	AEM	B	明橙 7.5YR-6/8	口縁部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目
17	円筒埴輪	—	—	—	AM	B	橙 5YR-6/6	口縁部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 横位ハケ目
18	円筒埴輪	—	—	—	AGN	B	にぶい・橙 7.5YR-6/4	口縁部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 横位ハケ目
19	円筒埴輪	—	—	—	ADM	B	にぶい・橙 5YR-6/4	口縁部破片	外面: 斜位ハケ目 内面: 横位ハケ目
20	円筒埴輪	—	—	—	ABE1N	B	明橙 7.5YR-5/8	口縁部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目
21	円筒埴輪	—	—	—	ABED1N	B	橙 5YR-6/8	胴部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
22	円筒埴輪	—	—	—	ABCE1	B	黄褐色 7.5YR-7/8	胴部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目、指頭圧痕有 凹形透孔有
23	円筒埴輪	—	—	—	ABD1N	B	橙 7.5YR-6/8	胴部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有
24	円筒埴輪	—	—	—	ACDB0N	B	橙 5YR-6/8	胴部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 内外面で風化している
25	円筒埴輪	—	—	—	ABEN	B	橙 7.5YR-6/8	胴部破片	外面: 縦位ハケ目 内面: 斜位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 凹形透孔有

No	器種	口径	器高	底径	胎土	模成	色調	残存率	備考
26	円筒埴輪	—	—	—	ADHN	B	橙 7.5YR-6/6	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目
27	円筒埴輪	—	—	—	ABN	B	橙 5YR-6/8	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目 台形状の変態を呈する
28	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	ABCM	B	にぶい黄橙 7.5YR-5/4	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 台形状の変態を呈する No.30と同一個体
29	円筒埴輪	—	—	—	ABCEJ	B	明赤褐 5YR-5/8	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目、縦位ヘラナゲ くずれた台形状の変態を呈する
30	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	ABCM	B	にぶい黄橙 7.5YR-5/4	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 台形状の変態を呈する No.28と同一個体
31	円筒埴輪	—	—	—	ACDMN	B	橙 5YR-6/8	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ヘラナゲ 台形状の変態を呈する
32	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	ABEN	B	橙 7.5YR-7/6	胴部 10%	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目 台形状の変態を呈する
33	円筒埴輪	—	—	—	ADN	B	外面：橙 7.5YR-7/6 内面：橙 7.5YR-6/8	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目、指頭瓦直有 くずれた台形状の変態を呈する
34	円筒埴輪	—	(16.7)	(16.0)	ABDN	B	明赤褐 2.5YR-5/6	胴部～ 底部 20%	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目、縦位ヘラナゲ くずれた台形状の変態を呈する 底面：押江直有
35	円筒埴輪	—	—	—	BEKN	B	橙 5YR-6/8	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ヘラナゲ 台形状の変態を呈する
36	円筒埴輪	—	(7.3)	(15.2)	ABDMN	B	橙 7.5YR-7/6	底部 20%	外面：縦位ハケ目 内面：斜位・横位ハケ目
37	円筒埴輪	—	(16.3)	(14.6)	ABDN	B	橙 5YR-6/8	胴部～ 底部 40%	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 くずれた台形状の変態を呈する
38	土師器 環	(13.6)	(2.6)	—	ACK	B	橙 5YR-6/6	口縁部 10%	内外面：横方向ナゲ 横縁部の口縁部のみ



第 57 図 瀬戸山古墳群第 14 号墳第 1 号性格不明遺構

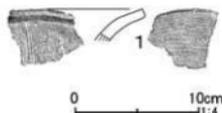
(2) 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第57、58図、第30表）

調査区の南端中央に位置する。B・C-3グリッド内にある。第14号墳周溝と重複関係にあり、第14号墳周溝を切っており、周溝よりも浅い状態で検出された。南が調査区外になる。平面形は隅丸長方形を呈している。ピット等の付属する遺構は確認されなかった。断面形は、南北方向はいびつな箱形であり、東西方向は皿状である。

出土遺物は、朝顔形円筒埴輪片が1点出土し、この他、図示しなかったが、緑泥石片岩片が出土した。これらの遺物は、第14号墳に伴うものと考えられる。

時期は、古墳の時期よりも新しいと考えられるが、詳細は不明である



第58図 瀬戸山古墳群第14号墳
第1号性格不明遺構出土遺物

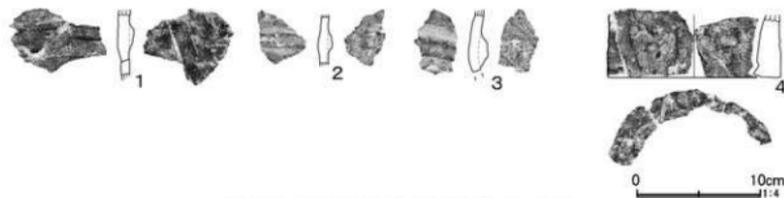
第30表 瀬戸山古墳群第14号墳第1号性格不明遺構出土遺物観察表（第58図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	朝顔形円筒埴輪	—	—	—	ABEN	B	橙 5YR-6/6	口縁部破片	外面：斜位ハケ目 内面：斜位ハケ目

(3) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物を掲載する（第59図、第31表）。

遺物は、埴輪片のみであり、古墳に帰属する遺物の可能性が高いが、表土除去の際に出土したため、ここに掲載する。



第59図 瀬戸山古墳群第14号墳遺構外出土遺物

第31表 瀬戸山古墳群第14号墳遺構外出土遺物観察表（第59図）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円筒埴輪	—	—	—	ACK	B	橙 5YR-6/6	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：縦位ハケ目 くずれた台形状の突帯を呈する 円形透孔有
2	円筒埴輪	—	—	—	ABDBEN	B	橙 5YR-6/6	胴部破片	内面：横位ハケ目 台形状の突帯を呈する
3	円筒埴輪	—	—	—	ABN	B	橙 7.5YR-6/8	胴部破片	外面：縦位ハケ目 内面：斜位ハケ目 右野状の突帯を呈する
4	円筒埴輪	—	(5.6)	(14.0)	ABN	B	明赤褐 5YR-5/8	底部 40%	外面：縦位ハケ目 内面：横位ハケ目 底面：押江痕有

4 調査のまとめ

瀬戸山古墳群は、その分布状況から平塚新田地区と楊井地区の2つに大きく分けられる。標高の高い平塚新田地区に所在する古墳は、墳丘がすべて削平されており、石室が検出されたものはない。

平塚新田地区に所在する瀬戸山古墳群第14号墳は、今回の調査で、全体の1/8以下しか検出できなかったため、墳丘の大きさを推定することはできなかった。ここでは、周辺の古墳群との対比や古地図から本古墳の位置付けを可能な限り探っていくこととする。

まず、過去に平塚新田地区で調査された2か所の古墳群（第1～12号墳の12基及び第13号墳）と今回の第14号墳の周溝幅及び深さを比較してみた（第32表）。その結果、本古墳の周溝は第1・9・10号墳といったこの地区の古墳の中でも大型な古墳と同規模であることがわかり、特に第9・10号墳といった直径20m以上の墳丘を持つ古墳と類似することがわかった。本古墳は周溝の規模から少なくとも径15m以上の墳丘であった可能性が伺えてくる。

次に、古地形からも古墳の規模を検討してみた。本古墳は、現況の地形図において明確に古墳を示すような地形は確認されていないが（第60図①）、平成8年に瀬戸山古墳群第14号墳として埋蔵文化財包蔵地の新規登録した時の付図では、北側に舌状突起した地形が確認され、この範囲を本古墳として登録している（第60図②）。その内容は、「墳丘は削平され」、「規模や遺物は不明」との記載であった。そこで、さらに古い地図（明治19年に作成された迅速測図）を見てみたところ、本古墳範囲にほぼ重なる形で「八幡祠」の表示が確認できた（第60図③）。この「八幡祠」は、本調査地点から約170m北側に位置する八幡神社を分祀したと考えられる。なお、八幡神社については、創建は江戸時代中期とされ、現在の市立吉岡中学校の東側に位置している。『埼玉の神社』によると、「鎮座地は八幡山と呼ばれた小高い所であり、周辺を赤松林に囲まれた場所」とある（埼玉県神社庁1992）。市内では、墳丘が視認できる規模の古墳の墳頂部に、後年神社の祠が設置された例が多数あり、本古墳も現在は削平されているが、これらと同様の古墳であった可能性が考えられるのである。

第32表 瀬戸山古墳群平塚新田地区古墳一覧表

古墳名	位置	形状	規模 (m)	周溝幅 (m)	周溝深さ (m)	現況	遺物
第1号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径13	2.64～3.4	0.5	削平	土師器・円筒埴輪・形象（馬形）
第2号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径11	1.16～1.76	0.4～0.8	削平	土師器
第3号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径13	1.28～3.4	0.12	削平	土師器
第4号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径9	0.4～1.24	0.16～0.36	消滅	土師器
第5号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径6	0.48～0.72	0.2	削平	土師器
第6号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径13	0.88～1.72	0.2	削平	土師器
第7号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径10	1.12～1.68	0.2～0.3	削平	土師器・須恵器
第8号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径10	0.78～2.06	1.3	削平	土師器
第9号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径21（推定）	2.52～3.88 外側溝	0.52～0.68 外側溝	削平	土師器・円筒埴輪
第10号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径23	2.60～3.84 外側溝	0.3～1.00 外側溝	削平	土師器・円筒埴輪
第11号墳	平塚新田 537-1	円墳	直径15	1.48～3.84	0.76	削平	土師器・円筒埴輪
第12号墳	平塚新田 500	円墳	直径8	不明	不明	削平	土師器・円筒埴輪
第13号墳	平塚新田 478-2	円墳	直径10	0.72～1.24	0.35	削平	土師器
第14号墳	平塚新田 510-1他	円墳	不明	2.8～3.7	0.4～0.64	削平	土師器・円筒埴輪



① 現況の地形図



② 平成8年登載時の地図



③ 迅速測図



第60図 瀬戸山古墳群第14号墳周辺現況・古地形図

平塚新田地区の古墳については、前述のとおり、『新編武蔵國風土記稿』『大日本國誌 武蔵國』等に記載がみられるが、特に『大日本國誌 武蔵國』では、「平塚新田字前原」と小字名も記述されている。この地区で、古来より複数の大規模な古墳の存在が周知されていたことを示しているのである。

最後にまとめてみると、本調査では、古墳の具体的な規模を提示することができなかったが、①周溝の規模、②八幡祠の存在から、中～大規模の可能性がでてきた。この地区の古墳群については、削平され、詳細不明な古墳が多いが、今回の成果も含めて、今後の調査に期待できるものとなった。

主な引用・参考文献

熊谷市 1963 『熊谷市史 前篇』

埼玉県教育委員会 1973 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧(昭和26～40年)』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告第2集
貞末亮司 1973 「熊谷市瀬戸山遺跡の調査」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県遺跡調査会・埼玉県考古学

会・埼玉県教育委員会

熊谷市教育委員会 1978 『楊井薬師寺古墳発掘調査報告書』

本村豪章 1991 「古墳時代の基礎研究稿—資料篇(Ⅱ)—」『東京国立博物館紀要』第26号

埼玉県神社庁 1992 『埼玉の神社 大里 北葛飾 比企』

熊谷市教育委員会 2001 『瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群』

塩野 博 2004 『埼玉の古墳 大里』さきたま出版会

熊谷市遺跡調査会 2011 『瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡』

写 真 图 版



彦松遺跡 調査区全景 (東から)



彦松遺跡 第1・2号竪穴建物跡 (南から)

図版 2



彦松遺跡
第1号竪穴建物跡遺物出土状況



彦松遺跡
第2号竪穴建物跡遺物出土状況



彦松遺跡
第1号土坑（東から）



彦松遺跡
第2号土坑遺物出土状況

彦松遺跡
第3号土坑（西から）



彦松遺跡
第4号土坑（北西から）



彦松遺跡
第5号土坑（北から）



彦松遺跡
第1号溝跡（南から）



图版 4



彦松遺跡 第1号竖穴建物跡 第6图 6



彦松遺跡 第1号竖穴建物跡 第6图 19



彦松遺跡 第1号竖穴建物跡 第6图 20



彦松遺跡 第1号竖穴建物跡 第6图 21



彦松遺跡 第1号竖穴建物跡 第6图 26



彦松遺跡 第1号竖穴建物跡 第6图 33



彦松遺跡
第1号竖穴建物跡
第6图 1~5



彦松遺跡
第1号竖穴建物跡
第6图 24・25

彦松遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 6 圖 7 ~ 12



彦松遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 6 圖 13 ~ 18

• 22 • 23



彦松遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 6 圖 27 ~ 32



図版 6



彦松遺跡 第2号竖穴建物跡 第7図8



彦松遺跡 第2号竖穴建物跡 第7図39



彦松遺跡 第2号竖穴建物跡 第7図43



彦松遺跡 第2号竖穴建物跡 第7図45



彦松遺跡
第2号竖穴建物跡
第7図1～7
・9～12



彦松遺跡
第2号竖穴建物跡
第7図35～38

彦松遺跡
第 2 号竪穴建物跡
第 7 図 16 ~ 19



彦松遺跡
第 2 号竪穴建物跡
第 7 図 21 ~ 33



彦松遺跡
第 2 号竪穴建物跡
第 7 図 40 ~ 42

・ 44 ・ 46 ・ 47



彦松遺跡
第 2 号竪穴建物跡
第 7 図 20



彦松遺跡
第 2 号竪穴建物跡
第 7 図 34



图版 8



彦松遺跡 第2号土坑 第9図3



彦松遺跡 第2号土坑 第9図7



彦松遺跡 第1号溝跡 第13図8



彦松遺跡 第2号土坑
第9図1・2・4~6



彦松遺跡 第5号土坑
第9図1~6

彦松遺跡
第1号溝跡
第13图 1~5・12



彦松遺跡
第1号溝跡
第13图 6・7
・9~11



彦松遺跡 第1号溝跡 第13图 13・14 (左:外面、右:内面)

彦松遺跡 第1号溝跡
第13图 17
(左:外面、中:内面、
右:内面指紋痕)



彦松遺跡
第1号竪穴建物跡 第6图 34
第2号竪穴建物跡 第7图 49
第1号溝跡 第13图 18・19



図版 10



下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡（南から）



下本郷遺跡 第1号竪穴遺構（北から、右上は第1号竪穴建物跡）

下本郷遺跡
第1号竪穴建物跡遺物出土状況
(東から)



下本郷遺跡
第1号土坑
(東から、左は第2号溝跡)



下本郷遺跡
第1～4号溝跡 (東から)



图版 12



下本郷遺跡

第3号溝跡遺物出土状況

【灯火具・受付皿・直刃鎌】



下本郷遺跡

第4号溝跡遺物出土状況1【瓦】



下本郷遺跡

第4号溝跡遺物出土状況2【羽口】



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 8



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 10



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 15



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 16



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第17図 17



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第17図 18



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 20



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 21



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 22



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 27



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17図 28

图版 14



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17图33



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17图36



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17图38



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17图39



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17图42



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第17图31



下本郷遺跡

下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第17图41

第1号竖穴建物跡 第17图43



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图48



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图49



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图50



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图52



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图53



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图54



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图57



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图69



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图71



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图72



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图73



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图74



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图75



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第18图76



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡 第19图86



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图62

图版 16



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图1



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图2



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图3



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图4



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图5



下本郷遺跡
第3号溝跡 第25图1



下本郷遺跡
第3号溝跡 第25图2



下本郷遺跡
第3号溝跡 第25图3



下本郷遺跡
第4号溝跡 第26图1



下本郷遺跡
第4号溝跡 第26图2



下本郷遺跡
遺構外 第28图2



下本郷遺跡
遺構外 第28图3



下本郷遺跡
遺構外 第28图4



下本郷遺跡
遺構外 第28图5



下本郷遺跡
遺構外 第28图6



下本郷遺跡
遺構外 第 28 図 7



下本郷遺跡
遺構外 第 28 図 8



下本郷遺跡
遺構外 第 28 図 15

下本郷遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 17 図 1 ~ 7 · 9
・ 11 ~ 14



下本郷遺跡
第 1 号竪穴建物跡
第 18 図 58 ~ 61
・ 63 ~ 68



下本郷遺跡 第 1 号竪穴建物跡 第 18 図 79 ~ 81 (左 : 外面、右 : 内面)

图版 18



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡

第17图 24 ~ 26 · 29 · 30

· 32 · 34 · 35 · 37

· 40 · 44 ~ 47

第18图 51



下本郷遺跡

第1号竖穴建物跡

第18图 77 · 78 · 82 · 83

第19图 84 · 85



下本郷遺跡 第1号竖穴建物跡 第18图 55 · 56



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图 10 · 11



下本郷遺跡

第1号竖穴遺構

第21图 6 ~ 9



下本郷遺跡 第1号竖穴遺構 第21图 13 · 14



下本郷遺跡
第1号溝跡 第25図2



下本郷遺跡 第2号溝跡 第25図1~8

下本郷遺跡
第4号溝跡
第26図4・5・7~10



下本郷遺跡
第4号溝跡
第26図17~27



下本郷遺跡
遺構外
第28図1・10~13



图版 20



下本郷遺跡

第1号竪穴建物跡 第17图23



下本郷遺跡

第1号竪穴建物跡 第19图87



下本郷遺跡 第1号竪穴建物跡 第19图90

(左:上面、右:下面)



下本郷遺跡

第1号竪穴建物跡 第19图91



下本郷遺跡

遺構外 第29图25



下本郷遺跡 第2号溝跡 第25图4 (左:表、右:裏)



下本郷遺跡

第1号竪穴建物跡

第19图88・89

第3号溝跡

第25图9・10

第4号溝跡

第27图28・30

遺構外

第28图17・19



下本郷遺跡

第1号竪穴遺構

第21图15

第4号溝跡

第27图29

遺構外

第28图18

下本郷遺跡

遺構外 第 28 図 20 (左: 上面、右: 下面)



下本郷遺跡

第 1 号土坑

第 23 図 1

第 3 号溝跡

第 25 図 11・12

遺構外

第 29 図 21・23・24



下本郷遺跡

第 3 号溝跡

第 25 図 5 (平瓦)

6 (丸瓦)

第 4 号溝跡

第 26 図 12・13 (平瓦)

14・15 (丸瓦)



下本郷遺跡

第 1 号竪穴遺構

鉄滓



下本郷遺跡

第 4 号溝跡

第 26 図 16





大竹遺跡第2次調査 調査区全景 (北から)



大竹遺跡第2次調査

第1～3号土坑 第35図 SK 1-1・SK 3-1～3

第1号性格不明遺構 第35図 SX 1-1

遺構外 第37図 1～6



大竹遺跡第3次調査 調査区全景（東から）



大竹遺跡第3次調査 第2号ピット 第43図2-4



大竹遺跡第3次調査 第2号トレンチ 第45図2-4



大竹遺跡第3次調査 第4号トレンチ 第46図4-6



大竹遺跡第3次調査
ピット2 第43図2-1



大竹遺跡第3次調査 第4号トレンチ 第46図4-7

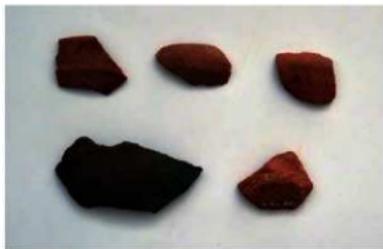
図版 24



大竹遺跡第3次調査

第2・5・6号土坑

第41図 2-1、5-1~4・6、6-1~4



大竹遺跡第3次調査

第2~4号ピット

第43図 2-2・3、3-1、4-1・2



大竹遺跡第3次調査

第1号トレンチ 第45図 1-1~8



大竹遺跡第3次調査

第2号トレンチ 第45図 2-1~3・5~7

第3号トレンチ 第45図 3-1~4



大竹遺跡第3次調査 第4号トレンチ 第46図 4-9



大竹遺跡第3次調査

第4号トレンチ

第46図 4-11



大竹遺跡第3次調査
第4号トレンチ
第46図 4-1～5・8・10・12～19



大竹遺跡第3次調査
第5号トレンチ
第47図 5-1～10・12・15・17



大竹遺跡第3次調査
第5号トレンチ 第47図 5-18～23・25・26



大竹遺跡第3次調査
第5号トレンチ 第48図 5-27～38



大竹遺跡第3次調査
第5号トレンチ 第48図 5-39～41



大竹遺跡第3次調査
遺構外 第49図 1～19



瀬戸山古墳群第 14 号墳 調査区全景 (南西から)



瀬戸山古墳群第 14 号墳 周溝遺物出土状況 (南から)



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 54 図 1



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 54 図 2



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 54 図 3



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 54 図 4



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 54 図 5



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 55 図 6



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 55 図 7



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 56 図 37



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 55 図 8

瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 55 図 9 ~ 20
第 56 図 38



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 56 図 21 ~ 31



瀬戸山古墳群第 14 号墳 第 56 図 32 ~ 36



瀬戸山古墳群第 14 号墳
第 1 号性格不明遺構 第 58 図 1
遺構外 第 59 図 1 ~ 3



報 告 書 抄 録

ふりがな	ひこまついせき	しもほんごういせき	おおだけいせき	せとやまこふんでんたい	ごうふん			
書名	彦松遺跡	下本郷遺跡	大竹遺跡Ⅱ・Ⅲ	瀬戸山古墳群第14号墳				
副書名	市内遺跡発掘調査報告書Ⅷ							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	吉野 健 大野 美知子							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 埼玉県熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL.048-536-5062							
発行年月日	西暦 2022 (令和4) 年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (°'〃)	東経 (°'〃)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
彦松遺跡	熊谷市妻沼字彦松 1723番17	11202	61-053	36° 13' 23"	139° 22' 26"	20160905 ～ 20161005	40.57	記録保存 調査
下本郷遺跡	熊谷市今井字下本郷 839番1	11202	59-117	36° 10' 33"	139° 23' 47"	20160425 ～ 20160527	58.79	
大竹遺跡 (第2次調査)	熊谷市西別府字瀬ノ下 1686番6	11202	59-003	36° 11' 21"	139° 19' 57"	20180423 ～ 20180525	67.07	
大竹遺跡 (第3次調査)	熊谷市西別府字瀬ノ下 1686番4・8			36° 11' 21"	139° 19' 56"	20180529 ～ 20180713	99.37	
瀬戸山古墳群 第14号墳	熊谷市平塚新田字前原 518番1	11202	59-027 -27	36° 6' 43"	139° 22' 23"	20180806 ～ 20180827	62.10	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
彦松遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴建物跡 2 土坑 5 ビット 17 溝跡 1	土師器 須恵器 灰釉陶器 丸瓦	瓦質土器 磨石	土坑出土の須恵器 坏内面に朱墨が認められ、パレット としての用途が考 えられる。		
下本郷遺跡	集落跡	奈良・平安時代 近世	竪穴建物跡 1 竪穴遺構 1 土坑 2 溝跡 4	土師器 須恵器 灰釉陶器 土鐘 石製紡錘車 砥石	土師質土器 瓦質土器 陶器 磁器 平瓦 丸瓦 羽口 鎌 釘 石臼 須恵器埴輪壺 磨石 刀子 桃種子	本遺跡発見の端緒 となった。		
大竹遺跡 (第2次調査)	集落跡	奈良・平安時代 中世・近世	土坑 5 ビット 20 性格不明遺構 1	土師器 須恵器 土師質土器 陶器 瓦質陶器 鉄製品 砥石		奈良・平安時代から 中世にかけての 集落が確認された。		
大竹遺跡 (第3次調査)	集落跡	奈良・平安時代 中世・近世	土坑 6 ビット 4	土師器 須恵器 灰釉陶器 須恵系土師質土器 羽釜 土師質土器 陶器 磁器 銭貨 鉄製品 土製品 石製品		桑畑により攪乱さ れた奈良・平安時 代～中世・近世の 集落の痕跡が推定 できた。		
瀬戸山古墳群 第14号墳	古墳群	古墳時代後期 時期不明	古墳周溝 1 性格不明遺構 1	円筒埴輪 土師器		削平されていた古 墳の周溝が検出さ れた。		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第43集

彦 松 遺 跡
下 本 郷 遺 跡
大 竹 遺 跡Ⅱ・Ⅲ
瀬戸山古墳群14号墳

- 市内遺跡発掘調査報告書Ⅷ -

令和4年3月25日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関東図書株式会社

